THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿五年　第九號

第二百五十八號

大隈伯序

英人氣質 思ひ出の記

早稲田大學教授 永井柳太郎君著

本書は著者がオックスフォード大學在學中、或は學堂に於いて或は家庭に於いて、親しく英人に交り、具さに其國民性を尋討し、歸來新に著はしたるものなり。從來の漫遊記とは其選を異にし、引例豐富にして趣味横溢、問題の及ぶところ上は貴族社會より、下は勞働者に至るまで、苟も英國人の氣質生活を知るに足るものは、悉く之を輕快流麗の筆端に上せて餘す處なし。

◎上製金文字入
◎正價八拾錢
◎郵稅八錢

海老名彈正先生新著

新國民の修養

海老名先生は、現代宗教界の巨人也。其學、其識、其辯、其文、悉くこれ一代の珍とすべし。本書は、先生が椽大の筆を揮ふて國民、宗教、教育の三方面より新興國民の修養法を說きたるもの、深遠の想、奕々の文、蓋し近來稀に見るの大著。

◎上製金文字入
◎正價一圓
◎郵稅八錢

東京京橋南紺屋町
電話新橋八四七 振替口座三二六
實業之日本社

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

フエヒネル先生原著　平田元吉先生(第三高等學校教授文學士)譯

死後の生活

フエヒネルは哲學史上特筆大書せらるゝ十九世紀の鴻儒にして、實に今日の經驗的心理學、經驗的美學の基礎を置きし者たり。『死後の生活』は此經驗的傾向の大哲學者が、現世の事實を基とし、最高の詩的想像を參へ、或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱横に叙述したる、詩と科學との靈妙なる融合なり。氏の説を以てせば、千里眼、幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得。故に本書は親愛者を失ひし人、死生の疑惑に苦しむ者に無二の慰藉となり、一般の讀者に津々たる興味を配ち、又學者研究者に豐富なる暗示刺戟を與ふるや疑ふ可からず。廣く江湖の愛讀を望む。

定價金五十錢　郵稅金六錢

東洋大學講師　釋清潭先生著

和漢高僧名詩新釋

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に渉り、和は虎關以後絶海義堂に至る、大凡七十餘人の名詩を新釋したる者なり、其詩雄渾なるもの、高古なるもの、典雅なるもの、勁健なるもの、自然なるもの、清秀なるもの、幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し、平易を旨として、深切を極む。和漢高僧詩篇を釋義して、此の如きもの、恐くば曠前なるべし。

菊半截判美本　定價金五十錢　郵稅金六錢

東京小石川原町六　振替東京一五八六六　丙午出版社

東京小石川原町六　振替東京一三五三　鷄聲堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

時代代表日本英雄傳の內 再版

山路愛山先生新著

◎五版 **足利尊氏** 正價五十五錢 郵稅六錢

◎三版 **源頼朝** 正價九十五錢 郵稅十四錢

西郷隆盛

上卷 (不折畫肖像入) 正價七十五錢 郵稅十錢 下卷近刊

◀第六版出來▶

高橋五郎先生譯

ベーコン論說集

世界論文集中の珍として三百年來學者の爭て愛誦するベーコン論文集の全譯也。句々金玉『之を讀む二十回、讀む每に新意味を發見し來る』とは眞なり、世て處世經たるべし。以て思想辭典たるべし、いま斯學大家の逐字譯成る。

全一冊 總クロース 正價一圓廿錢 郵稅十二錢

要目

◎眞理を論ず◎交友を論ず◎戀愛を論ず◎高地位を論ず◎邦國の眞偉大を論ず
◎死を論ず◎商議を論ず◎旅行を論ず◎無神說を論ず◎人に於ける天性を論ず
◎富を論ず◎猜疑を論ず◎貴族を論ず◎功名心を論ず◎事物の變遷を論ず
◎美を論ず◎攝生を論ず◎豪膽を論ず◎習慣と教育を論ず◎娟嫉及羨望を論ず
◎復讐を論ず◎談話を論ず◎園囿を論ず◎青年と老年を論ず◎畸形及癈疾を論ず
◎逆運を論ず◎幸運を論ず◎統治を論ず◎結婚と獨身を論ず◎仁愛慈悲を論ず
◎迷信を論ず◎稱讃を論ず◎忠告を論ず◎虛僞及假扮を論ず◎禮式と禮儀を論ず
◎狡猾を論ず◎親子を論ず◎遲を論ず◎學問及讀書を論ず◎從者及朋友を論ず
◎自愛を論ず◎忿怒を論ず◎似智を論ず◎名譽と聲聞を論ず⊙外十四章

▲時事新報評『…高橋氏の『ベーコン論說集』は我飜譯界の重鎭と稱せらるる高橋五郎氏の妙腕によりて遺憾なく邦語に飜譯せられたり。余は之を原文に對照して實に譯者の老熟せる手腕に敬服せり……』

發行所 東京神田區雉子町 振替東京七九九五 玄黄社

十月一日

中央公論

發行

秋期大附錄號

我「中央公論」春秋二期の大附錄號は最も材料の精選に苦心し、常に傑れたる長篇大作をのみ掲載することに於て決して他の追從を許さず、特に本號は文壇の重鎭たる三大家の苦心の作に配するに、英氣覇氣滿々たる二新進作家の自信ある作を以てす、庚戌文壇後半期の光彩は必らずや本號より發せん。創作の確定せるものは

沈默（百卅枚の長篇小説）……眞山青果

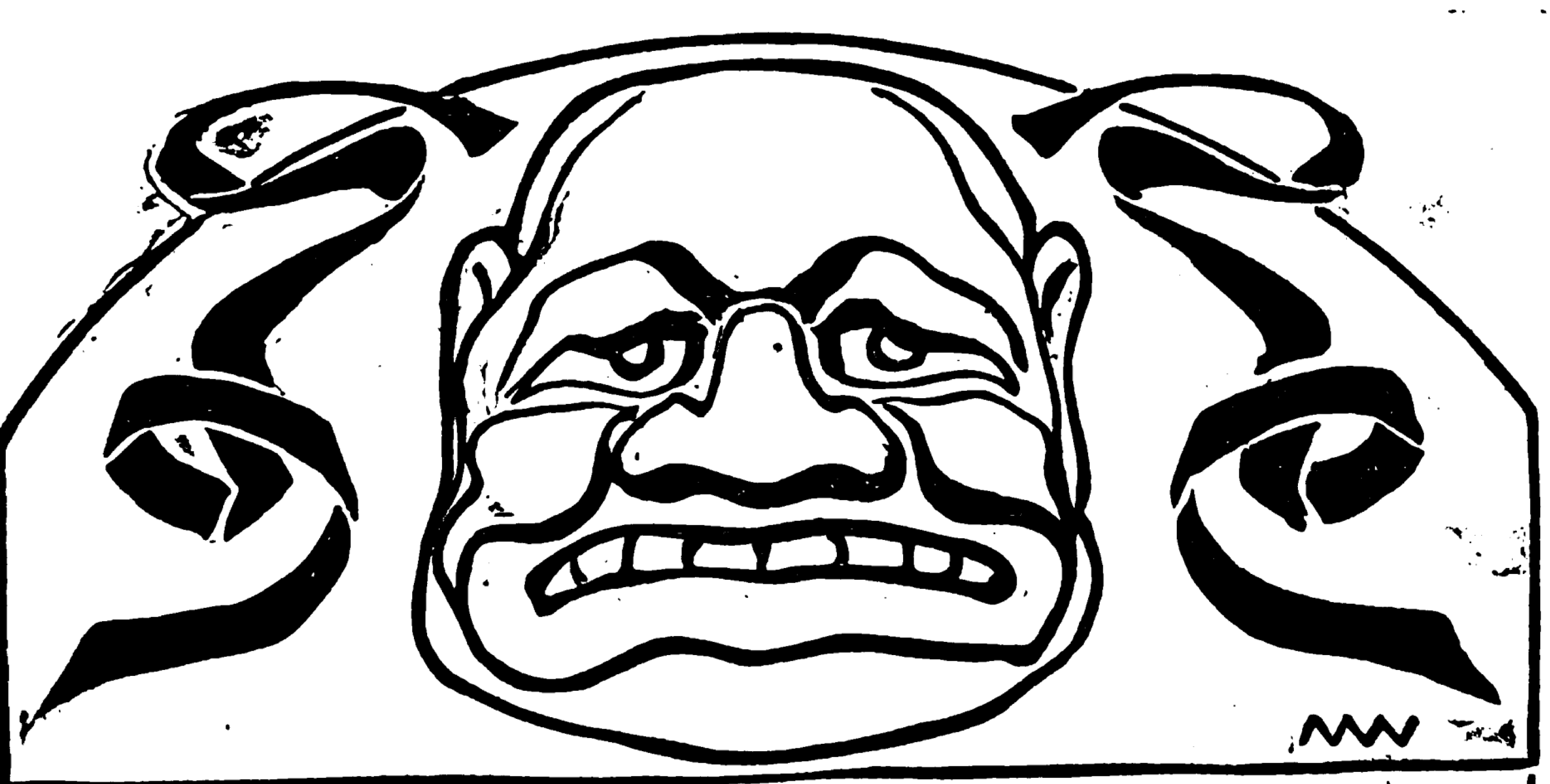
芥溜（百枚の脚本三幕物）……松本苦味

題未定（五十枚内外の小説）……田山花袋

病血（六十五枚の小説）……波山不規夫

微光（百卅枚の長篇小説）……正宗白鳥

の五篇にして論文に於ても已に第一流の大家數氏に依頼し、而して竹越與三郎田中王堂の二氏は何れも長大論文を寄稿せらるゝことを確約せられ、人物評論には最も目醒ましき人物を捉へ來つて、諸名家縱橫の批判に任せんと欲す。乞ふ括目翹首して本號の出づるを待て！



中央公論第廿五年第九號目次



三版

岡谷繁實先生著

南朝の元勳

◎菊版三百八十頁 上製函入 正價壹圓廿錢 送料八錢

▼本書は著者が例の犀利なる史眼と明快なる文章とを云て護良親王、楠正成等南朝の忠臣九士の事蹟を詳述せられたれば一讀以て興味ある中古の史實を知ると共に芳烈なる大和魂の磅礴たるを窺ふに足るべし

天覽

岡谷繁實先生著

袖珍 名將言行錄

◎第一編(五版)第二編(三版)第三編出來

▲ポケット入袖珍美本 正價金六拾錢 送料六錢▼

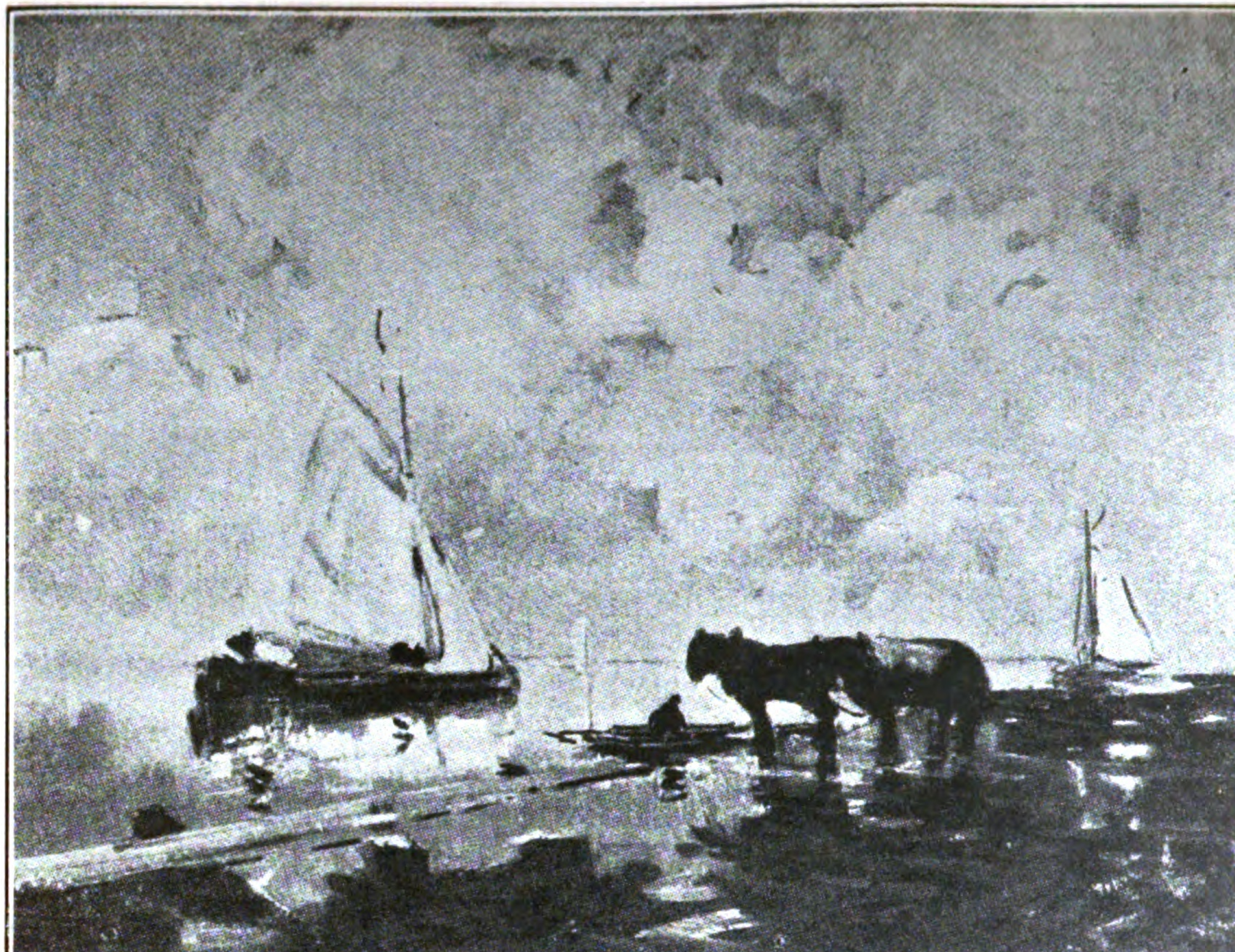
大隈伯曰く。本書は縦に讀めば日本歴史となり、横に讀めば即ち國家の柱石なりし偉人傳となる、之れ實に國民必讀の良書なり

東京本郷森川町 振替壹九六四七番

文成社

電話下谷 三〇一一 三二一〇

"*La Plage*"



By Alexandre Marcette

中央公論



第二十五年
第九號
第二百五十八號

韓國併合成る

韓國合併の事は、夙に我が政府の豫定せる所にして、寺内統監の赴任するや先づ專ら其の實行時機を窺へるが、韓國首相李完用は、刺客の毒手に罹りて負傷幸ひに癒えたるも、衰弱甚だしと稱して辭職の意あり、彼れ韓國に於て勳位人臣を極め、資財また百萬に上りて、幾んど別に求むる所なきが故に、韓國を日本の有とするが如き問題には、全然手を觸れざらんことを欲せし也

然れども日本は成るべく彼れをして局に當らしむるを便宜とす、若し別人をして内閣を組織せしむれば、別に新たなる面倒あり、而して彼の閣臣の手を經ずして合併を強行するが如きは、策として拙の最も拙なるものなれば也、李の智謀ありて斷行の勇に富める、當局として殊に適任者たり、彼れも亦局面

の難きを知るも、之を逸すればまた頗ぶる失意の地に立つべきを思ひ、躊躇逡巡して決する能はざりしが、寺内統監の態度の妙なる、彼れ竟に心を決して局に立つことゝなりしは、實に八月中旬にして、彼れは爾來元老間の同意を得るに奔走したりしに、金允植の如き合併の已む可らざるを察して、挺身之に同意せしかば、事の進行意外に圓滑にして、十六日には略ぼ大體の態度決し、廿日に至つて成案を見、寺内李間に内約成立するに至りたりき

玆に於てか廿二日樞密院の御前會議となり、其の夜京城に於て彼我の調印を終りたるが如し、政府は始め韓國合併の内意を關係列國に表示せしが、玆に至て更に成案を内示することゝなり、其の手續の終るを俟つて、合併を公表すべしといへば、本誌の世に出づる頃は、素より巨細の事分明するなるべし

韓國合併の事は、條約を以て實行し、韓國皇帝は其の主權及び領土權を擧げて日本天皇に讓渡すの詔勅を發し、而して日本天皇は之に由て韓國を版圖とする宣言を發せらるべし、韓國は自今改めて日本帝國の領土として朝鮮と呼稱し、韓國皇帝は朝鮮王の名義を有し、從來の皇室財産を私有すると同時に、日本の皇族に准じて、年々百五十萬圓の支給を受くべし、韓國の皇族及び有功の元老大臣其の他名族は、略々日本の華族令に準據して新に華族に列せらるべし(貴族院議員たる資格を有せざること勿論也)、又現に官吏たる韓國人は成るべく其の職を失はざるべく、兩班中の名族は秩祿を得、他は就産の道を授けらるべし

大體は斯の如し、韓國と列國との條約は、主權の消滅と共に當然無效に歸すべく、唯だ列國の臣民の

既得權を重んずるがため、當分其の特權を享有せしむべく、關稅は現在のまゝなりといふ、外人の有する治外法權の直ちに撤廢せらるゝや否や、吾人未だ確知するに至らず、此の點に於て殊に大なる遺憾を覺ゆ、治外法權を存するが如きは、實に失體の甚だ大なるものなれば也

此の併合に由て、日本は新たに一萬四千百廿餘方哩の領土と、人口約一千萬とを增加すべし、帝國主義に取つては實に一大成功たること疑ふ可らざる也

朝鮮は我れと民族を同じくし、語源を齊しくす、抑も素盞雄尊、御毛沼尊(神武天皇の皇兄)の御事は古し、神功皇后の三韓征服以後、齊明天皇に至るまで約五百年の間、歷朝の韓國に累せらるゝや實に大なりき、天智天皇の時、彼れ唐に併呑せられてより、明治政府に至るまでは、秀吉の征韓を除けば多く關係なし、明治六年征韓論起つてより、大志あるもの遠く神功の遺圖を繼ぎ、朝鮮を統一する企畫を絕たず、日淸日露の兩戰役も其の半は實に此のためなりき

ポーツマス條約以後、我れ既に宗主權を韓國に立つ、事實併合と多く異ならず、今や唯だ一步を進めて其の形式を完成したるのみ、然かも之に由て神功以來の鴻業を完成すと稱するも不可ならじ、帝國主義者が以て一大成功と爲す、必らずしも不當ならざるのみ

吾人は今にして多く論辯を費すの餘地あらず、唯だ希ふ、我が國民は韓國合併に由て國費の增加に耐ゆるの外、尙ほ其の責任の甚だ大を加へたるを自覺して、多く發奮砥勵せんことを、殊に韓國の舊君臣を視て亡國の民と看做すが如きことなく、我れと同一種族、同語源にして今や齊しく天皇と政府との統

治管轄の下に在る同國民なるを自覺し、彼等を惡政虐政より救ひ出すと共に、其の苦を倶にし樂を同くするの公心を有せんことを、既に名を得、併せて實を得ざる可らず、徒らに領土人口を加へたるを矜驕するが如きは罪惡也、然り、天の冥罰を享くるや必然也、吾人は殊に紳に書して以て我が官民を戒めんと欲す、我が皇祖皇宗の鴻謨は、仁德の化を四表に布くに在り、韓國併合は素より鴻謨に合す、然かも仁德の化を布くに非ざれば叛く、嗚呼夫れ思はざる可けんや

桂侯、西園寺侯の比較

（一）

桂侯と西園寺侯とは、今の政界を兩分して各其の一を占有すと稱せらる、果して然るか然らざる乎、玆に此の兩侯を並び評ずるも時に取ての一興ならずとせず、而して政局に注目する人に取て、また多少の資料たらずんばあらず

桂侯は弘化四年十一月廿八日出生にして年歯六十四、西園寺侯は嘉永二年十月廿三日生にして六十二共に知命以上にして、分別に惑ふ頃にもあらず、然かも二者共に艶脂の嗜好の止まざるは奇と謂べし

桂侯は獨逸語を話し、少しく英語をも解し、西園寺侯は佛語を能くす、西園寺侯の內閣には內務大臣原氏、次官吉原氏、警保局長古賀氏等が總べて佛語家なりしに、今の桂內閣には、內務大臣平田男、次

官一木氏、警保局長有松氏の共に獨逸語通なるも一奇也、但だ前者を佛國型、後者を獨逸型とするは皮相なれども、西園寺侯が何處となく垢拔けして、洒脫の趣あるに反して、桂侯が如何にも野暮臭く、重厚なるは奇なりとすべし、或は學ぶ所の國語に由て、自然に其の國風に感化せられたる所ある乎、將た天性素より然る乎

（二）

閑話休題として、吾人は更に眞面目に桂西園寺の兩侯を比較し批評せざる可らず

西園寺侯は其の人品の高雅なる、遙かに桂侯の上にあり、清節孤高、恰かも雲外の白鶴の如く、殆んど俗間のものに非ず、桂侯が動もすれば金權に夤緣せんとして、王莽恭謙士に下るの態あるに比するに到底同日に語る可らず、至尊の信寵を得ると、西侯は恐らくば遠く桂侯の上にあらん、蓋し西侯は至尊御幼時の御學友にして、最も親近の誼あれば也、桂侯は調和の天材あるに於て、當世能く及ぶものなしと雖も、西侯が淸廉にして權勢に戀著せざるがため黨人に崇仰せられて、由て以て重きを爲すが如き資望あらず

西園寺侯は、別に推輓して至尊に重きを措かるべき後援者を有せず、伊藤公在りし時は公常に侯の背後にありしがため、至尊政治上の寄托重大なりしと雖も、公の逝後は恐らくば然る能はざらん、桂侯は至尊の御信寵竟に西園寺侯に及ばずと雖も、政治上の重寄を享受すべき經歷と、文武の大事に方つて、最も至尊の御信賴を忝くする山縣公を背後に擁するとに由て、御信任は決して西侯の下にあらずと斷ず

るを至當とす

西侯は其の人物の高雅にして而して飄逸なる、動もすれば政治上の奮鬪惡戰を好まず、權勢を視ると時に敝履の如きこと多し、此の執着なきは、政事家としての一大缺點にして、殊に黨人等の悅ばざる處、又士の死心を得がたき所以なりとす、淸廉にして寸分の私情なき人は、竟に斯の如くならざるを得ざる耳、桂侯は俗に十六方美人主義と稱せられ、伊藤公の八方美人主義に二倍すと評價せられて、媚撫の態、人をして動もすれば心を寬ふせしむると雖も、實は外柔にして內剛也、所謂鐵拳を天鵞絨の手套に包む底の資質にして、常に事を創するや、或る程度までを讓步の限界と定め、其の限界までは讓步し調和して以て所謂妥協を成立せしむると雖も、一步だも其の限界を超ゆるを容さず、之を超えんとするものあれば敢然として奮鬪し苦戰するを辭せず、現に伊藤公大隈伯を敵として一大奮戰を爲すの決心をも爲したる事ありき、是れ政事家として遙かに西園寺侯に優さる強味ある多言を俟たずとす

西園寺侯は多く數字の明を缺如するに似たり、卽ち財政の事の如きは、多く精通する所にあらず、且つ公卿の出にして、陸海軍に緣故なきが爲め、軍人輩をして往々長袖者流と看做さしむるを免かれず、爲めに陸海軍を制御して、財政の燮理を全くするが如きは、蓋し其の長所にあらず、是れ亦桂侯に及ばざると遠しとせざる可らず

（三）

桂、西兩侯を比較するに、短長一ならず、西侯は人物に於て長じ、桂侯は政事家として長ず、然かも

總理大臣としての人格には、二者優劣なしと定むるを以て最も公平なる評と爲さゞる可らず、

然れども總理大臣としての勢力に至ては、二者大に逕庭あり、西侯は政友會の總裁として、衆議院に絕對の勢力を占むるも、桂侯は貴族院の多數を綜攬して、曾て其の勢ひを減せず、其の據る所異なりと雖も、其の力や相匹敵せりとせざる可らず、勿論政友會の多數は、結合未だ堅からず、桂侯にして一び手を擧げて辛辣なる策に出てば、竟に崩壞を免かれずと雖も、貴族院に於ける桂派の勢力といふもの、亦思ふ程に堅固にあらず、西園寺侯以下政友會の謀將等にして、眞に懸命の奮鬪を爲さば、假令今日直ちに陷沒し得ずとするも、永く現勢を保有せしめざるや疑ふ可らず、少くも兩侯の兩院に於ける勢力相如くとするを公議とすべく、但だ桂派の鬪將と宿臣の貴族院に多き丈け、其れ丈け聊か强味とすべきのみ

然れども玆に逸す可らざるは伊藤公の薨去也、至尊の公に對する御信任は、稍々山縣公の上にありき軍國の事勿論主として山公に信倚し給へりしも、內政外交の事、殊に憲法政治の事に至ては、伊公主として重寄を辱くしたりき、而して山公が桂侯を其の繼承者と做すが如く、伊公も亦實に西侯を其の繼嗣者として、互ひに相扶くる所ありき、卽ち伊公は西侯のため背後にあつて、政治上の重寄を享けしめしのみならず、其の勢力を以て閣臣たるべき人材を羅致して以て西侯の用を爲さしめたりしを以て、西侯は一旦大命を拜するも、直ちに內閣を組織するに困ぜざりき

然るに伊公薨ずるや、西侯は其の背後の後見役を失ひしに止まらず、多くの人材をして其の用を爲さ

しむる便宜をも失へり、是れ西侯に取ての大打撃にして、秤量上嘗て桂侯と略々均衡を得たりし西侯は、伊公の死のために頓に其の秤器を輕く揚らしむるを免かれざると、運命の然らしむる所なりと雖も、また太だ數奇なりとせざる可らず

且つ伊公の死後、至尊の御信任は、擧げて山公の一身に集まれりと謂ふも過言ならず、是れ桂派の大なる强味にして、其の强味なる丈け其れ丈け西園寺派の弱味とす、今は實に山縣系統全盛の時にして、桂一派の密かに得意を催ふす所ならざらんや

世の政局を視るもの、動もすれば宮中の御信任に重きを措かざるが如きも、是れ日本の國體國勢を辨へざる迂愚の極也、憲法政治といへば單に議院の多數にて決定するものと做し、また主權者たる至尊を眼中に措かざる黨人一味の見解にして、畢竟英國の議院政治に思想を凍結されしのみ、我が國に於ては、至尊の御信任を受けざるもの到底內閣に大臣たるを得ず、苟くも至尊の御信任を缺かん乎、一日も其職に在ると能はず、是れ國體及び現憲法の然らしむる所、また至尊御英明の致す所たり、松方侯、大隈伯と雖も此の點に於ては苦き經驗を有するのみならず、政黨より入て大臣たりしもの、共に齊しく承認する所なるべし、故に伊藤公亡き今日に於て、西園寺侯假りに內閣組織の大命を拜したりとせよ、侯は其の統率する所の政友會及び貴族院に有する自派のみより閣臣を擧げ得るや否や、松田原の二氏は兎も角も世の承認を得ん、堀田氏千家男に加ふるに或は秋元子を以てするも亦多く異とするもの莫からん、鳩山、杉田、元田、大岡の諸氏を以てして、果して世間を承服せしむべきや否や、抑も又宮中の御信任

を厚くし得るや否や、假令西園寺侯の御信寵を以てすと雖も、恐らくば然る能はざるべし、必らずや桂派と妥協して陸海軍を据置とするか、彼の派の兩三子を拔て聯立的と爲すにあらざれば、到底速かに内閣を組織し得ざる可し

桂派に至ては、現閣僚の外に、清浦子あり、久保田、波多野、山縣等の前閣僚あるに止まらず、大臣たるべき資望適質を有するもの雲の如し、西園寺侯は少からざる兵卒を有するも將帥の材に乏しく、桂派は卒伍と共に謀臣猛將綺羅星の如く、人物甚だ饒か也

（四）

西園寺侯は到底政友會や貴族院の一派のみを率ゐては政局に重きを爲すに足らず、必らずや他と聯合して以て將材を網羅するにあらざれば、未だ俄かに政權を得べからず

或は山本伯と結ぶべきをいふものあり、然れども伯や永く西侯の下風に立つものに非ず、西侯避けて伯を主帥とするも、伯や察々の明餘りあつて、英毅人に過ぐ、能く紛々擾々たる黨人を統率するに堪ゆべきや否や、實に疑問たらざるを得ず

或は又寺内子を迎えんといふものあり、子聰明にして又將器あり、山本伯の如く察々に過ぎざるが故に、或は黨人と群居に堪ゆべしと雖も、子が全然山縣系を離れんとは、最も疑問とせざる可らず、西園寺内閣の當時、陸相たりし寺内子の態度は、公明にして深く政友會の悦べる處、彼等は之を以て殊に寺内子に流水の心あるが如くに看做すも、實は其の眞に徹せざるのみ、若し聯立的ならば或は可なり、然

かも其の場合には、山縣公桂侯の承認を經たる後ならざる可らず

思ふに山本伯と寺內子とは、共に陸海軍の大將たり、苟くも過誤なき限り他年必らず元帥たるべき人たり、此の榮譽ある未來の地位を拋ち、サアベルを捨てゝ政黨に入らんとは伯子に於て實は冒險の一種也、伯子が之を敢てせんと最も疑問たらざるを得ざる也

若し全然聯立ならば、彼の松方侯大隈伯の如し、苟くも相合はずんば直ちに相分れて、而して其の感情や呉越も啻だならざらん、果して然らば是れ西園寺侯に取て一の加ふる無きのみ、寧ろ敵を作るに恋しきのみ、而して政友會依然として人なきに苦まんのみ

政友會を率ゆる西園寺侯の地位も亦甚だ苦しといふべし、其の人必らずしも桂侯に劣らざるも、今の政局の分野に在ては其の勢力に逕庭あり、勢ひ竟に斯の如くならざるを得ざる也、西園寺侯が衆議院に過半數を占むる政友會を提げながら、尙ほ陰忍して雌伏する其の苦衷は、苟くも政局を視るものの齊しく同情に耐えざる所なるべし

（五）

今日全盛を極むる山縣系統として、桂侯の一派が最大得意の絕頂に在るは、何人も異論無かるべし

然れども桂侯は盛名の下久しく留まる可らずとする位ゐの分別は有らん、然らば則ち其の退隱の時、何人か其の後繼者たるべき乎、現時政界の分野を占有すと稱せらるゝ西園寺侯乎、或は同じ山縣系統の寺內子乎、將た淸浦子乎、抑も又山本伯乎、寺內子と山本伯とは多分西園寺侯と聯立を策すべし、最も

緊密なる今際に於ての聯立を策すべし、然らずんば西園寺侯と政友會とは、未だ政權を得る能はざる也得んとすれば更に別様の大手法を以て、根本的に現在の政局を打破せざる可らず、知らず之を打破する者今日之ありや否や、政友國民兩黨の聯合といふが如きは、之を打破するに微細の力だに無し

歳月は大なる變化の實行者也、今の政局に立つもの、空しく歳月の經過を待つのみなる乎、嗚呼空しく歳月を過すのみ乎

内閣洪水に祟らる

(上)

伊藤公薨後、山縣系統全盛の今日、桂内閣は得意の絶頂に在りて、自から萬歳を謳ふなるべし、殊に韓國併合の事全く成らば、其の賞功として勳爵の陞授を夢むも有らん、始めは日英同盟の功に由り、後には日露戰役の功に由り、子爵より、伯爵、侯爵にまで陞叙されし桂太郎氏は、日韓合邦に由て或は公爵たらんとを夢想するも亦測る可らず

天は二物を與へず、驕泰なるものには則ち咎を受けしむ、桂内閣大得意の時、怪くも奇なる哉、未曾有の大洪水ありて、天譴の洵に偶然ならざるを知らしむ、苟くも心あるものは何ぞ翼然として容を改め、悚然として心に畏れざるを得んや

八月初旬より中旬に掛けての洪水は、東京府を筆頭として、靜岡、山梨、神奈川、埼玉、千葉、茨城、群馬、長野、新潟、栃木、福島、山形、宮城、岩手の十四縣に渉り、到る處堤防を破壞し、道路山崖を崩壞し、家屋橋梁を流失し、人畜を死傷せしめ、稼穡を浸害せしめたるの慘なる、彼の六十年來未曾有と稱せられし明治四十年の洪水に過ぐること三倍、遠く百二十五年前の天明六年丙午の秋の慘禍に相似たりといふ

加ふるに土用入以來不順の氣節のみなりしに、出水中例年に無き冷氣を催ふし、陰濕の天氣を繼續する幾んど一旬、關東東北を擧げて甚だしく凶歉なること最早爭ふ可らず、幸ひに九州のみ天候順當にして暑氣また十二分なるを以て、米作の豐饒疑ひなしと稱するも、中國、四國、近畿に至ては、到底平年作以上たるを望む可らず、然るに東海の一部、並びに關東東北を擧げて甚だしき凶歉なりとせば、人心の險惡ならんこと素より言を俟たずとす、桂內閣は幸ひにして公債政策に成功し、一時中外をして之に謳歌せしめたりしも、其の借換の結果豫想の如くならざりしとて、早くも悲觀の餘り、多少怨嗟の聲を揚ぐるものなきにしもあらず、彼等の定見なきこと實に嗤ふに堪えたりと雖も、內閣が其の唯一の恃みとせる財政々策に就てすら、また以て謳歌のみならざる兆證を看るべき乎、此の時に方つて米作凶歉を見ば、怨嗟の聲、呪咀の響と變ずる莫きを保すべからざるや論莫きのみ

昨秋は未曾有の豐作なりしに拘らず、米價下落のため、地主等の利益大に減じて、竟に豐年を歎ずるの奇觀を呈し、內閣は民論（實は百姓論）に迫られて、竟に地租輕減を餘儀なくせしめらるゝを免かれざ

りしが、今や凶歉のため、米價騰貴するも地主等悅ばず、相率ゐて内閣を呪咀せんとす、人氣險惡なる時は如何なる内閣も自から支ゆると難し、況んや其の最も恃める財政々策すら、幾んど變して呪咀の標的たらんとするをや

單に東京府下の狀況のみを視るも、浸水家屋十五萬戸に上り、然かも一週間内外水中に在りしもの多きがため、惡疫蔓延の憂ひ最も多し、何ぞ況んや汽船にして、既に外國より虎列拉病を輸入し來れるあるをや、洪水と凶歉との後、更らに最も怖るべき惡疫の猖獗を帝都に視んか、交通の障害を來すと共に、商業上に大打擊を蒙むるべきや多言を要せず、即ち人心の險惡なる、應さに其の頂點に達せざらんとするも得べからざる也

昔は宰相丙吉、途を往くに人の爭ふて死傷するを顧みず、却つて牛の喘ぐを掛念として問ふ所ありき、時期順ならずして作物凶歉なるは、眞に生民の憂にして、宰相の大に意を致すべき所なれば也、今の内閣に假令丙吉其の人無しと雖も、此の大災を視て、何ぞ變然悚然たらざるを得んや

(下)

今度の洪水の最中に、首相桂侯は輕井澤の別墅に在り、内相平田男は逗子の別莊に在り、共に十六日若くば十七日を以て辛ふじて歸京したりき、都鄙の新聞紙の多數は、兩相の甚だ不親切なるを鳴らし、甚だしきは力を極めて攻擊するものすらあり

桂侯は十日既に歸京せんと欲したりしが如きも、碓氷峠の墜道を始め、群馬、埼玉の沿道を通じて不

通且つ危險の處多く、近く輕井澤の隣なる追分沓掛の兩驛間また汽車不通となり、中央東線にも不通の個所少からざりしが故に、苟くも翼ある鳥にあらざる以上、全く動くと能はざりしなるべし、然れども郵便物の大に延滯したりしに拘らず、竟に全く不通ならざりしに視るに、若し郵便脚夫に讓らざる邁進の氣あらば、萬障を排しても今少しく早く歸京せられざりしには非ざらん乎、吾人は素より侯が其の愛妻と共に別墅に閑眠を貪ぼれりとは爲さざるも、新聞紙の非難の起らざりし前早く既に歸京して事を處するの誠意ありしや否やに至ては、聊か疑ひなきを得ざるのみ

平田男に至ては、全く憐むべき境遇にありしが如し、彼れ病を其の別莊に養ふとき、不幸にして出水の禍あり、一度は病を押して、舟路入京せんとしたりしも、眩暈のために果す能はず、辛ふじて十六日の朝歸京し得たりしといふ、其の事實を聞けば、同情すべき點頗ぶる多し、蓋し男や誠實を以て名ある人、此際悠遊すべき道理あらず

然かも時に處して最も責任ある兩相早く歸らず、至尊却つて御軫念の極、竟に親しく侍從を浸水地に派し給へる時、始めて兩相の歸れるあり、世上の多くが其の事情を究めずして、一概に緩慢不親切と難ずる、また洵に已むを得ざるもの乎、而して天下の多數が新聞紙の筆に魅せられて、大抵兩相を緩慢且つ不親切と爲すも、また實に已むを得ざる結果とす

此の一事を以て些末事と做すと勿れ、洪水の慘害の百二十五年來未曾有なりといふの一事、既に天下蒼生をして愕然惶然たらしむ、其の心既に平を失ふに方つて、天子深憂の事傳はり、天下皆悚然襲然た

らざるなし、然るに當途の最も職分重き兩相帝都に在らず、然かも其の居處を問へば、共に避暑地の別墅なりといふ、天下蒼生の或は切齒して怒る、蓋し已むを得ざるの情勢ならずや、夫れ人心少しにても平かならざらん乎、其の鬱積する處、竟に內閣をも覆へすに至ると、從來其の例に乏しからず、政事家の最も憂ひとすべきは人心の去就にあり

何ぞ況んや其の人心を失はんとする時と事とは、未曾有の慘害に存するをや、又況んや凶歉と疫病と併せ至りて、人心應さに險惡を極めんとする時たるをや、此の場合に於て少しにても人心を失ふ、何ぞ痛切なる結果を享受せずして止むべけんや

* * * * *

顧みれば、日露の媾和成るや、人心險惡を極めて、竟に帝都の燒打てふ奇變を現じたりき、曾て火に祟られし桂侯の內閣、今や洪水に襲はれて、凶歉、惡疫、民心離叛の禍ひを享けんとす

其の得意全盛の時、韓國併合に由て大に勳功を耀さんとする時、端なくも此の不測の禍變に遭逢す、天意實に微妙也、吾人は心あるものが天を畏るゝ所以を知りて、而して天警を冷眼視せざらんことを望む、苟くも然らば假令一度は躓き過まるも、再び天の助けを得るや必然也、禍の變じて福たるや必然也

公論
東京市の下水工事

田川大吉郎

東京市の下水工事が甚だ小さ過ぎるとの疑、批難を度々聞いて居る。然し私は之を世間がいふ如く小さ過ぎるとは思つて居ない。一番分り易い比較をいへば、其初め改良水道工事を起すときの豫算は六百五十萬圓であつて今度の下水改良工事の豫算は三千三百六十六萬圓、即ち改良水道に比べて約五倍の經費に當る。それで以て今度の下水工事の大體の規模が分るだらうと思ふ。又もう一つ糞尿を如何に處するかとの疑問があるらしい。新聞紙によつては糞尿を收理する計畫なきものとして本工事を批難しつゝあるものもある。然し本工事の中には將來糞尿を收理するの必要あるものとして其れに應ずる計畫を立てゝある。問題は將來市民が糞尿を下水に放流することになるや否やてある。外國人の習慣に比べて見て實際上さうなるかは多少疑を抱かねばならぬ。が、工事の計畫に於ては之を放流するものとして計畫を立てゝある。以上の話を以て現に聞いて居る批難に對する大體の辯明をいたしたものとして之より其内容に亘つて今少し話して見やう。

設計の標準は東京市民が一日に幾何の下水を流すかてある。改良水道を起すの初めは一人一日の使用量を四立方尺(即ち六斗二升)としてある。其後の經驗によれば四立方尺を敢て少しとはいはぬ。けれども統計

にあらはるゝ所ては、一人の使用量は四立方尺以上になつて居る。改良下水に於ては此事情を參酌して一人一日六立方尺(九斗三升)を流すものとして標準を立てゝ居る。即ち一日九斗三升の水を使用するものとして大規模の計畫を立てゝ居る、其下水の外に更らに雨水の量を見積らねばならぬ。雨水の量は年毎に變化して其標準を立てにくい。委員は熱心に討究の末、一時間一吋四分の一の雨量を東京市に於ける最大雨量と立てゝ極めた。一吋四分の一は三十一ミリメートル強てあるから、三十二ミリメートルの標準を取つて居る。此頃の大洪水の中て一番強く雨の降つた量は三十五ミリメートルてある、それから比較して此下水は凡そどれ丈けの雨水を收め得るかを知るに足るてあらう。此計畫の基本として明治十九年より三十八年に至る廿年間の降雨の統計をとつたが、一時間二十ミリメートル以上の降雨二十八回、二十五ミリメートル以上は九回、三十ミリメートル以上は三回てある、それ故に三十二ミリメートルを標準として考ふれば決して不足はなからうとの測定てある。一層具體的にいへば三河島村に下水の工場が出來る。此工場は淺草全部、下谷の大部分、神田の一部の汚水を受くる所てある。てそれを受けそれを處分する爲めに喞筒室を要する。其喞筒は一秒時間に汚水を六十立方尺、雨水を二百三十立方尺を受ける設計てある。即ち雨水の量を汚水の量に比して約四倍弱を受ける譯てある。此汚水と雨水と兩方を合計して約三百立方尺と見積れば、其一分間の排出量は二千七百九十石になる計算てある。それが淺草下谷丈けて東京市の一部分に當る計畫てある。夫れ故に今度のやうな大騷ぎに對しても此改良下水は大抵應じ得らるゝ本來の設計になつて居る。三河島の話に及んだから便宜上汚水處分の方法を述べて見やう。

元來此汚水處分には外國に五つの方法がある。第一は河海放流法(ボストン、ワシントン等に行はる)第二は土壤灌漑法(巴里、伯林、モスコー等に行はる)第三は濾過清淨法、第四は化學的沈澱法、此二つは近來の都市の稍々小なるものに行はれて居る。そして最も進

歩したる方法と稱せられて居る。第五はセプチックタンク處理法、之れは尙更ら新らしき方法として英國エキセター市に行はれて居る。此五法ある中で三河島に行はれるのは第五のセプチックタンク處理法である。而かも東京市全體の計畫としては、ボストン、ワシントンの例に倣つて河海放流法を用ふる方針であつた。原設計員の考案は正さに其通りであつたが、市區改正委員會は其河海放流法に基いて品川沖に直ちに放流するを衞生上危險なりとして、それにセプチックタンクを用ふることに決議した。夫れ故に東京市の採用する方法は先づセプチックタンク處理法であると稱しても差支がない。此處理法については種々なる說明を要するが總てを省いて簡單にいへば、工場に備へられたる暗渠の中で、黴菌と黴菌とが互に殺し合つていよ〱河海に流出する時は衞生上一切無害となるといふ裝置である。此品川沖の話についても今度の計畫は相應の大規模なることを證すべき簡單な一材料がある。それは芝浦を基點として第七臺場沖の十萬坪のセプチックタンクに連接する鐵管の大いさである。其鐵管は直徑五尺であつてそれを五本同じ所に並べてある。そして其長さは八千尺に亘つて居る。改良上水の基點に於ける鐵管の大いさは直徑四尺である。それが三本に分れて居るそれで全市に供給する計畫である。下水の方は東京市を三區に分つて第一を山の手方面、並びに日本橋京橋等一帶の平地の部分、第二を下谷淺草、第三を本所深川として居るが、今話した鐵管は第一區丈けを放流する鐵管である。それであるのに直徑五尺の管が五本を要する。即ち其大小の規模如何といふ事が分るてはないか。尙淺草下谷方面の事について話せば、此方面から三河島に達する下水管の一番大きいのは光月町から龍泉寺町箕輪町を經て三河島に達するものであるが、土管の深さは七尺五寸で其幅は十尺である。又本鄕高臺の雨水を受くる爲めに特に裝置する雨水管、不忍池より萬世橋に至る雨水管も內徑十尺に達する。又上野の山下から其邊一帶の水を集めて、和泉橋に達する雨水管は內徑八尺に達する。それから東京市が將來

幾何の人口を有するに至る乎も此場合注意を要する研究問題である。設計は將來三百萬人を受け入るゝものとの標準に於て成立つて居る。今日の東京市は前年の市政調査の結果、市住民約百六十五萬である。一平方哩の住民五萬八千二百十四人である。面積を今の儘にして考ふれば、東京市の人口三百萬人に達する時は一平方哩十萬七千百四十二人に達する。其割合の人口は世界の大都市を見ても最稠の人口であると稱してもよい。今日までの調べて、世界最稠の人口はアムステルダムて一平方哩に二十萬人住んで居る。其餘の都會は何れも一平方哩十萬人以下てある。例へば千八百九十八年度の調査によれば、リヴアープールが六萬二千人、巴里が九萬人、倫敦が三萬七千人、紐育が四萬八千人、維納が十萬二千人、大阪市が三萬八千人の割合である。だから東京市の最も發達した時の人口を一平方哩十萬七千人と計算するも蓋し少きに過ぐることなからうと思ふ。然し東京市の住民並びに區域は其通りとしても、水は其區域以外からも流れ落ちるに相違ない。其地勢を按じ、東京を中心として、地勢上郡部から水の落ち込む所は之を受け入るゝ方針て、これも設計の中に加へてある。故に人口三百萬を目標として居るが下水其ものは三百萬人以上の設計を立てた割合になつて居る。

この構造に用ふる材料は大部分コンクリート土管て鐵管なるものは殆んどない。鐵管は先きに話した芝浦から臺場沖に達するもの丈けて、其餘は各工場に於て工場内に要する多少の有壓管と、河の底を通じて兩岸に連接する爲めに用ふる管位のものだ。そこて少さい管、内徑七寸五分から一尺五寸位までは總て土管、其れ以上はコンクリートかモルターてある。これが今度の下水事業の比較的安く出來る一理由てある。世間では察する所、改良下水は全部鐵管と想像して居るだらう。鐵管を市中に縦横に布くには三千萬圓ては少しと思惟して居るだらう。之は以上の實狀を知らぬ爲めである。

此下水管を敷設した後に管内の洗滌の方法を如何にするかは尚説明して置く必要がある。之につき疑を抱く人がある。これには今回の設計に用ふる方法が總て

五種ある。第一の方法は自然的洗滌法、これは先きに話した汚水の外雨水を之に流す、其力で自然に汚水を落すのである。外國には二つを區別した所がある。卽ち汚水管、雨水管の二つを敷設した所がある。然し本計畫に於ては合流法を採用し、自然的洗滌法で管內を洗滌するのである。第二は洗滌扉を用ふる。洗滌扉とは或箇所〳〵に一つの扉を設けて水流をとどめる。其れて水が溜る。溜つた時に水の壓力によつて扉が開かれ其力で汚水を流す。第三は自働洗滌槽を作る。これはいはゞ上水道を此槽の中に落して槽の水が溢れてた場合に槽が引くり返つて汚水を流すのである。第四は潮水洗滌で潮の干滿を利用する。第五は洗滌車を用ふる。此五種の中主もなるものは前の三者である。けれども之でも倘足らぬ場合には管內の狀況を觀察する爲めに人孔を設ける。人孔設置の目的は下水管內の檢查及び人の出入の爲めである。て其人孔と人孔との距離平均三百尺である。三百尺每に一つ宛を設けるのである。位置によつては人孔を密接して設け難い處がある。さういふ處には燈孔を設ける。其燈孔の用は、吏員が時々ランプを垂下して、他の人孔から垂下したランプを目當に、人孔間の疏通の狀況を視察する爲めである。場所によつては人が自ら掃除することが出來、孔小さくして動作に不便なる時は前の五種の法によつて管內の停滯を防ぐのである。

て設計の要領は略ぼ以上述べた通りであるが、東京が之を起工するについては先づ淺草下谷を一區として之を第一期の工事として著手することになつた。其第一期の工事は凡そ五ヶ年かゝる目的である。第二期以下は何時から著手するか未だ決定しないが、蓋し第一期工事の第三年目位から著手することになるだらう。第三期工事は第一期工事の終りに至つて著手せらるゝことゝなるだらう。斯くして此大工事を十年に終了する豫定である。技術上の經驗家に聞くと、之を十年間に終了することは餘程の難事であるとの事である。然し東京市は萬難に打勝つて之を十年の豫定期間に終了したいと希望して居る。之を十年に終るとしても五十

年の博覧會の時までに全部を終了することが出來ない卽ち今日より工事を起すときは如何に焦つても五十年の博覧會には工事を終り得ない。然し今の豫定通り進行すれば五十年までには十分の六七の工事が出來、且つ東京市自身が適當の注意を拂へば大博覧會に外人等が蝟集するも主もなる市街の大部分は終了し得ることになる。

東京市が此設計を初むるに當つて日本橋京橋邊を後廻にして、淺草下谷方面を先きに選んだについては非難もある。然し東京市が之を先きにしたのは淺草が東京に於て人口が最も稠密であるといふ事が一つの理由てある。例へば現在に於て千坪に對する人口の割合を調べると、淺草は百四十五人、日本橋は百三十四人、京橋は百十人てある。斯くの如く人口稠密なるのみならず、地勢低濕にして最も下水設備の急を要する。實際に於て傳染病の流行も比較的此方面に盛んてある。夫れ故に下水を敷設するの必要は此方面に於て最も切實てある。又他の一つの理由は此方面は工事を施す經まりがよい。地勢に於ても都合よく、又原設計に於ても遺憾なく論定してある。他の方面には尙疑を存ずる箇所が少しづゝある。それは今少し時間をかけて研究したい。淺草下谷の方面にはそれ等の再研究を要すべき問題がない。例へば、先きに話した芝浦から臺場沖に達する八千尺の鐵管は、原設計者の考案に於ては其尖端にセプチックタンクを設けずとも直ちに海上に放流しても差支ないといふ設備てある。市區改正委員會は之を以て足らずとしてセプチックタンクを敷設することになつた。セプチックタンクを設くるならば八千尺の鐵管は入らぬかの如く考へらるゝ。地勢若し許すならば之を四千尺に短縮しても或は二千尺にしても差支ないと考へらるゝ。セプチックタンクを要するに拘らず必らず八千尺を要するかは問題てある。斯樣な問題がある。其研究をする爲めに他の方面よりは淺草下谷の方を先にしたのてある。

此工事をなす費用を何處から出すか。市區改正委員會は之が財源として凡そ六種の費目を考へた。第一に

は國庫補助、第二には東京市の河岸地の貸地料及び貸上代。第三には下水税の新設。第四には水道税の引上げ。第五には、糞尿を市營にして其收益、第六には以上の五種の財源を得て尚足らざる場合は公債を募集すること、以上は市區改正委員會に於ける源財の考てある。東京市の決定したのは之と異り、此費用の全部を公債に仰ぐ、そして之を償還する財源を市區改正の特別税及び下水税の二種に求める。此外に國庫補助を仰ぐことは勿論てある。夫れ故に市區改正委員會の考ては、財源が六種に分れたが、今回の決定ては三種に分れる。て東京市が今回市區改正の特別税を徴集して財源に充てると決したについては、市民の負擔重きに過ぎるかも知れんとの恐がある。けれども現在の日本の大都市の比較によると之を以て重しとすることが出來ない。今其證を擧ぐれば左の如し

市名	市税 一戸	市税 一人	區費 一戸	區費 一人	府税 一戸	府税 一人	計 一戸	計 一人
東京	円 六、三五六	一、六八〇	三、〇五二	〇、八〇六	三、七一八	〇、九八四	一三、一二五	三、四六九
京都	一一、九五五	二、三二五	四、八七〇	〇、九〇三	〇	〇	一六、八二五	三、二二八
大阪	七、三九六	一、六七八	五、五八五	一、二八四	五、五三八	一、二七三	一八、四一九	四、二三五
横濱	一三、三五一	三、四七二	〇、一三七	〇、〇二七	〇	〇	一三、四八八	三、四九九
神戸	七、九六八	二、〇二四	三、四一三	〇、八六五	〇	〇	一一、三八一	二、八八九
名古屋	一四、八八八	三、三三三	〇	〇	〇	〇	一四、八八八	三、三三三

備考

一、各税額は四十二年度純豫算額に依る
但東京市市税中には市區改正特別税を包含す
一、戸數及び人口は東京市統計課の照會に對し四十二年十二月末現在調に係る各市の囘答書に依る
但し名古屋市は回答書未着につき四十一年十二月末調内閣統計年鑑に依る

東京市の總面積が凡そ二千二百萬坪で、此下水の設備を要せざる處が約五百萬坪弱て、殘りの千七百萬坪以上は此下水の設備を要するのてある。其間の下水の管の延長は二百六十八萬五千五百六十二尺になる。一里の延長は一萬二千九百尺てあるから約二百十里もあるのてある。以て此管の縱横に貫穿する模樣を察することが出來やうと思ふ。但し之れすらも只大小の道路

貫通する長さてある。道路から各個人の家に引く枝管の長さは之に加はつてゐない。其枝管に屬する費用の中、公道に屬する部分は、東京市の意志ては之を市の負擔て建設するのてあるから、其爲めに約三百萬圓の經費を要する。されば今回の改良下水道費の市の負擔に屬する部分の合計約三千七百萬圓に上るのてある。

下水改良の目的は要するに衛生上の關係が重きをなして居る。歐米の都市は完全なる下水工事を施して以後、殆んど流行病の種を絶つた。伯林の如きは或種の病氣の研究材料に困つて居るといふ事てある。惡病の流行を絶つに下水の善惡は餘程關係がある。東京市の目的の第一は無論此衛生上にある。加ふるに近來の都市は完全なる下水を持たねば完全なる都市といはれないといふ事になつて居る。電燈、瓦斯、電車等を外にして下水及び道路、殊に下水に重きを置く。之をやらねば東京市も大都市の面目を缺くのてある。今や此工事を得て東京市も初めて大都市の數に入ることを得た。私も當路の責任者の一人てあるが、どうか世間の同情によつて一日も早く之を敷設し東京市が大都市たるの面目を缺くの多くの事柄の中て、先づ此一つ丈けを速かに除きたいと冀ふて居る。或は此工事と關聯して道路の改良を論ずる人もある。道路の前に下水をやるのは不經濟だといふ人がある。又下水の計畫を更らに擴大して電信、電話、瓦斯等總ての文明の設備を下水管中に入れよと希望する人もある。然し東京市の設計は其方式てない。此れと彼れとの利害得失は議論のある事てあるが自分は之に口を容れぬ。市區改正委員會が已に此設計を定めた以上は其れに從て工事をよくやりたいと思つて居る。且つ東京市は現に道路改正の希望を持つて居る。道路改正以前に道をホジクツて下水をやることは困難てある。然し當局者が綿密にやる時は二度の手間をかけぬやうな遣り口も全くないてはなからうと思ふ又道路改良をやるからといつて此上下水工事を遲滯せしめたくない。

話を結ぶに當つて一言するか東京市民は其糞尿を如何に處置するかは將來の實際問題てある。私の希望は

市民が將來糞尿を流すの習慣を作り、漸次に家屋の構造も其れに適應するやうにしたいのである。

今回の洪水によりて此設計に何か改良を施すべき必要を感じなかつたかとの聲を聞くが、別段に感じなかつた。前に話したやうな規模であるから今度位の洪水には此改良下水は堪え得られやう、只三河島から荒川に放流する其一帶の流の如きは、自然潮水の影響を受ける大いに受けるに當つては自動扉を設けて、潮水の逆流を防ぐ計畫であるが、其等の計畫が遺憾なくやられて、下水を疏通し得る樣にすることを今度の經驗て深く考ふる必要ある如く迫られた感じがする。其道の先達について其等の研究をしたいと思つて居る。(完)

愚論歟名論歟

福本日南

國民が段々覺醒するに從て、今や北守南進は一般の輿論となつて來た。是等は物好きや一時の狂態て出て來た議論にあらずして國民全體の輿論てあらうと思ふ然るに或一部に於ては此輿論を不便なりとして一倂に愚論として斥くるものがある。之は果して愚論てあらうか、然らずして名論てあらうか。我々は同じく愚者列の一人といはるればいはれやう。矢張り北守南進を全體の上から信ずるものである。

第一に自分が異論者に乞ひ聞はんと思ふ所のものは露國と我國とは到底親むべからざるか如何にある。二度の協定を重ねた今日に於ても尙親密の關係に入り込むべからざる事情を存するか如何てある。惟ふに論者の露國に親むべからずと思惟するものは近き過去の歷史に詿誤せられてゐるのてはなからうか。斯くの如き

類例は今更ら珍らしき事ではない。畢竟一國が他國を或は敵とし或は友とするのは其國策如何によるのである。本國は何時でも本國である。誠、本國に不利なりとすれば何時でも他國を敵とせねばならない樣に、實際本國に有利なりとすれば何時にても他國を友とするに差支はない。今の世に於て强大國を以て自ら許す所のものは常に此覺悟がなければならん。御覽なさい。英佛の近狀は如何であるか。從來此兩國民の感情の睽離して居つた事はそれは非常なものであつた。佛人の如きは英人を呼ぶに殊更らにアルビオンといつて、其アルビオンの語の下には陰險、譎詐、狡猾等のあらゆるわるい意味を含蓄せしめてゐたのである。然しながら彼共和國民にも有識の士デルカッセ等の如きあつて共和國の國策としては如何にするも英國と親まなければならん。英佛の親密なる協定を經るにあらざれば歐洲の平和を確實に保障することが出來ぬと認めたのである。で英先帝エドワード七世の御宇に於て彼が如き協定をなして今日の英佛兩國民は眞に莫逆の友となつたのではないか。顧みて我國を見れば、日露の戰爭は如何にも新らしい。當時彼我の間に父を殺され兄を打たれ、夫を奪はれ子を失はれた悲慘な記臆は存して居るであらう。然し露西亞は果して永遠の敵であるか。日本人は果して露人を終天の敵とするのであるか、我々は嘗て歐洲人によつて普佛戰爭の批評を聞いたことがある。評者はあの戰爭を指してアレは普佛の間に下つた一のアックシデントである。アックシデントさへなかつたなら普佛は從來左まで睚眦の間ではなかつたのである、こういふ評を下して居る。此評は日露戰爭の場合には當て嵌らないであらうか。日露戰爭なるものは畢竟其當時に於ける露國當路の物好きから出て來た戰爭ではないか。此戰爭をなさゞれば、露國は存在しないといふものでもない。畢竟は露國當路者の勘定違ひ、見當遠ひから彼が如き災厄となつたのである。が、幸にして我國には當時の歐洲相場より幾倍の實力あつた、此實力に衝突して露西亞は非常に辛き經驗を積んだのである。申さばこれて懲り〳〵したのである

南下の經路も亦多し、大露國たるもの何を苦んで、掌大なる滿洲の地を爭はんが爲め再び日本と衝突することを好みませう、彼は已に之を好まない。加之彼は同時に尊敬すべき實力の日本に存することを經驗し確認したのである。して見れば相互の意志によつては眞正に相親んで東方の事を處理しようといふ意志の發生しなければならん筈てある。魏の曹操は蜀の劉備を見て天下の英雄は使君と我とのみといつたてはないか。操をして此言を發せしめたる所以のものは三國當時に於て操の友となり敵となるべきものは此男であると認めたからてある。今の時に當つて列強中主となつて東方の問題を片附くべきものは使君と我とてはないか。世の中にいけないものは蛇の生殺てある。親まうと思ふならば、思ひ切つて親むがよい。人間畢竟相對のものである。決して絕對のものではない。人間の構成した國家も亦同じく相對のものである。こちらからして懷を寬げて誠意を捧げて右の手を差出せば、其手を握らないと逃げる奴はない。彼も同じく誠意を捧げて彼の右手を差出すてあらう。斯くの如くして兩國が親密の關係に入り込んだとして御覽なさい。極東の問題を處すること易々たりてはないか。それても露國の境域の支那と接する部分が滿洲の方面のみてあつたならばそれは問題てある。けれども一度之を地圖に問へば地圖は明かに示すてはないか。トルキスタンの鼻から黑龍省の一帶に亘つて千里の境域を支那と接して居るてはないか。露國の或目的を支那に伸べようと思ふならば此千里の長線中何れの處からても伸びることが出來るのてある。夫れ故に滿洲に於て日露の握手の出來ない事はないのてある。

斯くの如くして日露が所謂コルデアルアンタントの域に入り込めば、日本は裕なる行動を他の方面に向て出來るてはないか。玆に至て我々は立國の根本問題に立ち入らねばならぬ。日本の將來は如何にして生存すべきかの問題に立ち入らねばならぬ。申す迄もなく貿易と殖民にある。今此二萬餘方里の狹き國内に五千餘萬の同胞を積んでゐるてはないか。而して此同胞は年

々非常なる繁殖力を以て増加しつゝあるのである。今後百年を出でずして一億以上に達するといふ事は何人も疑はざる所である。而して此日本の國となり如何と顧れば島國にして而かも其面積の三分の二は山嶽で塞がれてゐる。殘る三分の一の谿間の平原に住居してゐるのではないか。今でさへも其面積の狹隘を感じてゐるのに、之が一億以上となつて依然として此島國に同捿しなければならんとすれば、それこそ大變である。獸相喰むさへ且つ人之を惡むといふ。况して同胞である。此同胞が出會頭らに他人の頰べたでも嚙らなければ生存することが出來ないやうになる。殖民なる哉〳〵といはうと存ずる。さらば其殖民は何れの地方に求むべきか、問題は此邊に存するであらうと思ふ。

殖民問題は暫らく此邊に置いて今一つの生存の方法は工業及び商業にある。素より商業に相手を選ぶ筈はない歐羅巴にあれ、亞米利加にあれ、我國の得意になつて呉れゝば素より其何れたるを問はず歡迎する。さりながらよく考へて御覽さない。日本の工業即ちインダストリーなるものは、昔から製造し來つた或小量の製作物品を除くの外は、概ね歐米に敎はつたのではないか即ち模造品の成功した者ではないか、扨其模造品である。中には至極の上出來で歐米品に優るものもあらうが、大部分は先づ彼に劣るものと考へなければならぬ弟子の作つた品物を師匠が喜んで買ふであらうか。師匠は矢張り師匠同志で作つたものを使用するのは常則ではないか。すると此弟子は、弟子の弟子たるものを求めて此工業品を賣り附けなければならん。日本將來の發達如何は此商品のよく賣れると賣れんのにある。幸にして隣國に弟子の弟子が居る。而かも可なりの購買力を有する所の四億の弟子がゐる。之をお得意とせずして何をか待たん。人或は支那人の商買上手なる事は到底日本人の及ぶ所ではないといふ。或は左樣かも知れない。さりながら幸にして我日本人は彼に對して近世文明に一日の長がある。文明の高いと低いとの一の標準は企業力、製造力の多少を意味するのである。見給へ日本人の製造力は確かに支那人の上にあるではな

いか。論より證據、一二の例を擧げて見やう。マッチの如き先づ然りてある。如何にも支那人の商賣上手なる我神戸近傍て製造した所のマッチに支那の商標を刷つて貰つて日本人ならば、日本一とか世界一とか何とかいふ名を附けて賣るのてあるが、其れを直ちには持ち込まない。彼は支那流に雷火（フィホ）などといふレッテルを刷り附けさせて、それを賣り弘むる。或方面からいつたならば日本製造の甘味は支那人に食はれるといへるかも知れぬ。然しながら其註文を受ける所のものは日本人てある。矢張り製造元たることは失はない。此製造元に滿足してもよろしからうと思ふ。決して其製造品はロハて與れるのてない。儲けないて作るのてはない其儲けは即ち日本人生存の資本となるのてはないか。又或者はいふ。支那人の智巧なる、やがて此等のものも支那て作るやうになるてあらう。して見れば工業も亦支那から奪はれるてはないかといふ。一寸承れば一理あるやうてもあるけれども、それは餘りに同胞を信じないといふものてある。吾人は已に近世文明に於て彼に一日の長てある。一日の長として且つ自信ある國民ならば何れの時に於ても工業上彼より一等上に立つべきものてある。例へば今日支那の貿易に於て獨逸人は我商敵となる。さりながら英人は餘り敵とならぬといふ事は、獨人の作る處商ふ所は大概吾人のそれと同品同物てあるけれども、英人に至ては我々が多く力を染めざる所の器械類を賣り込む。それて敵とならんのてある。之と一般て支那人の多數がマッチを賣り込むやうになつたならば夫れ以上のものを作つて賣り込めばよいてはないか。夫れも出來ないといふ位なら我々日本人も餘り褒めた國民てはない。然しながら我々は左樣なケチな國民てあると信じない。故に根本に於て工業上には何時ても支那人の上に立つといふ自信と決心とを以て之に望まなければならぬ。して見ると何時ても彼の四億を我得意としなければならん。それて上來述べ來つた通りに貿易と殖民との二つが日本將來の生存の基礎たるものてある。之には多少の資本（もとで）が要る。九尺間口の小店を出すのても少しの資本は要るてない

か。況んや四億の得意を惹附け又將來我國民の一半を播き散らさうといふ大土場を開くには少しは資本をかけなければならぬてはないか。之が準備の第一は差向き海軍の擴張てあらう。

昨今米國は彼が如き大抱負を以て海軍の大擴張に從事してゐるのは何の爲めてあるか。又ニカラガの運河を開いて太西洋の水をして太平洋に通ぜしめやうとするのは何の爲めてあるか。彼も亦四億の支那國民を自家の得意としやうといふのが第一の主眼てはないか、此時に當つて我海軍如何と顧れば頗る索漠を感ずる。國民の多數は日本海の大海戰に彼が如き大捷を博したので非常な大海軍を有して居るやうな感を抱くのてあるけれどもよく其實質如何を御覧なさい。我戰闘艦として頼む所のものは十三隻てある。其中の九隻までは已に十歳以上の艦齢を重ねて居る。就中富士は已に十五才、丹後の如きに至ては十七才てある。今日の所ては軍艦の戰闘力は先づ廿年てある。

我國に於ては廿五才までを有効力と定めて置くけれども廿五才は已に老朽事に堪へざる域に入る。廿才乃至廿才未滿てなければならん。次に我巡洋艦十三隻の中て七隻までは又十才以上てある。且つ又近來に至つて新らしき軍艦は非常な威力を加へて來た。日露戰爭當時位までは一萬五千噸内外を以て戰闘の主力艦としたのが、戰艦に於ては三萬噸、一等巡洋艦に於ても又二萬噸以上といふ事になつて來たのてある。斯くの如く容積の大さを加ふれば、其れ丈け砲熕の大と數と威力を加ふることが出來る。それて列强が已にドレッドノート式の大戰闘艦を造るといふ時代になつて來て我現在の主力と頼む所のもの如何と顧れば、戰闘艦に於ては多くは一萬噸以下てあり、巡洋艦に於ては其多數は五六千噸てある。現在の所て、二萬噸を數ふる戰艦は僅かに安藝と薩摩丈けてある。一等巡洋艦にして一萬四千噸の列にあるものは又四隻に過ぎぬ。年齢に於て已に多數は十才以上となり、噸數に於て多くは一萬噸内外乃至五六千噸に過ぎないといふ海軍を以て彼が如く威力を加へ來た所の他の海軍の前に立つて、而して

海上の權力を維持しようといふ事は數理の許さゞる所である。で一度此島國が太平洋に於て今日の優權を持することの出來ないといふ時には其時節は即ち殖民も貿易もサランパンになつた時である。すれば今日に於て何は兎もあれ、此海軍については之を擴張する所以の方法を求めなければならぬ。

現在の我財政上に海軍擴張を企てるといふ事の不容易なることは勿論なるも、さりとて是れは將來の生命問題である。食ふか食はんかの境の資本と見れば褌を質に置いても一つ奮發しなければならんではなからうか。

扨其海軍を擴張するにどの位の程度でやるべきであるか。試に之が概算を立てゝ見れば消極に於ても此れ位に出なければならん。少くも各三萬噸の戰闘艦六隻各三萬噸以上の一等巡洋艦六隻位は是非共新造せなければならん。之が概算をなして見ると、戰艦と巡洋艦には差があるけれども平均一噸一千圓としてこれがザッと三億圓である。其次に三萬噸の軍艦を造らうといへば今の横須賀、呉、佐世保の艦廠では間に合はぬ。左樣な大艦を造る船渠からないのである。之が準備からしてせなければならぬ。又造兵廠も擴張しなければならぬ。之にザッと五千萬かゝるとすれば、少くも三億五千萬圓はキバラネばならぬ。自分は思ふ。十年計畫位にして之をなせば、一年に三千五百萬圓、此位のことは當局が斷じてなさうとすれば其道なしといふべからずと思ふ。而して舊艦補充費は此外である。此計畫を立てゝ如何にして此等の軍艦を製造するかである之も一つの考物である。戰闘の道理は陸でも海でも同一である。陸に於て老幼不齊の兵を以て相戰ふべからざるが如く、海に於ても新舊不齊の艦隊を以て戰ふことが出來ない。今豫算する所の軍艦を十年間に割り當てゝ造るとすれば最初の年度と最終の年度の軍艦とに忽ちにして十年の差が出來る。之れ亦二十才の現役兵と三十才以上の後備兵とを混ぜたものとなる。そんなものでは役に立たない。海軍の主力の恐るべき所のものは其攻擊力に於ても防禦力に於ても其速力に於ても

艦々相若く所のものを編成した艦隊にあるのである。それて例へば十年計畫と極めたならば、自分の考ては之を積むのてある。而して今から六年目か七年目から製造にかゝつて兩三年の間に同時に出來上るといふ事にしたいのてある。之れは獨り今回の擴張に於ていふのみならず其次も亦斯くの如く十年とか十二年とかの一期を見越してやりたいのてある。かくして東海には權力を失はないといふ海軍政策を日本の國策に取りたいのてある。

此際に今一言申し殘した事を附け加へて置かう。北守南進といへば日本人の癖として直ちに形を附けて北方の現狀維持をなして、直ちに南に切つて出てゝ、或は人の國を侵すとか若くは太平洋に東面して米國と戰爭を開くとかいふ積りのやうに考へる、之は愚も亦甚しいのてある。現代の平和何物ぞ。畢竟武裝的平和てないか。我同盟の英國は何時の時ても二强國の海軍力に匹敵する所の海軍を以て自國の國防とするといふ原則の如き、戰はんが爲めにあらずして此威力あるが故に他をして戰ふを得ざらしむるにあるのである。我國の如きも亦然りてある。

若し海軍を擴張するが爲めに直ちに米國の疑を惹いて之が戰爭の因となるといふならば英國の海軍は何時ても戰爭の因を蒔いて居るといはなければならぬ。寧ろ今日ては我海軍の微弱を示すといふ事が最も痛切に戰爭の因となる恐があるのてある。東海の神に盟つて此帝國の鼎の輕重を問ふべからずといふ事になれば如何に國として年少氣鋭なる米國と雖も謹慎の態度を失はうとも思はれない。此點からも海軍擴張の必要を認める。

夫れから今一つは形勢を觀察するに餘りに正直に、餘りに成形に固着する論者がある。其說を聞けば、日本が今南に延びるといつた所て、南方の諸島は何れも列强の所有てある。如何にして此方面に延びることが出來るかといふものがある、之は餘りに胸の迫つた議論てはなからうか、試に過去を顧れば、彼獨逸の如き故國とはいひながら統一せられたる聯合帝國となつて

世界の競爭に入り込んだのは十九世紀後半の事てある其當時に於て太西洋から南洋洲に亘つてある所の諸島は大概英、佛、西、和諸國に屬してゐたのてある。さりながらビスマルクが殖民政策を布いて此方面に力を用ひた結果として今日はマルサス群島やマリアナ群島や其他獨逸領の新殖民地は此兩洋間に碁布散在するやうになつたてはないか。て、心誠に之を求むれば天然自然に殖民地は我眼前に轉がつて來る。近十四五年の間に於てすらも世界の地圖の塗り換は少くない。青が赤になつたり、赤が黃になつたりいくらも變つたてはないか。それから以上の運用の妙は帝國の一心に存するのてある。又多くいふの必要がない。

先日竹越（たけのこし）三叉が南國に遊んて來たといつて南國記の著述を贈つて與れた。此地方は自分廿年前曾遊の地てあるから知己の消息を傳へるやうな心持がして至極愉快に之を見た。それて一首デタラマかした。

流れ出てし氷に似たる島の國
なほも流れよ南へ！南へ！

ものになるか知らん（完）

NEW PHILOSOPHICAL RADICALISM.

田中王堂

英國の思想史を學んだものは誰ても前世紀の初に於て、當時世間より Philosophical Radicals と呼ばれた一團論者のあつたのを知つて居るてあらう。彼等は學者（Savats）の教養を以て志士（propagandists）の職分を盡さうとした人々てあつた。吾人はこの團體の中にグロート、マロック、ビンガム、クルーソン、兩オ

ースチン、及び兩ミル等の名士を算することが出來る。是等の名士はそれぞれ半世を費して蘊蓄した博大深奥なる學識を提げて、政治、經濟、敎育、學術、文藝等に關する諸の問題の討議と解決とを試みようとしたのてあつた。彼等は何れも皆眞理と自由との勳爵士を以て自任し、常に改造の爲めには强き身方となると同時に、守舊に對つては恐ろしき敵となつたから、彼等の烈日の態度と、風霜の言論とは、英國全土を通じて絕大の權威を有つて居つたことは事實である。されば philosophical radicals の稱呼は、多くの他の稱呼の如く、その始め或は俗人の嘲刺より出てたのてあつたかも知らぬが、後には自ら一種の莊嚴を含むものとなつたのてある。この團體の云爲の感化の結果が、如何に深く、且つ廣いものてあつたかは、今日の英國の政界、及び學壇は、種々と新しき要求に迫らるゝが爲めに、種々と新しき試業が企てられては居るが、併しまだ系統ある政策及び思索の根底を成して居るところのものは、悉く彼等の遺產にあらざるを見ても解かる。

爾來時勢は幾度か推移し、智識は幾度か改造せられた。されば、吾人より見れば、彼等の施設と、學說とには、まゝ異議を挾むべきものがないてもないが、併し彼等が少しも惜し氣なく、その有てる一切の品性と、學問とを傾注して、これを幸福の增益と、文運の進捗とに捧げた勇氣と、誠實とに到つては嘆美せざるを得ない。夙に政治と、學問とに發達して、理論に、實行に無數の大星、小星を數へ得る英國にあつても Philosophical Radicals の如きは、燦爛たる異彩を放つものといはなければならない。

Philosophical Radicals の評論家として、文明史上長へに獨特の位置を占めるのは、如何なる問題に逢著するも、彼等はそれを討議するに、何時ても一定の見解に依てしたことてある。彼等の嗜好と、專門とより云へば、法理の側に立つて居つたものにあつたし、經濟の側に立つて居つたものもあつたし、歷史の側に立つて居つたものもあつたし、政治の側に立つて居つたものもあつたし、又文藝の側に立つて居つたものもあつ

たが、彼等は皆一樣に同じ哲學に依つて薰陶、薰習せられて居つたのである。されば或る問題が起る度毎に、比較的にその問題に對して、特殊の技量を有すと自ら信じ、他にも許されて居るものが、進んでその解決を試みたのではあるが、彼の用ひた學理は總べてものに共通てあり、彼の達した結果は、總べてのものが容易に認容することの出來るものであつた。一と度彼等が起つて旗鼓堂々時事の問題に對して、それが辯難、討議を試みてより、英國の評論界と、思想とは俄にその面目を一變して、一段と嚴肅なる意義と高莊なる調子とを得るに到つた。

これ等の青年團體が、依つて以て彼等の智識を養ひ、彼等の情操を鍛へ、彼等の信條を造つた源泉が三つあつた。それはロックとベンザムと、リカルドーとてある。彼等はロックより彼等の哲學を得、ベンザムより彼等の法理學及び道德學を得、リカルドーより彼等の經濟學を得たのである。而して、その結果は、彼等をして哲學に於ては分子主義を奉じ、法理學及び道德學に於ては功利主義を奉じ、經濟學に於ては自由競爭主義を奉ぜしめたのである。

分子主義の哲學を稱へたロックと、功利主義を創めたベンザムと、自由競爭主義を全うしたリカルドーとは、共に社會改造の使命を有つて生まれた風雲兒であつた。彼等は各々その嗜好と、長處とに從つて、別々の方面に動きながら、その實は、同一なる目的の爲めに努めて居つたのである。今日に於て、これ等の學說を、その儘傳へようとするから、種々の缺陷も見出され、隨て種々の非難も起るようなものであるが、これ等の學說が始めて案出された當時にあつては、確かに時代の宿弊を一掃するに足る程のものであつたのである。

當時歐洲諸國の人民の多數は、漸く盛になつた學術や、修養の力によつて、段々に個人は如何なる目的を以て、社會又は國家を經營して居るか。個人は如何なる福祉を社會又は國家より受用すべきかといふやうな問題に關して、初めて正當な理解と情操とを得たので

ある。いまそれ等の新たに覺醒された立場より、當時現存の教理、制度、習慣を見ると、彼等の要求と豫期とに反するもの、多きを發見した。こゝに於てこれ等の三大勇者は猛然蹶起してこれ等教理、制度、習慣の根底を覆へさうと企てたのである。

智識は總べて經驗に依つてなるといふロックの經驗說には確かに誤謬がある。併し當時の社會に行はれて居た、或る特殊の信仰或は習慣を性來のものであるといふ名の下に自家に都合の好いやうに保存しようとした、僧侶の僻說を倒した點に於ては、その功蹟は實に大いなるものであつた。法律及び道德の目的は最大多數の最大幸福を實現するにあると說いたベンザムの功利說にも色々の缺點はあらう。併しながら當時到る處に見出された少數者の利益や權利を保護することを目的として居つた朽廢の法律を一掃するに與つては、何物よりも勝りて鋭利なものであつたと云はなければならない。又自由競爭を經濟社會の根本假定としたリカルドーの放任主義にも多くの缺點は見出される。併しこれも當時工業の勃興に由つて各人の職業と勞働とは從來の中心點を失ひ、皆利益の多い方へ流れようとして居つたに拘らず、職業の變更や契約の取結びを制限する法律があつて、各人は皆その桎梏の下に苦しんで居つたのを懷へは、リカルドーの經濟說は極めて時機に適したものであつたのである。斯くしてロックの哲學と、ベンザムの法理學とリカルドーの經濟學とは異體にして同心、三つの巨人の如く英國の全社會をその根本より改造しつゝあつたのである。

Philosophical Radicals の團體を作れる青年思想家は、漸くその意義の理解され來つたこれ等の三學說を執つて、彼等の利益となし解決せらるべき問題が如何なる種類のものであつても、彼等はこれ等の學說の發展或は變更に依つて、その目的の達せられることを少しも疑はなかつたのである。彼等一と度去つて直接にこの團體の後繼者と目さるべきものは、その發生地なる英國に於ても殆ど見出されないやうであるが、併し個人として彼の遺鉢を繼いて居るものは多少はある。

その最も秀てたるものといへば、誰もジョン・モーレー氏とフレデリック・ハリソン氏とに指を屈することとを躊躇しまい。尙ほこれ等兩人程、その名は現れないが、彼等の刺激に依つて奮起したものは無數であると信ずべき理由は非常に多い。

何故に私が Philosophical Radicals を斯くまてに推奬するかといふに、勿論彼等が奉じた學說のためてはない。たゞ彼等が社會評論に從事した精神とそれを進行せしめた方法とのためてある。私は彼等が同胞の幸福を增進しようとする無垢の熱誠に依つて評論に從事するやうに刺激せられ、而して一と度評論に從事するや、一定の深甚なる學說を以て社會百般の事相を批判したのを賴もしとするものてある。

私は平常我が國に於て Philosophical Radicals のような團體の存在せざることを遺憾とし一日も早くそれの出現せんことを要求するものてある。若し評論の名を犯して世に出て來るものが悉く評論ならば、(私にはさう思へないが、)今日とても評論の數は隨分ある。文藝に關するものもあるし、哲學に關するものもあるし、宗敎に關するものもあるし、政治に關するものもあるし、道德に關するものもある。併しこれ等の異れる問題は、多くは異れる主義、又は興味を存する異れる人物に依つてなされるが故に、これ等の題目に關する總べての評論を一貫する見解又は學說を見出すことは難いのてある。その結果として、世に現はれ來たる評論は、悉く著者の知れる、又は好める問題に偏して、他の題目の存在さへも無視するに至る程にその意義と、價値とを誇張して居るから、或る一つの問題に就てだけ讀んで居る讀者は、その問題以外に重要な問題は一つもないと思ふやうになるし、また多くの問題に關する評論を併せ讀んで居る讀者は、總ての問題の解說に附帶する誇張の要素に囚はれて、自ら疑惑の念と、滑稽の感とに陷らざるを得ないやうになつて居る。これては評論多くして、益々社會の意義が堙滅されるといふものである。

宗敎ても、政治ても、道德ても工藝ても、學術ても

それ〴〵生活を維持して居る機關として、特別の職分を有する結果として、特別の作用と色彩とを有つに至つたのは自然である。それであるから、廣義に於ては皆人生評論ではあるが、そこに狹義に於ける文學評論、宗教評論、政治評論、道德評論、藝術評論、乃至哲學評論といふようなもの丶成立し得ることも認め得る。而して評論が政治に關する場合には、政治を社會の中樞として、他の活動をその末梢とするのは甚だ當を得たことであるし、又場合に依つては、暫く他の問題を一切不問に付することも許せることである。併し何れにしても、くれ〴〵も留意しなければならないことは、法外に當面問題の意義を誇張したり、曲解したりする結果、終に他の活動の存在を無視したり、或はその價値を卑下したりしてしまつてはならぬといふことである。併しその智識が社會全體を複はず、その興味が社會全體に亘らざる人々が、初めから或る一つの問題だけを、考察し、研究することのみを續けて行くと、終に他の活動の存在を無視し、或はその價値を卑下するような偏狹にして極端なる意見を有つに到るのが常ではないか。この弊を救ふには Philosophical Radicals のやうに、社會全體の活動に對する、廣汎なる智識と、寬裕なる興味との上に打ち建てられた一定の學說、又は主義を有する人々の團體に依つて、各々長所に隨つて代はる〴〵特殊の問題を批判するといふことが甚だ大切であると思ふ。斯かる理由に依つて私は切に Philosophical Radicals に似寄つた精神と、方法とを有する團體の出現を希望するものである。而して私はこの新しき團體に New Philosophical Ragicals の名稱を與へたいと欲ふものである。

何故 Philosophical Radicals と名付けるか。その精神と方法とを思慕するからである。何故 New の一語を付け加へるか。學說の異れるを標榜しようとするのである。つまり先の Philosophical Radicals が取つた精神と用ゐた方法と繼承し、新しき學說を主張して社會評論を試みようとするのである。

經驗主義と、功利主義と、放任主義とは一世紀前の

社會を改造するには最も適當なる利器であつたに違ひない。併しながら、社會はこれ等の學說に依つて改造されたが爲めに、一進轉して、今は全く異つた狀態にはいつた。それ故にこれ等の學說は最早その用をなさぬものとなつた。それ故に私は經驗主義の代りに作用主義を取り、功利主義の代りに、理想主義を取り、個人主義の代りに哲人主義を取るものである。而して主義に於ける斯樣な相違はたゞに批判の見地をして異ならしむるのみならず、又その範圍をもして異ならしむるのは自然のことである Philosophical Radicals はその興味の中心を政治經濟の二問題に限つたようであるが New Philosophical Radicals は、それに反して、政治經濟を評論の中心とすると同時にそれと同格に道德、藝術、科學、工業をも評論の中心としようとするものである。而して何れの問題を取り扱ふにしても、作用主義、理想主義、哲人主義の原理に依つて、それを爲さうと欲するものである。

作用主義も、理想主義も、哲人主義ももと殆ど同一の興味と、假定とに依つて作られたものであるが、たゞ時に批判によつて擧げようとする目的の異なるに隨つて物の異なれる側面と、意義とを力說する。この結果としてこれ等の三つの立場が出來たのであつて、事物に對して哲學的の考察を下さうとする時には重に作用主義の言葉を用ひ、倫理的の考察を下さうとする時には、重に理想主義の言葉を用ひ、又政治的の考察を下さうとする時には重に哲人主義なる言葉を用ひるのである。而してその三つの言葉に據つて云ひ表はさるゝ三つの見方に依りて、適切に、有力に、社會百般の事相を評價しようとするのが即ち New Philosophical Radicalism の抱負である。

これ等の三主義に對しては、これまで機に觸れて精しく說明して居るから、こゝにはたゞ三主義の名稱を揭げるだけを旨としたのである。

New Philosophical Radicalism の社會を評論する樣式は、論文でなければならず、その機關の體裁は雜誌でなければならぬ。

世間俗學の徒は、連りに知識は系統的、科學的であるものを一番價値があるものと信じて居るやうてあるが、併し眞に價値ある知識は批判的のものてあらねばならぬ。社會及び人生は、何時ても大體己を維持する實力と、己を指導する方針とを有て居るものてあつて、たゞそれが本來の性質よりして時々、局部、局部に破綻を生ずるだけてある、而して識者の役目はたゞ時々に起る當面の破綻を修整して行くだけてある。さうすると最も生命あり効力ある種の智識は批判的のものに限られねばならぬ。而して New Philosophical Radicalism は最も多くこの知識に賴つて社會を改造して行かうとするものてある。随てそれを傳播する機關は雜誌を以て最も適切なるものとしなければならぬ。

私は如何しても New Philosophical Radicalism を以て、現時の日本が必要と感ずる活動の一つと考へなければならないものてある。(完)

豫告

ルーズベルト論

田中王堂學人

本號に掲載せらるべかりし右論文は田中氏が之を世界の論壇に示すべき大抱負を以て執筆せられ居るものにて、本號〆切に間に合はず、其代りとして上の小篇を寄せられたるが、右の長大論文は次號の「秋期大附錄號」にあらはるべし

神經衰弱の話

醫學博士　二木謙三



今日の世の中のものは神經衰弱に罹つて居るものが多くて、又人が神經衰弱に罹るといふ事を以て非常に恐れて居るが、何も恐るべき病氣でもなく、又罹り易い病氣でもないのである。

一體、神經衰弱を以て一つの疾病と見做すのは之は學問上如何かと思ふ。それといふのは、例へば氣管支加答兒といへば、氣管支に充血して赤くなつて、粘膜が腫れて來て粘液の分泌が多くなる。之れ丈けの變化がある。若し氣管支の中に人間が入ることが出來れば誰の目にも見える變化が起るのである。又癒る時には是等の變化が眼に見ゆる樣に癒つて行く。其他何ぞ腫物が出來ても其通りであり、又恐ろしい病氣例へば結

核といつても癌腫といつても皆眼て見える變化がある。或は窒扶斯といつても虎列刺といつても、眼には見えないが檢微鏡て見える。黴菌が入つて來て其黴菌が人間の身體を毀はす。毀はされた結果が、窒扶斯ならば腸にタヾレが出來て其れが段々深くなれば腸に穴が明く。みんな變化がある。眼て見ることが出來るか、或は檢微鏡て覗いて分るものてある。それから又た糖尿病とか或は腎臟病とかといふと、尿の中に平常ならばない所の砂糖があらはれて來たり、或は蛋白があらはれて來たりする。此等皆化學上から證明することが出來く。此等は本當の病氣であるが、只此神經衰弱ばかりは身體中何處を潜つて探して歩いても見出すべき變化は少しもない。夫れ故に病氣の數には入れられぬ位てある。之を譬へて見れば電話機てある。本局の方の器械にも自宅の方の通話器にも、如何なる上手な技師が來て調べて見ても少しも狂ひがない。處が只通話者が下手なるか或は交換手が下手な爲めに、電話がかけやうと思ふ方にかゝらぬ丈けて、詰りいつても間違つてつないて居るのてある。之を以て器械が狂つて居るといふのは當らない。

所が妙な事には、此神經衰弱に罹つて居る人に限つて、自分では餘程重大な不治の病患に罹つて居ると思つて居る。器械の毀はれたのは技師の手でも直るが、己れの病氣は藥ても癒らなければ、鎌倉の轉地ても草津の溫泉ても鍼や灸ても、博士さんの療治ても直らんものと考へて居る。若し病氣といふものは自分て拵へるものといへるならば、此神經衰弱は正しく自分て拵へた病氣てある。然しながらさうばかりも行かんのは、こういふ病氣を拵へ易い人は多少先天的にある。けれど生れた時にかゝつて來る人はない。其人は皆父が大酒呑であるとか、或は梅毒を持て居るとか、或は淋毒を持つてゐるとかいふ事からして、從て母もヒステリー性になつて、其間に出來た所の子供は多く自分て本病を拵へ易く出來て來る。此等は半ば父母に於ても責任を分たねばならんのてある。が既往は尤めても仕樣がないから未來の子供の親となるべき今日の學生並び

に青年者は、自分で神經衰弱に罹つて苦しいと思ふならば、自分の未來の子にかゝる病氣を起さしめん樣に注意せなくてはならん。

此病氣の症候を擧げて見やうと思ふが、一體素人にさういふ事を説いて聞かせるのが甚だ宜しくない。何となれば頭痛がするとか、頭が抑え附けられるやうだとかいふやうな事は天氣の具合によつても健康者にもある事であり、又眩暈するとか耳鳴がするとかいふやうな事は一寸のぼせ氣味の時などには健康者にもある事である。或は寢られないとか疲れ易いとか物忘れするといふやうな事も忙しい時に有り勝ちな事である。此等を擧げて神經衰弱の症候だといつたならば、健康者でも、それでは己れも神經衰弱かと思つて恐怖を抱いて今度は本當の神經衰弱になる事がある。それであるから素人にお醫者の講釋といふ事は餘り有難くない事である。夫れは然し物に依りけりで窒扶斯とか赤痢の豫防法を講釋してもこれは講釋を聞いたからとて之に罹るといふものではない。只神經衰弱とかヒステリーとかいふものに至てはウッカリすると講釋を聞いた爲めに本病に罹ることがあるから、餘り講釋をせぬ方がよい。只要するに神經衰弱の症狀といふものは、普通の人にも有り勝ちな處のものを此人には少し餘計にあるといふ位のものである。物忘れといつても人間には忘れない人といふものはないものである。眩暈といつても一生に一度ない事はない。仕事が嫌だといふ事は毎日ある事だ。動悸がするといつても、ビックリすると誰でもする、是は當り前だ。只こんな事が少し強く其人にあるといふ事だ。又非常に強くある人がある。だから神經衰弱といふ事は非常に恐るべき病氣でなく、又一番癒り易き病氣である。何故となれば器械が毀れて居らんからだ。只通話者或は交換手の下手な丈けてある。

扨、然らば何故交換手が、これ迄上手なものが下手になつたかといへば、それは狼狽るからである。うろたえなければ毎度間違はぬ筈だ。一遍うろたえて間違つてつないで監督者からお目玉を食ふといふと、今度

の時は又間違はしないかといふ恐れの爲めにイョ〱慌てゝ、注意すればする程間違ふやうになる。恰度これが神經衰弱の狀態とよく似て居る。それだから落附き拂つて慌てず恐れず、出來る丈けを盡して、後は叱られやうと追出されやうとそれは天命と諦め切れば却て間違はなくなる。て學生も此試驗に落第しようものならば。高等學校に入らずに學問を罷めねばならぬ。これは大變だと思うて夜を日に繼いで慌てゝ勉强する一體公平にいへば、そんなに慌てゝ夜を日に繼いで勉强しなければ人並の試驗が受けられぬやうの事ならば若し其人が間違つて及第したならば甚だ其の人の爲めに不幸な事である。何となれば同級生の中では最も學問の出來ない人であつて一生學校に居ては頭上らずに行かねばならん。それよりは誠に惜しい事だが、外に其人の長所といふものはあるものであるから、例へば學才のない人ならば極く正直な眞面目な人であるとか、一時間に合せの勉强が出來ぬ代りには篤實に長くかゝつて或仕事をさしたならば普通の才子といはるゝ人以上に成功すべきであるかも知れん。居かさういふ人が誤つて世の所謂才子と競爭するが爲めに終に最劣等な地位になるかも知れん。だから僕はさういふ人は試驗に落第するが結構だと思ふ。其人が落第して方向を適當な方に轉ずれば、獨り其人が幸福なるのみならず國家には一人の役に立つ人が殖えるのである。之を辨へずして只世の潮流と共に知らず識らずに流されて、人が高等學校の試驗を受けるといへば誰も彼も受けたいといつてわめく。さうして若し得ざることとあれば、周章落膽、終には通話の交換を誤まつて了ふやうになる。實に惜むべき事である。て人、各々長所があるものである。其長所を選んで進めば常に得意の位置に居らるる。此人は一生神經衰弱を患ふることなくして濟む。元來病にかゝつて然る後治するといふ事は末である。若しかゝらぬ方がよいとすれば今話した事は最もよき神經衰弱の豫防法である。即ち人眞似をせずして自家の長所に向つて猛進するといふ事に越した神經衰弱の豫防法はない。然しながら今日は豫防法はかり說

いても遲いかも知れん。何となれば巳に罹つて居る人が澤山であるからである。然らば之が治療法を說かねばならぬ。

治療法の中で最も適切な事は外物の爲めに精神を奪はるゝことなくすること、自己の身體は自己の足で立つが如く、自己の行動は總て自己の精神で以て之を支配する。決して他の支配を受けぬやうにすること。例へば電話交換手たらんとするものは、他所の事柄に頭を取らるゝことよりは先づ自己の頭で、自己の用務をするやうにする。それで間違はない筈である。處が多くの場合に於ては自巳の頭は己に種々な事に奪はれて居る。例へば監督者に叱られぬやうにとか。今日雨が降つて來たが、傘がない、歸りにどうしやうとか。冷たい辨當を食つたのでお腹がシク〳〵する、下痢でもしないとよいがとか。昨日來た友達が變な事をいつて歸つたが、あの裏に何かありはしないかなどといふ事の爲めに精神が七八分通り奪はれて居つて、殘りの二三分で以て自分の主もなる役目たる電話交換をやらうといふからこれは間違はずにやることが無理だ。即ち自分の精神は七八分通り他に支配され切つて居る。神經衰弱に罹つて居る學生も此通りである。頭の重いのが氣になつて書物が讀めぬ。胸に動悸がするのが氣になつて眠られん。明日の宿題の多いのが氣になつて勉强にかゝられない、こういふやうな事で巳に精神が自己の肉體や外界の事物の奴隸になつて居るから、此精神をもり立てゝ草鞋をぬがせ、泥足を洗はせ、絆纏をぬがせ、お湯を使はせて奴隸の境遇から精神を救ひ、座布團の上に主人公に奉らねばならぬ。即ち精神の能力なる主人公の支配の下に此肉體が甘んじて支配を受くるといふやうにならなければ本病は癒らない。之に至る爲めには勇氣といふものは必要である。一度勇氣を振り立てゝ之まで受けて居つた所の外界の支配を悉く拂ひ除けて、村上義輝が賊軍の中より錦の旗を奪ふた如く、敵軍重圍の中から此精神を奪ひ取つて來なければならぬ。

然しながら神經衰弱に罹つて居る人は、自らの精神

を奪ひ取つて來る力がないのである。或は甚だ乏しいのである。多くは他の人の力をかるゝか、或は他の方便の力をかりなければならぬ。即ち名師の門を叩いて教を乞ふか、或は腹式呼吸。氣海丹田に神氣を養ふ的の方法の助けによつて精神を恢復すべく勗めねばならぬ。一旦精神が我所有に歸すれば、暗夜に燈火を點じた如く、暗黑は即座に消え失せて光明の世界となる。其中に金も入らず時間もかゝらず誰にでも行ひ得て而かも奏効最も著しいのは我々が此迄數回述べた所の正しく腹式呼吸の法である。先づ正座して脊骨を眞直にして頭を其上に安置して左右前後に傾かざらしめ、手は緩るく兩肩に下げて輕く膝の上に置く。眼は瞑目或は半ば開いて座前約五六尺の所を見詰め、眼球は動かすことなく之を固定し、腮は成るべく輕く締めて之を頸に近づける。然る後靜かに息を吐く。此時腹は少しくへコムやうにする。それから徐ろに息を吸ふ。此時空氣は鼻を通して入らしむる。但し鼻や咽で音がする程强く呼吸するのは間違て、靜かに人知らぬやうに呼吸をしなくてはならぬ。息を吸ふた時はへコミたる腹部が徐ろに膨れ出るやうにする。膨れ出た時は通常よりは少しく外より押して固くなるやうに勉める。又息を吐く。お腹を凋める。次には息を吸ふ、お腹を出す。初めはかゝる呼吸は多少骨が折れる。然しながら漸次に熟練する時は二三十回呼吸をすると、尙一層熟練すると四五回呼吸する時は何ともいふにいはれぬ精神の爽快を感じて笑が自ら顔面に溢れ、手足に幾分の溫暖なる活氣を覺ゆるやうになる。斯くの如き狀態に於て身心を常住維持するやうに心得行くときは、精神は自己のものとなつて他に奪はれる事なく、從て電話交換を誤るやうな事がなく、神經衰弱の總ての症狀は雲の如く消え、霧の如く散するやうになる。之は予の新說ではない。近くは白隱禪師、平田篤胤先生、遠くは波羅門、或は釋尊によりて唱導された所の正しき而かも身體の健全と同時に精神の健康を得る所の名法であるから、志ある人は怠らず練習するがよろしい。尙詳細のことは他日述ぶる機會もあらう。（完）

美術眼の養成

青柳有美

其一　鑑識ペダントの言ひ草

道は近きにあり、却て之を遠きに求む。

美術に對する鑑識眼を得るやうになるのは、餘程六ケしいものと心得てる人々が、まだ世間には却々に多い。

内外の美術史を一ト通り腹の中に疊み込まぬと、美術の批評や鑑識は出來ぬものと心得てる仁もある。美學の原理を呑み込んだ上て無ければ、美術の鑑識批評をするなぞは僭越の至りだと馬鹿謙遜に謙遜する者もある。

更に篤志の人に至りては、親しく術者に就て斯の方法を研究し、自ら斯の道の人にならねば、美術の鑑識や批評は到底出來るもので無いと、獨り斷めに斷めてるものさへある。

然し、これは迷である。ペダントに惑されて居るのてある。美術の鑑識批評が斯の道の術者にならねば出來ぬもの丶やうに曰ふのは、まだ其神に入らぬ術者が、我が技術の苦心を高く世間に買ッて貰いたいばかりの一念に驅られて勿體ぶる爲めの言ひ草て、美術の鑑識批評は其標準を美學に得ねばならぬやうに曰ふのは、不幸にして學者なるもの丶班に列し成るべく天界人界の事を六ケしく解釋しやうと心掛けてる連中の、これも又我が智識に金箔をつけたさの一念より發する言てある。

若し夫れ内外の美術史に精通せずんば、美術の鑑識や批評の出來ぬものと揚言する輩に至りては、最も惡むべく又賤むべき輩で、これは鑑識なるものを如何にも雜事の如くに吹聽し、自らの鑑識眼の高さを誇らん

とする私心の多いプロフエッショナル鑑識家の好んで爲す言に外ならぬ。

以上何れも其趣を異にしては居るが、共にペダントリーの發現たるに至りては一なり矣て、世間の正直なる人々は、此の三種のペダントの言に惑はされ、美術の鑑識批評などには、浮ッかり素人が頭を出すものて無いと迷ひ込んで居るのだ。

其二　美人鑑識家多し

然ら美術眼の無いといふ手合ても、美人の鑑識にかけては、何れも皆な人後に落ちぬ。女の顔姿に關する批評とあれば、サツプラノとベースの區別が附かず骨法が何やら乾漆とは何んなものか一向に御存知無き人々ても、必らず口角沫を飛ばして議論を上下する。

美人の鑑識とか女の批評とかいふものは、果して其んなに容易なものだらうか。

決して容易なものては無い。若し之を例のペダント流の立脚地から言へば、人種學の心得も無ければならず、美學の原則から割り出して見もせねばならず、更に其の鑑識批評の對象たる女その人に就き、尺度を取りて親しく身體各部の寸法を測りてまて見ねばならぬ事になる。

今日の才子に此んな馬鹿な眞似をするものは恐らく一人たりともあるまい。如何なる者ても假令阿房と稱ばるゝほどの男ても、女の批評や美人の鑑識となれば、恰も茶漬飯を食ふが如くに容易にやる。又、之を容易なる事として誰も怪まぬ。

それには原因がある。

世界に於ける人口の少なくも二分之一は女てある。母の胎内より生れ落ちて『オギヤー』と聲を擧げて以來、女は毎日毎夜のやうに目のあたりにある。第一産んてくれた母が女だ。哺乳してくれる者も女てある。保育してくれる者も女てある。家にありては常に女を眼にし、外に出てても又絶えず女を眼にする。此くして相當に分別の附いて來た年頃には、我々が女といふものに對る眼慣れた者になつて居る。

女を批評し美人を鑑識するに就ての素養は、唯女に

眼慣れて居るといふ丈けの一事に過ぎぬ。

これ丈けの基礎て、僅に一見したばかりなのに、人は直ぐ那の女は醜婦てあるとか美人てあるとか、乃至はエキスプレッションが拙いとか好いとか、更に進んでは御多福てあるとか鼻の格好は何うの唇の厚いのが氣に合はぬのと勝手な熱を吹く。

畫家や彫刻家は、何れも女の顏や容を作品にするほど六ケしい事は無いとして居るが、其の六ケしい女の顏や姿を彼是れ申すのは、一段と六ケしいに相違無い筈なのに、一般に之を容易のものと心得てる。歸するところは、畢竟眼慣れて居るからといふに過ぎぬ。

其三　鑑識は慣性の發現

這れは、物の譬てあるが、昔々或る大名の子に、六歳になりても七歳になりても足腰の起たぬのがありしとやら。抑々其の原因如何と尋ねて見ると、これは御殿内總掛りて餘りに其の子を可愛がり過ぎ、其の子の誕生以來腰元とか女﨟とかいふものが、絶えず其の子の側に侍き切りて、何か玩具ても腰を動かし手を伸ばして取りたそうにすれば、御侍の者は其の子を勞せずして直に其の玩具なり何なりを取りて手渡する。若し又其の子が少しても身動きをして身體を進めやうとてもすれば、御侍の者が、直に又其の子を抱ひて其欲するところまで御伴れ申す。こんな風て六七歳までも足や腰を働かす機會が無かッたので、其の子は足腰の起たぬものになり終ッたのてある。

歩行は、苟くも人と生れたもの丶誰ても容易なる事として居るところてあるが、之を心理學者や生理學者に聽くと、却々以て六ケしいものになる。やれ大腦皮質の歩行中樞の作用が何んてあるとか、意志の發動が此ふてあるとか、物理學中の力學によりて説明せらる丶槓杆及び振子の法則に依りて歩行は初めて營まる丶ものてあるとか、一寸、氣の弱い者は聽かせられた丈けで早や眩惑ても起しそうな難儀なものになりて來る。

如何にも學者先生たちの御説一々御尤もの次第て、是れまで一回も歩行の經驗の無いものが、三四十歳に

なり茲に高く歩行の術を學ばんとすれば、難儀の事たるに相違無く、一年や二年の修業ては容易に出來ぬかも知れぬが、實際、人は皆な歩行に左までの難儀を感ぜず、殆んど無意識に千里の道をさへ歩む。これといふのも畢竟するに慣性の賜て、慣性の功德ほど難有いものは無い。

人が女の鑑識や批評を、手輕にやれるのも、全く慣性の致すところて、物に慣れるといふ事は誠に以て大なる力てある。

美術に對する鑑識も又此くの如く、學者や斯の道の人の話を聽かされたのみては、如何にも六ヶしい複雜したもの丶如くに思はれるが、實際、美術に慣れて來さへすれば、誰しも立派な美術眼を有する者になり、恰も人が容易に歩行し容易に美人を批評するやうに、美術の鑑識が出來る事になるものだ。

之を要するに、美術を鑑識し得らる丶とは、美術に慣れたといふに外ならぬ。

其四　作品に接觸せよ

美術眼を養成するの道たるや他無し、數々美術作品を眼にし、又耳にするにある。換言すれば、美術に接觸するにある。

有らゆる人が總て皆な歩行能力を有する如くに、有らゆる人は皆な美術の鑑識力を有して居る。然し、數々美術に接觸する機會が無いと、恰も彼の大名の子が自動運動を營まぬ爲に生長して後までも足腰の起たぬ歩行無能の者になり終りし如く、天賦の美術眼が展けて來ず、美術の鑑識が出來ぬ者になりてしまふのである。

されば、美術眼の無いといふのは、美術の手法や歷史に通曉せぬ爲めてゞも無ければ、又決して美學の原則を呑み込んて居らぬ爲めても何んても無い。唯、美術作品を數々眼にしもせず又耳にしもせず、美術に接觸する事の機會が稀なるより起る事てある。

美術とは何んなものか全然見當の附かぬくらいな初心な人ても、若し展覽會のやうなものがあると聞けば、必ず缺かすこと無く之が觀覽に出かけ、音樂會がある

と聞けば、之も聽聞を怠らず、芝居も時々は覗き、聲曲や舞踊のお浚のやうなものにも、根氣能く出席するほどにさへすれば、それは〳〵實に不思議なもので、何時の間にか自然々々と其の人の美術眼が展けて來て立派に美術の鑑識の出來る者に成れるのだ。

敢て十年の二十年のと長い歳月を要するまでも無く、二年も此の方法を眞面目に繼續すれば、まづ〳〵可なりの鑑識力を得るに至り、五年も經過すれば、相當の鑑識力を備えた者に成れる。

美術のうちでも、最も鑑識の面倒なのは、舞踊と音樂とて、此の二つは繪畵や彫刻や建築や詩歌などと全く其の趣を異にし、流動的なものでありて、而も人心の漠として捉ふべからざるものある如く頗る漠々たる趣がある。殊に十九世紀式日耳曼音樂なんかになると、その漠々サ加減が單純な漠々で無く複雜な漠々になりて居るので、鑑識が一層六ケしい。今日では世界の有らゆる美術が、又此の十九世紀式日耳曼音樂の影響を受けて、遂に彫刻家に佛のロダンの如きものをさへ出すまでになりたのであるが、此の鑑識の最も六ケしい十九世紀式日耳曼音樂さへ、絶えず演奏を耳にして之に慣れるやうになれば、之を鑑識して其の微妙なるものに觸れると、想はず涙の流れるといふ程度にまでも達する事が出來るのだ。

此くして、美術に對する鑑識力は、數々美術に接觸する事によりて養成せらるゝものである。

其五　古物の觀照

美術に數々接觸してさへ居れば、自然に鑑識が出來てくるには相違無いが、鋭利なる美術眼を養成するに就ては、殊に作品中の傑作に接する事が必要である。

之を古老に聞くと、維新前の兩替屋に於て、店の小僧共に贋金か本金かを區別する爲めの鑑識眼を養はしむる爲には、別に贋金と本金とを比較して一々其の特徴を指摘し、本金とは斯く〳〵のものなりなどと教え込まず、平常、小僧共には一切贋金といふものを目にする事無からしめ、正味正當の本金ばかりを見せるやうにして居ッたものなそうである。すると、不思議に

も、多數の金銀貨幣中に一枚なりとも贋金が混じて居ると、小僧共には直ぐにそれが眼に附いて、忽ち其の贋金たるを看破することの出來たものなそうだ。

美術に於ても又此くの如くて、成るべく多く傑作に接してのみ居れば、一朝、拙作に接する如き時があると、直に其の拙作たるを看取し、之には眼も耳も貸さぬやうになれる。美術の鑑識に於て、第一に大切なるは、傑作と拙作との區別をつけることである。

然し、まるで初心の人には、傑作も拙作も殆んど皆な一樣に見えて、這れの鑑識がハタと附きかねる。

それには又便法がある。即ち古物を觀照する事だ。蓋し、古物は概ね皆な傑作であるからだ。

古物が概ね傑作だといふのは、甚だ異な論法のやうではあるが、決して詭辯では無い。

總じて時間の破壞力といふものは、恐ろしい程に強いもので、又頗る公平なものである。若し其の作品が傑作で無ければ、必ずや永い時間のうちに破壞されてしまひ、今日まで保存せられて來るものでは無い。

今假りに、好奇心に富んだ人がありて、路傍に散在せる一箇の石塊を拾ひ、之を永世に保存せんとしても、その人一代だけは或は之を大事にして行けるかは知れぬが、幾代も代を重ぬるうちには、必ず棄てられる事になる。

然し、傑作になると、末代までも必ず之を尊重して仇や疎かにはせぬ故、永世に傳はることになる。隨て、幾百年幾千年の後世までも、時間の破壞力に抵抗して存在を持續し來りし美術作物は、何れも傑作に相違無いといふ事になる。

是に於てか、美術眼を養成するには、古物の接觸に力むるのが、捷徑だといふ事になる。

何んでも古いといふ古い物を觀照するが可い。これて、傑作と拙作とを鑑別する土臺を作りて置いて、更に傑作にのみ接觸するやうにしさへすれば、其の人の鑑識力は自らにして向上發達する事になる。

其六　美術とは何ぞや

美術とは何ぞや。

これは隨分古い問題である。オールド、オールド、ストーリーである。

今日に至るも、尙ほ、美術は美の發揚を以て任務とするもの丶如く主張する論者もあるが、恐らく、それに限りたものではあるまい。

美術は、科學哲學宗教などと共に、宇宙の秘義消息を人間に知らしむる爲めの學術の一科と思はれる。

人間はお互に愚鈍なるもので、淸水一滴のうちに包含せらる丶細菌をさへ、自然のま丶では到底之を見る事が出來ぬ。況んや、凡夫は、此の大宇宙——詳く言へば天地人の間に潜んで居る秘義消息なぞに通じ得らる丶もので無いのだ。

この秘義消息を人間に知らしむる一種の方式が是れ即ち美術なので、恰も水中の細菌を顯微鏡を用ひて誰の眼にも見へるものにすると同一である。

此く美術は、天地と人生との秘義消息を捉らえ、明瞭に之を凡夫の心眼にも映るやうにするのを其第一義とするが故に、顯微鏡の如く廓大作用を營むは勿論のことであるが、同時に之を見せられたものが、愉快に之を感受する事が出來て、取り附きの早いやうに、其の間に充分美的分子を配合するのである。是れ「美術」なる名稱の起る所以なのだ。

醫師は、藥餌の飲みにくいものを容易に飲み得さする爲に、或は香料を混じ或は甘味を配合する。美術家も又宇宙の秘義消息を萬人が容易に飲み込み得ることの出來るやうにする爲めに、我が闡明せんとする『或る何物』かに、美的分子を充分に配合するのである。

されば美術家には、先づ第一に、凡夫の到底看取し得ざる宇宙の秘義消息を看取し得る非凡の能力が無ければならぬ。續ては又、此の看取し得たる宇宙の秘義消息を廓大して一見誰人の目にも耳にも明瞭たるものたらしめ、これに適當の美的分子を配合して、多くの凡夫を引きつけ得る丈けの技倆が無ければならぬ。

是れ實に美術家に凡夫以上の天才を要する所以であるのだ。

其七　傑作とは何ぞや

傑作とは、作品が此の美術の目的を達して居るものを云ふので、拙作とは此の美術の目的を達し得ぬものを云ふのである。

其の目的を達した度合ひが、强ければ强いほど其作品は大なる傑作である。その闡明せんとする『或る何物』かが大なれば大なる程、其の作品は偉なる傑作である。

如何に方式が巧みでも、其の作品のうちに闡明せんとする『或る何物』かを藏して居らぬものは、之を稱して傑作とは云へぬのだ。傑作と拙作との分るゝところは、實に玆にある。

又、技倆の未熟なる者は、如何に闡明せんとする『或る何物』を看取し得ても、此の看取し得たる『或る何物』かを、たゞ我が胸に浮かべ得るのみで、之を萬人が悦んで愉快に會得することの出來るやうに、形なり乃至は音なり調なりにして示す事が出來ぬ。此の種の人の作品も同じく拙作たるには相違無いが、多くの場合に於て、想ひ内にあれば技は自ら之に隨ふものである。

如何に拙劣な曲や演奏法のものでも、ブーカ々々々ドン々々と樂隊の通るのがあれば、人は之に注意して耳を欹つるものだ。如何な拙作でも、少し其の中にコケオドカシの分子が這入ッて居ると、人は往々にして之に注意を取られ、頗る非常の拙作を傑作と誤解するやうな事になる。

これは、美術を鑑識するものゝ最も戒心を要する點で、北齋とか運慶とか又蘇格蘭の樂風などに感服するのは、何れも皆な此の種の人々である。

北齋や運慶の作品乃至は蘇格蘭樂などいふものは、野鄙趣味の猛烈な調子があるので、一時は之に接する人の注意を惹くことは出來るが、之によりて闡明せらるゝ『或る何物』かは、頗る小さく又淺薄なものである。故に之を稱して傑作なりなどとは、決して言へぬ筈だ。

誰れが澤村訥子を崇めて、滑稽の意味以外に、之を名優と稱するものか。

北齋や運慶や蘇國樂は、宛然たる澤村訥子である。

其八　鑑識とは何ぞや

たゞ美術作品の傑作か拙作かを鑑別する丈けが鑑識といふものならば、一般の人には左まで必要でも無ければ大切でも無い。これによりて稗益するものは骨董商人くらいに過ぎぬ。

然し、美術の鑑識とは決して單に夫れのみのものでは無い。即ち、先づ傑作と拙作とを鑑別して置いて、傑作によりて示さるる『或る何物』かを看取し、これによりて天地人の間に潜められて居る宇宙の秘義消息を覺(さと)るにある。これが、美術鑑識の正當なる意義て、美術眼の誰人にも無かるべからざる所以だ。

この鑑識に加ふるに美術史の智識を以てして、作品の年代や作者の時代を考證するなぞといふのは、素より面白いには相違無いが、かくまでになれば、美術の鑑識も一の職業(プロフエッシヨン)になりて専門家の範圍に屬することになる。

又、作品によりて現れたる作者の手法を研究したり之を美學上の見地より觀照して作品の向趣を考察するなぞといふのも、同じく専門家の範圍に屬する事になる。

一般の人は、作品によりて示されたる『或る何物』かを看取し得れば、それて美術に對する鑑識があるものと云へる。

有らゆる人は、科學哲學宗教等によりて宇宙の事實を朧げながら知るべき義務があるやうに、又、美術の鑑識によりて、宇宙間に潜在する秘義消息に通ずべき義務がある。

故に。美術を鑑識するといふ事は決して疲勞せる神經を息ませる爲めの快樂でも無ければ、又、單に眼を樂ましめ耳を悅ばしむる爲めの道樂でも無い。况んや、特種の専門家にのみ必要とする専門の技能なぞてはサラ／＼無い。

美術の鑑識は有らゆる人間の義務てある。人は人間の義務として美術眼を養成し、これに依りて宇宙の秘義消息に通じたものとならねばならぬのである。

（了）

近古の三大水害

大槻如電

水害の話か、水害の話なら今もして居つた處だが、何つ？　天明の水害？　水害の事ならおれが昔からの出來事を月日を正して書いて置く日記に記して置いたよ、見給へ是だ、

享保十三年八月三十日より三日大雨、目白山崩れ、神田川あふれ、昌平、和泉、新し、柳の四橋落つ、兩國川も兩國、大橋、永代とも流落、下谷、淺草の低地は軒まで水浸り、神田祭禮十一月にのびる。(以上日記の文)

昌平、和泉、新し、柳の四橋。其新し橋といふのは今の和泉橋の隣のみくら橋の事だよ、いつ出來た橋かは今覺えぬが、新しく出來た時にそんな名が附いたのだらう、松平樂翁の執政の時に、卽ち寛政三年に、今の語でいふなら備荒貯蓄といふものを創め、町々の費用を節約して其餘分を貯へることゝした、それて其四年には籾倉が二つ建つたが其一つは深川に、他の一つは此新し橋の側に置かれた、て其後に虎の門と幸橋の間に橋が出來て、又あたらし橋の名を負ふに至つた所から、紛らはしきを避ける爲に前の新し橋の方をば名を改め、傍に籾倉がある處からして籾倉橋といつたものだ、だが其後又籾倉の名は雅ならずとして其「も」の一音を奪い、現在の如くみくら橋とのみ呼ぶに至つたのだよ、それはそれにして此享保の水害は此四橋が落ちるといふ大變な騒てあつたが、それから五十八年て次は天明の洪水てある。それ

天明六年五月より雨天續き、七月十三日大雨となり、十三十四の兩日に神田川あふれ、小石川あふれ、隅田川洪水、千住大橋通行止め、小塚原五尺、本所、深川に流屋あり、大橋、永代橋中斷。淺草邊は舟にて往來、吉原床上に水のぼる、十九日より晴天。(以上日記の文)

よいか、是から六十年て弘化三年六月に又洪水だよ。それ

弘化三年六月下旬より大雨、水あふれ、廿八日權現堂堤切れ、千住邊家屋に水のぼり、小塚原石地藏肩以上露はる、箕輪邊床上三尺、日本堤より見れば蒼海の如し。山王祭禮延ろ、

七月七日より再出水、吾妻橋、大橋、永代橋破損往來止め。（以上日記の文）

是れから丁度六十五年目が今年で亦此大水だ。

本年の大水は是れ以來なるべし（以上日記の文）

妙ぢや無いか、可怪いぢや無いか。御幣を担ぐ様にも聞こえ様が、大數を言へば、丁度約六十年目々々々々に洪水が出る勘定だ、甲子の關係でも有る樣な鹽梅だ、それは扨て置き左樣とすれば、又今から六十年目位に洪水に出會はす譯だよ、此度もひどい目に逢つたが、萬望長生きして今一度此水害に逢ひたいものだよアハアハヽヽ、何？ それに説ありやだつて、そんな事は新聞の方に最う話したから止さう。

弘化の時には神田明神下迄船を漕いだ相だ、是は隅田川の水だらうが、天明に九段下迄船が來たといふ話のあるのはそれとは水筋が違はう。今の飯田橋停車場前の堀、あれは堀割だよ、元は江戸川水道がズッと九段下まで通つて居たのを其後中斷されて今の樣に飯田橋側で神田川の堀へ注ぐ樣になつたが、元はズッと先まで通つたものだ、て彼邊一體は非常の低地神田川の水がはけなくなると直に沼の樣になる處なのだ、それだから天明の時の九段下の水といふのは多分其方の水だと想ふよ。

當時の委しいことは東京文獻叢書といふ本にあるが手許にないから致方ない、

（記者附記）天明六丙午年滿水場所附なるものに委しく其被害の範圍や額や、又窮厄の狀態が記してあるから其主要なる一二節を左に摘錄する。

天明の水害

七月十二三日の雨つよくして大水となりし所を爰に書しるす、南は愛宕切通しの山崩れ通りとまる、同女坂崩れ落る、同下通り御屋敷所々の塀崩れる、地水なれども水夥多し、それより南西の方にては深川八幡前通りは水入らず、其表は地水少々出る、洲崎は何れも大水なり、永代橋は八十間程中落る、扨新大橋に凡六十間程落る、中洲は無難なり、それより兩國橋は十六七日の水勢強く、橋杭三四本抜け中程少したるむ、是によつて暫く往來止まる、大川筋の水勢強く流るゝこと凄じく、是に續き向前共川の通用無し、扨又本所へ渡りては十六七日水六七尺も有ける、其夜俄に利根川通切れて凡一丈二三尺も水増し、段々大水となり、本所深川葛西より兩國指して逃げ來る人夥多し、親は子を見失ひ子は親に逃げ後れ、後になり前に

なり泣き叫ぶ聲目も當てられぬ風情なり　然れども難有御事には御公儀樣より御助け舟を仰付させられ、則兩國に二三十間ばかり御小屋を立てさせられ、行方なきものには此所に入れて御施行下しおかる御惝ばりは難有き御事共申すも恐あり、その上堺丁本行丁、此藏二丁町え人足炊出し仰付させられ、一日に三度づゝ下しおかる、扨前通り、大水出、此所舟に通用有る所も有り、淺草黑船丁、諏訪丁、並木町、山ノ宿はうら河岸ばかり、觀音は水無し、土手のとうていの前に穴明く、低き所は土手を越す、まつさき末少々切れ、三谷堀近所大水、今戸新吉原は水戸尻より押出し、くぼれへ少々水つく、後田甫は大水にて、大おんじ前、箕輪、金杉、下谷邊殘らず神田川筋は橋々向まへとも一面にして和泉橋流る、是は尤もかり橋也、明神下通り下谷御徒士丁、鳥越、三味線堀、佐久間町邊、せんご、柳原土手下へも地水出る、扨又本柳橋近邊、矢の倉御屋敷方、濱町、せんご川岸通り、横山同朋町邊少々水出る、縱横此續き藥研堀、兩國近所廣小路、いくよいからしの前迄二尺五六寸つく、伊奈半左衛門樣御屋敷內は地水少々出る、御門前の馬場に三通り、則御助けの小屋二十間許り掛けさせられ、御支配の百姓老若男女に限らず右の小屋に於て朝夕共食事を下し置かる、在々村々迄水にて難義の報は銘々御吟味の上斯樣に仰付らるゝ事偏に難有き御事也、西の方は水道橋外富坂下御屋敷方裏表小石川通り、江戸川近邊水道町下通り、改代町川田が久保近所、早稻田凡て低き所は地水混りにて一面に出る、扨音羽町前後皆々水出る、北は千住大水、大橋は無難なり、さきはそうか、越谷二合半領粕壁、松戸、幸手領は分て大水にて流れ家多し、栗橋川邊十三ヶ村所々切る、古河川續き東南は關宿近邊田畑殘らず大水なり、北の方は木立といふ所切る、此所は權現堂といへる堤にて水勢殊の外早き所なり、此邊村家數百五六十間、村人凡八百五十餘人の村なり、その人々處々へ逃げ込み、又は前に大きなる樅の木有り、是へ二三十人ばかり登りし所に此木根より倒れ人損ず、其外家物流るゝ事數知れず、殘りしは漸く百五六十人計なり、それより鷲の宮邊別して大水、御社は恙なし、是は昔より浮島なりと言傳ふ、騎西領此邊大水なり、羽生筋にては八方の土手切れ民家大きに損ず、此水千住より大川へ落る、兩國川通用渡し口仰付らる、扨又東海道は六郷、馬入、さ川、藤川、大井川、相模川口田村矢口、此の川皆大水なり。

則近在村方をあらまし爰に書記す、柳島村龜有村、諸地村、大畑村、小村井村、龜戸村、寺島村、小梅村、さるへ村、千住宿上、中、下、(外四十五ヶ村名略)村々在々所附は前後も有り、右は伊奈半左衛門樣御小屋にこれ有り候、用事有る御方は伊奈半左衛門樣御役所へ御願被成候へば早速相知れ申候、相殘る村在々今に於て毎日々々御助け船凡百艘餘り出され、御吟味有つて段々出來る水入の人衆其數知らず、又兩國の御小屋柳原土手原へ引御小屋立つ、扨又伊奈半左衛門樣より水入の者共へ茶碗一つ團扇一つ、手拭一筋下し置かる、(中略)江戸は本町三丁目藥店へせんとう致すべしと仰付られ、煎じ所立花丁大坂屋平六承る、飯汁は馬喰町馬屋より一ど出す、其外施行夥多し、御公儀樣より御救米御貸被爲仰付候事乍恐難有御事なり。(下略)

扨又家々諸道具夥多しく流るゝ事五十軒の餘なり、人流るゝ事凡六萬人餘といふ、馬四千疋餘、其外所々の山崩れ、木かや草木流る事數知れず。

前に言つた寛政年間に創めた籾倉が弘化の時には大層役に立つて救恤の實を擧げたものだ、昔だとて今と變りはない、お救小屋といふものが方々に出來る、四方が板圍ひ、今の樣にテントなどが無いから筵で屋根を葺いたもの、其處で炊出しをするのであつたよ。今と違つて學校などいふ公共の建物も無かつたら不便なもので、被害民はお寺へ收容するより外場所がなかつたからね。（談話筆記）

往復はがきに伴ふ罪惡

高島米峰

（一）

雜誌は段々殖える、原稿はその割に集まらない、書いて呉れいと言つた位では、勿論書かない、押かけて往つて、何か話をして呉れいと言つても、なか〳〵オイソレといふ譯にもゆかない。そこで、窮餘の名案が、何か一つの問題を出して、それを往復はがきに印刷し、エライ人といふ階級に送りつけ、その返事を取つて、これを雜誌の埋め草にするといふことを試み、頗る好成績を得たのが、『新佛教』でやッた『來世の有無』だ。

それからといふもの、この「實用新案」を、無斷で學ぶものが續出した結果、今は、それもさ程の功果がなくて、近頃では、公開演説を傍聽に往ッて、窃にこれを筆記し、「文責記者にあり」といふやうな逃げ口上をつけて、平氣で雜誌へ出すことが、流行するやうになッて來た。

それは兎も角、この往復はがきで返事を徴發する場合、大概、百枚の中、五十枚位しか戻つて來ないといふのが、普通の相場になつて居る。單に雜誌の原稿の

場合ばかりでない、懇親會、送別會、歡迎會などの案内狀でも、凡て會費を要する會合の分は、大概百に對する三十位は、戻つて來ないことになつて居る。（勿論、たゞて御馳走といふ時は、それこそ、眞に萬障を差繰つて、いの一番に出かけるなどは、人は兎に角、僕には確に覺えがある。）そこでこの往復はがきの、返信用の一錢五厘の行衛について、一種の問題が起らざるを得ないのである。

（二）

見ず識らずの他人が、だしぬけに、往復はがて、何か返答を促して來たとしたらどうだらう。若し何かの集會の席上で、知名の士を目がけ、紹介者なしに、直接に名刺をつん出して、「私は何の誰と申すもの、かねて先生の御高名は拜承致して居りました、以後何分よろしく。……時に先生、日韓合邦の將來は……」といふやうな質問を放つて、答を促すといふことが失禮だとすれば、往復はがきの一件も、亦少くとも、失禮の罪だけは免れる譯にはゆくまい。

ところが、この失禮は失禮として置いて、さていきなり「日韓合邦の將來は」と問ひかけられた知名の士たるものが、一言の挨拶もなく、何等の返答もなしに、この失禮な質問者を避けたとしたらどうだらう。紹介者なしに、だしぬけに質問したのは失禮だとしても、己に知名の士として、相應の敬意を表し、その高見を求めたものに對して、何等の挨拶もなく、また一言の答をも與へないといふものは、紳士たるもの、知名の士たるもの、エライ人たるもの、他の失禮を咎める程のものの、なすべきことではなからうと思ふ。夫の往復はかきを受けて、これに何等の答へをも與へないものは、また少くとも、この意味に於て、德義上の制裁があつてもよいわけである。

（三）

これを法學者に聞くに、一體、他人に對して、往復はがきを送るといふことは、その返信用のはがきを、發信者に對してのみ、使用するの權利を與へるといふことであつて、もとより、完全なる所有權までをも、

與へるといふのではない。從つて、受信者は、その發信者のみに對して、これを使用し、謂れなく、これを自己の用途に供し、若しくは、發信者以外に向つて、濫用することが出來ないのである。但し、受信者にして、この使用權を放棄する（寧ろ、返答する義務を負はないといふ方が、穩かとも知れない）といふならば、こゝに、その返信用のはがきの所有權が、時效にかゝる迄の間は、いつても、發信者の請求あり次第、これを返戻しなければならぬといふ、義務が生ずるといふことである。尤も、其間に、水害火災等の、不可抗力に出會つて、はがきがなくなつたときは別として。

（四）

たゞ一枚のはがきである、誠に以て輕微なものである。輕微なるが故に、これを粗略にするといふのが、今の世の知名の士の、多數の傾向であるやうだが、かゝる人々こそ、黴菌の微細なるを粗略にして、肺病に苦しみ、チブスに死なむとするの愚物である。

（五）

往復はがきについてばかりではない、今の日本のエライといふ階級に屬する人々の中には、人から來た書信に對して、一切返事を出さないといふことに、きめて居る人もあるさうだ。成程、エライ人になれば、いろ／＼な方面から、いろ／＼なことを持込んで來るであらうし、また無心も言つて來るであらう、こんなものに、一々取合つて居る譯にゆかないといふのも、一應は聞えて居るが、持込まれたことは、必ず承諾してやらなければならぬといふ譯のものでなく、無心は、一々聞屆けなければならぬと限つたものでもない。厭なことを厭だと答へ、出來ないことを出來ないと斷るのに、何の不可もない筈だ。たゞ、否とも言はず、應とも答へず、そのまゝ握りつぶして置くうちに、一方差出人の方では、氣が揉めるから、二の矢を放つ、これも握りつぶす、三の矢が來る、これも握りつぶす、とう／＼差出人も根氣まけで退却する。こんなにしてまで、敵を近づかしめまいとするのが、果してエライ人達の名譽であらうか、イヤ、こんなにしてまで、騎

鳥を懐に入れまいとするのが、果してエライ人達の徳てあらうか。どうせ殺すなら、一思ひに殺してやるのが、寧ろ慈悲である。一寸だめし、五分だめし、なぶり殺しの殘忍をも敢てなし得る程の勇氣(?)あつて、始めてエライ人たるを得るのてあらうか。アヽ、僕は與みせず、少くとも僕は與みせず。僕は、此くの如くにしてまで、エライ人たるを欲しない、又、此種のエライ人の存在を必要としない。

(六)

遠方から、何か贈つて貰つた時には、返禮をするとせねとは第二としても、まづその品の着いたといふことだけは、直にこれを知らせてやるといふのが、最も肝要なることとであるが如くに、人から返事を要する書信を受取つた時には、その諾否、可不可、何れにせよ、一應の挨拶をしてやるのが、何よりの功徳である。否、寧ろ、これエライといふ階級に屬する人の、當然の務である、エライといふ名譽に對する、一種の税である。しかし、悲しいことには、今の日本のエライ人、紳士とか學者とかいふ人達の中には、毫も事理を解しないで、たゞ威張り散すこと、勿體ぶること、氣取ること、などを以て、その能事足れりと心得て居るものも少くない。

(七)

こういふ連中を相手にし、こういふ連中によつて、雜誌の原稿を集めなければならぬといふ雜誌記者は、眞に憐むべく、又、氣の毒なものではないか。(八月二十二日)

山崩れの原因に就て

理學博士　神保小虎

此度の水害の時にも所々に山崩れが有て、鐵道の破損を生じたり、又たは川に土砂が落ちて、其水を堰き留めて、其水の溜りが此土砂を押し出して下流の方に急に洪水を生じた所もある樣てあります、

一體山崩れには地質學上の事が何程含まれて居るかといふに、是れは次に列べ立つた源因から考へる事が出來ませう、

第一の源因は雨が多く降つて其水が山の土砂に浸みて之を弛るめて、自然に崩れ落る樣にするのてあります、

此時には土砂の下にある岩石の表面の勾配なども大に關係が有ります、

又た始めから壘を斜に積み重ねた樣な、岩石の面に從て岩が互に辷ることも有り升、

明治三十年の伊豫國の別子の山崩れの時には丁度斜に走つて居る目に從て岩が辷つて、其上の家は谷の底に落ちました、

又た新道の切り取りなどても、こんな關係から毎年々々盛に崩れる處が有り升、

土木の人は少し地質を知つて居た方が宜しいのてあり升、

勿論岩石の急な崖がだん／＼に崩れるのは防げませんが、新道の切り取りの形などは大に考へものてあります、　又た山の林をムヤミに切り開くことが土地を弛めることも人が善く知て居ります、

しかし土木工事の方に誤りが無くても、矢張り地が動き出す所はあります、是れは第六の源因の處に記してあります、

第二の源因は日本で未だ殆其例を聞かないことで、地の中の岩石が水に溶けて穴を生じて、其天井が落ち込んで近所に山崩れを生ずるのであります、

第三の原因は土地や鑛山業で土地の一部分に弱みを生じて、偏りたる壓力を生じて土地が動き出して山崩れをすることであります、

是れにも多少地質上のことも含まれて居りますが、第四の源因は尚更ら地質上の事で、地震の爲めに割れ目が出來て、所々に落ち込みが生じて、山の斜面に山崩れが出來るのであります、

第五は岩石が自然に雨露風などにさらされて、崩れて落ち又たは浪に打たれて崩れるのであります、

第六は最も人に分かりにくいもので、見ないで何んでも論を立てる人は、ゐて「ソンナものは無い」と洒落(シャレ)て居ります、

是れは元から山に不平均の壓力が有て、其爲めに山の一部が押し出すのであります、時々山崩れも起します、

昔の陷落地や、地震で荒れた土地などには特に多くあると思ひます、

其時限りで無く長く動きが續く事もあると思ひます、

例へば福島縣の桑折(コオリ)の停車場から善く見へる半田(ハンダ)銀山の上の山には非常に古い馬蹄形の陷落の絶壁が見へますが、是れに圍まれた土地は明治三十年頃から人が氣が附くほどに動き始めました、雨の關係もなく、ダン〳〵に動いて押し出すので、人家も取り毀はして立退きました、

若し雨の爲めの山崩れならば大抵其時丈で終りますが、半田のはソンナもので無いので土地が充分に落ちつく迄は何年間も少しづゝ動く筈であります、

又た信濃國の諏訪の湖水の岸の上諏訪と下諏訪の間にも山が押し出して少々の山崩れが有りました、今から四五年前の事で山崩れはつまらないものでありますが、鐵道線が一ヶ月半も動いて其岡谷(オカヤ)迄に開業する前の山來事であります、

其場所を見ない人は「諏訪湖の岸は沼が多い」などと「出タラ目」を陳述しますが、こゝは沼などは無い場所て雨水の浸みた爲めでも無く、急な斜面が崩れたので無く、上は土の厚いのが崩れたと曰ふわけでもありません、

鐵道の人は毎日々々其押し出しを測量して今日は何寸、昨日は何寸と曰ふ表を作りました、結局鐵道面の一部分が上下に凡そ九尺、水平に貳拾尺の喰違ひを生じました、其後修繕しましたが、先頃いつの間にか少し押し出して居た事を發見して、復た直したと申します、

又た東海道の金谷(カナヤ)の停車場（大井川の西岸の地）の邊にもノロイ斜面の下でお化丁場と曰て、僅か高さ十尺位の切り通しが、杭でも石垣でも留らない所があつて、其荒れた痕跡は今でも見へます、

まづ山崩れの源因の中で多いのは水の浸みる事でありますが、第六の原因は最も面白いと思ひます、

少さな教科書などには勿論無い事でありますが、日本の様に山の多い所、地質變動の多い山地の國には注意して見るべき事で有ります。

（終り）

人物評論（九）

山路愛山論



△山路愛山君

竹越與三郎

山路君は其學問、其文章、其識見、其人物、實に當今第一の人だと思ふ。これは決して友人のコンプリメントとしていふのではない。予の衷心より信じて疑はざる所である。

其人無慾淡泊にして義に厚く情に篤く、又學に勉めて倦むことを知らない。而してあゝいふ問題をあゝいふ風に書き得る人は他に求めて一人もない。推して現代第一等の人となすは決して過褒でない。

山路君は若し外國の如くアカデミーがあればアカデミーに入る人であるし、若し大學總長に黨派的感情がないならば文學博士の稱號を送るべき人であるし、文部大臣に眞の眼識あらばこういふ人を拔いて大學總長とすべきであらう。今の如き學風を一新するには山路君の如きを擧げて大學總長とするのが最も適當であらうと思ふ。大學の敎授連の如きを統御して行く實際的手腕が山路君にあるや否やとの疑を抱くものもあるかも知れないが、智を以て智に對すれば智も亦窮する所あり、術を以て術に對すれば術も亦及はざる所あらうけれども、山路君は赤心を人の腹中に布いて疑はず、洒々落々として世事人事に應酬する人であるから、總長の任に當る位は易々たることであらうと思ふ。

予は從來六七千篇の文章を書いて居るだらうと思ふが、總ての文章は皆何か當の敵があつて書くので、敵が斃れて其目的を達すれば、皆無用のものとなつて了ふ。て總て散佚して跡形なく、偶々之を集めて呉れる人があつても、見て後に殘すべきやうなものがない。山路君の書くものは十行廿行の短篇と雖も、中に必らずウイズドムがあり、總て皆後世に傳ふるに足るのである。若し世に物好きがあつて山路君の如きに賣文せずしても生活し得る如き餘裕あらしめば、山路君は多くの大著述を後世に殘すであらう。然し今日の儘にして行くも山路君は必らず何か大著述をなす人たるを疑はない。

山路君の史論については世間に異見を挾む人も少くはあるまい。然し大學派の歴史家が如何に精探細究して史論をなしても、所謂汝の十六篇は我一篇に若かずであつて、山路君の如き生彩あり光焰ある史論をなし得るものは一人もない樣に思ふ。予も亦一歴史については悉く山路君の議論に感服するものではない。山路君の史論は古猶今の如く、今猶古の如しといふので歴

史は常に繰返すといふ事を唱へて居る。予は歴史は或部分に於ては繰返すけれども大體に於てジャンプするものと考へて居る。だから山路君の議論は昔はこうてあつた、故に今日もといふ風になるし、予のは昔はこうてあつた、然しながら今日はといふ風になる、其點は山路君と予と見解が異るけれども、山路君の學問、見識、文章、人物に至ては全く現代第一の人であつて予は彼の靴の紐を解くをも辭せざるのである。

君の方の雜誌に其人物論に山路君を選んだのは予の大いに滿足する所である。一體世の中の人は盲目なものが多いもので、文部大臣にならなければ文部大臣の資格なきもの、大學總長にならざれば大學總長の資格なきものとして人物の眞價を見ることを知らない。新聞記者及び雜誌記者は或場合には自ら無冠の宰相を以て任じ、天下の人才の中より自ら局に當るべき適當の人を推薦し、輿論の力を以て其信ずる所を實行せしむる位の覺悟がなくてはならぬ、予は我友山路愛山君を以て文章、學問、識見、人物當今第一の人と推し、且つ大學總長として此位適當の人なきことを明言するを憚らぬのである。

△山路愛山氏

内田魯庵

山路が民友社に入つたのは、確か「國民新聞」創刊後一年ばかり經つてからの事で、僕が已に民友社を去つてからだから、從て山路を餘り深く知らない。逢うて話した事は一度ばかりしかない。此頃の「新潮」かに山路の談話が載つて居るが、其中に魯庵といふ奴は氣障な奴で會ふといつても厭な奴だと思つてゐたといふやうの事が書いてある。然し會ふといつてもといふのは記者の書き誤りであらうと思ふ。

一體私は山路のものは極く面白く讀む。本が出れば本屋に出掛けて買つて來て是非共讀まなければならぬといふ程までの熱愛者ではないが、手に入つて來たものは總て讀む位までは愛讀して居る。「國民」に掲げらるゝものも毎日皆讀む。

何が一番面白かつたかといふのですか？　何が面白かつたといふよりはあの人のは何も皆面白いといふた方が適當だ。然し矢張り「孔子論」などが一番お得意のものだらうと思ふ。此頃の「日本人種論」などは其道の人から見れば意外の創見があるのかも知れないが、私等素人から見れば昔からもう二三度讀んだものと餘り違はぬやうな感じがする。

あの位サッパリした小氣味のよい、而して寸毫の忌味のない文章をあの位上手に書く人は山路の外にない。あゝいふ文章に於ては山路は第一等だと思ふ。

山路は實に美しい所のある人で、あの人は決して昔を忘れない人だ。決して山路の談敵でも何でもないやうな人でも、只何年前の知合であつたといふ丈けで以て其人と交つて行く。又德富や竹越が隨分世間から攻擊された事がある。山路の聰明を以てして此二人の弱點を知らぬ事もあるまい。而し山路は何時でも之を辨護する。之が實に彼の美しい、情に厚い點であらうと感服する。今日「國民」では山路を優遇もして居やう。又山路も「國民」を以て自己の最初の知遇を得た所として感謝もして居やう。然しながら廿年間一度も其關係を改めず依然として寄書家として溫かき情を寄せて居る所は實に山路の山路たる所である。

山路は又家庭の美しい人だ。妻君はお種さんといつてなか〱のエラ物であるが、家政上の事については山路は未だ嘗て妻君にノーといつた事がないさうだ、月給を取れば月給、原稿料を貰へば原稿料、總て之を妻君に渡す。そして自分の小遣は總て妻君から貰ふ。それて時々面白い事が起る。例へば友人が遊びに行てドッカ寄席へても行かうと提議する。すると先生ヨシ來たといふので、オイ寄席へ行くから金を吳れと妻君に申込む。場合によつては妻君は之を拒絕して先生の要求に應じない。先生座に戻つて妻が金を吳れないからよさうといふ、友達がお金ならば僕がといふと、イヤ人から金を出して貰ふのも何だし、又妻が金ばかりでなく、寄席へ行くことに同意しないんだといふ風てとう〱行かない事になる。寄席に限らず山路は又大抵

友人の提議に應ずる。だから勢ひ妻君が之を取捨することにもなるのだらう。家政上に於ける山路は實に萬事妻君のいふ事を聞く。そして此妻君は實に用意のよい人で蓄財までもする。そして山路をして後顧の憂なからしる。現に信州から出て來た時でも間もなく澁谷に家を建てるといふやうな有様だ。

山路の子供に對する態度は實に理想的放任主義だ。甚しい時は子供がお客の頭を擲つても先生はアハヽヽヽヽと見て笑つて居る。山路の子供は大抵成績がよくない。それでも先生平氣なものだ。落第をとつても、「よく落第した」といつて褒める方だ。確か山路の書いたものヽ中に「優等生を嘲る」とかいふやうな文章があつて、優等で銀時計なんかを貰つたもので天下を取つたものがないといふやうな議論があつたやうに思ふ。山路の子供放任主義は全く理想的といつてもよい。

又山路は有名なソソッカシ屋で又無頓着家だ。僕も帽子を間違はれて、翌日使に取換へにやつたら、其時まで先生氣が附かずに居た。そしてそれも似ても似つかぬ帽子だから驚く。又高木壬太郎であつたか武田芳三郎であつたか忘れたが、何でも山路と旅行すると先生、旅屋に歸れば羽織も袴も脱ぎつ放して平氣で居る。仕方がないからこれをたゝんでやる。そして有難い顔もせずに居るには弱はつたといつて話した事がある。

又山路に感心な事は、あの人は決して時勢に後れず何時でも時勢にくつついて行く。例へば文學を談じても山路のは或は舊るいかも知れぬ。然し山路は自然主義でも全く知らずに論議するのではない。いくらか之を玩味して居るのである。そこが彼の感心な所である。

要するに山路は文章に於て人物に於て當今第一流の人だと信ずる。

△山路愛山君

□□生

山路君とは一度も會つた事がない。從つてあの人についてはお話する資格が私に全くない。書いたものは

いくらか讀んで居る。然しあゝいふ大家を、人も知らず又著述の全部も讀まずに評するといふのは失敬と思ふから成るべく御免を蒙りたい。

只私の見た丈けていへば、あの人の觀察は決して精透とはいへまいと思ふ。概括して要領を得ることの敏捷ことにかけては當今あの人に及ぶ人は餘りないでせう。讀んでも聞いても直ぐ大體を摑み得る人、そしてこれを自分のものにして人に分り易く說き聞かせることの出來る人、さういふ手腕は實にすばらしいものですな。私も「孔子論」といふものを讀んで見ました。アレを見れば、あの時代といふものが略ぼ目に見えて來る。又孔子といふ人物も略ぼ目に見えて來る。その點は一寸他に匹敵がない。けれども論語は三千年も前の本だ。三千年の間にはいろ〳〵に研究がされた。今日では考古學だとか何だとかいろ〳〵な學問が開けて、アノ一字一字について當時の特別な意義までも詮索されて居る。あの人はさういふ風の研究は餘りしてないだらう。又興味も持たなかららう。只其處いら邊の本を讀む。讀むにも精讀とよりは通讀する。そして大體が分る。といふ風のやり方ではないかと思ふ。だから其道の專門家などから見たら多少批評すべき餘地があるかも知れない。さればといつて今日の處あの人の向ふに廻つて、其れを駁擊する丈けの人もないやうだ。

今もまだ「太陽」の人物評をやつてゐますか。何時か東京の新聞の事を論じたのがありましたネ。あれはどうせいろ〳〵他から聞いた事を綜合して書いたでせうが、觀察はどうも精透とはいへまい。亡くなつた鳥谷部君ならば、同じ他から聞くにしても、もつと諸種の報告を集めてもつと入り込んで觀察したらうと思ふ。然し鳥谷部君ならば、「報知」は「報知」。「國民」は「國民」。「朝日」は「朝日」と一つづゝ評論したかも知れない。アレ丈けの數をアレ丈けの文章の中に纏めて、兎に角大體分るやうに書いてあるのは矢張り山路君の手腕て其點は鳥谷部君が到底及ばないかも知れない。

山路君の文章は實にうまいもんだ。

△子煩惱の人

上司小劍

▲愛山氏の名は田舍の學校で英語を習つてゐた時から聞いてゐて、どんなえらい人かと思つてゐました。

▲其の後上京して、堺枯川氏の家に居候のやうなことをしてゐた時に、枯川氏が肥つた百姓老爺の如き人と連れ立つて歸つて來て、座敷で茶を飲みながら大きな聲で話をしてゐました。その肥つた人が愛山先生でした。

▲二年程前、目黑停車場から汽車に乘つた折、同じ車室に乘つてゐた子供がドアに手を挾まれて悲鳴を揚げたのを見ると、それが愛山氏の子でした。愛山氏の姿すら一二度物蔭から見たことがあるだけですもの、其子供を知る譯はありませんが、悲鳴を揚げてゐる子供の傍へ狼狽して駈け寄りながら、『痛いだらう〳〵』呼んでゐる肥つた人が、正しく愛山氏でしたから、悲鳴の主人を小愛山と想像したのでした。

▲愛山氏は私たちと違つて非常に子煩惱な人（また放任主義の人）だと聞いて居ります。私は自分の書齋を自分の城廓として、一寸たりとも子供の侵入することを許しません。子供は一種の野蠻人ですから容赦なく物を壞します。だから私は文明人としてこれを防禦するのです。幸ひにも腕力は此方が勝つてゐますから撃退するのは極めて容易です。私には子供をよく育てゝ行かうと云ふ心はありません。自分の仕事の妨害をされぬやう、讀書の邪魔をされぬやうに防衛してゐるだけです。だから挾い私の家でも書齋だけは別天地のやうになつて、子供は皆入れば祟りのある恐ろしい場所と思つて近寄りもしません。客があつても子供が傍へ來たことはありません。物は躾けやう一つです。

▲愛山氏の家は萬事が子供本位で、子供が鼠のやうに家を荒らしても愛山氏は放任して顧みないさうです。私は聞いたゞけで慄とします。凡そ子供の跋扈する家へ客になつたほど不愉快なことはありません。子供が一座の中心になつて、客はあれども無きが如く、菓子も

果物も皆子供に占領されて、主人は子供の守をしながら客の相手をしてゐると云ふやうなことがあります。我れに若し權力があつたら、『斯う云ふ場合の子供』を第一に遣つ付けたいと思ひます。然るに世の多くの客はこんな時に大抵『いゝお子さんですね、お幾つてすか』とか『坊ちやんお悧好てすね』とか云つて、鼻垂れ小僧にお世辭を云つてゐます。意氣地のないことてす。

▲愛山氏の史論は面白い。今のところ天下一品てせう。官學の亡者たちは口惜しくとも、指を交へて引つ込んてゐるより外はありますまい。併し私は只それが『面白い』と云ふだけを譽めるので、愛山氏自身の詮議するやうに事實が何うてあらうと、何が何てあらうと、古を見て今を考へるとか云のやうに妙な勿體を付けやうとは思ひません。そんなことは何うてもよいのてす。噓てもコジ付けても面白くさへあればよいのてす。歴史と名づくるものから眞實の響きを聞かうとはしません。

▲民友社出身の人々は、時代の讃歌者、微溫的論客と云ふ點に於て、德富氏ても、竹越氏ても、山路氏ても、多少づゝ技葉の趣きは異つてゐながら、根本て一致してゐます。是れ彼の人々の云ふことが、私たちに取つて、感服は致しながら今一息足らぬ氣のする所以てせう。もう少し深くと要求したくなる所以てせう。

▲愛山氏の文章、是れ實に當代第一てせう。單に日本第一の文章家として、或る一人を指名するの必要が若しあつたとすれば、私は愛山氏を指名したい。

▲愛山氏の文學論、小說評。これも無論節々には棄て難い點はあるけれど、大體の尺度が間違つてゐるので面白くはあるが物にはなつて居らぬ。曾つて早稻田文學記者の云つた通り、『愛山氏は遂に新思想新藝術と無交渉の人』てあらう。文壇に黨派の力を云々するが如き愛山氏の最も大なる僻見てある。

△山路愛山君

木下尚江

山路君は曾て牧師もした。耶蘇教新聞の主筆もしたけれど、山路君の信仰と思想とは始終儒教を離れない。

既往の基督教信者と云ふものは、何れも皆な政治家になる心得で直に洗禮を受け、論語を以て聖書を解釋して來た。外國傳道會社の金錢の下に生活しがら、其の心の底には矢張攘夷鎖港時代の血液が流れて、宣教師と云ふものを毛嫌いして居る。其れて輕薄な連中は宣教師の奴隷となり、氣慨のあるものは宣教師を排斥した。概して言へば、從來の基督教徒と云ふものは、表面は絶對平等の愛の福音を説いて居ても、其の實體は國家主義、武士道主義、儒教主義、功利主義てある山路君は其の最も若かくして、且つ最も明白な代表者てあつた。

然れども此の國家主義、武士道主義の僞基督教は、到底純粋の耶蘇の福音と兩立することの出來るもので無い。故に思想信仰の統一と貫徹とを要求する眞面目の人が、何時までも此の鵺のような基督教徒て、自を欺き他を欺いて居られないのは必然の勢、當然の途てある。「民友社」と云ふものは、曾て靑年基督教徒の新團體として、一般世上の耳目を集めたけれど、當時の民友社の耶蘇教と云ふものも矢張舊來の鵺式を免れなかつた。吾人は民友社の多の才人が其行迹を曖昧にして仕舞つた中に、融通の利かない兩個の志士を見た。山路彌吉君と德富健次郎君。

日露戰爭は此の兩君に其の立場を明白にせねばならぬ機會を迫つた。德富君は純福音に赴き、山路君は之を遠離した。若し予に衷心の希望を吐露させるならば予は山路君に猛氣一番純福音の使徒となつて貰いたかつた。其れにも拘らず、予は當世の才子が常に八方に媚を賣り嘘ばかり吐いて其れを一世の手柄と心得て居る中に、山路君が其の立場を明かにして露堂々たる態度を畏敬する。

身は江湖に在りて心に廟堂を忘れないと云ふのが、

多分山路君の事てあろふ。

△山路愛山論

鐵拳禪

一

◉浸水旬餘未だ全く減水せず、本所深川龜戸方面なほ膝を沒する所あり。首都の慘害斯の如く劇甚なるもの天明以來曾て見ざるの大洪水なりと。新聞記者の蜚競うて洪水文學に筆を染め、形容詞に拂底を來したる、又故無きに非ざる也。

◉足立栗園は『中外商業』に、熊澤蕃山の治水策を草す洪水文學以外、世を警醒するに足る好文字也。この際愛山の不思議にも沈默し、『國民』にひとり言を寄せしに過ぎず。ひとり言は蘇峯が東京だよりを休む日曜毎に書くもの、第一面第一段にあり。

◉愛山の續き物は、常に第二段即ち國民文學欄に現はる。昨年四十七士の稿を連載中、突如公伊藤の薨去に會し、機敏なる彼れの筆は電氣仕掛によりて、四十七士は春畝公と早變りせり。斯の如きは愛山にして、始めて能くすべき藝當也。

◉唯此の一點より觀る時は、愛山は人氣取を主とする際物史論家也。義士熱流行すれば四十七士を解剖し、公春畝斃るれば之が逸事を綴り、匆々として落筆する所、愼重の態度を缺くの非難無きにあらず。而も彼れの筆は一種のチャームを有す。

◉現時ブックメーカーを以て目せらるゝものに、大和田建樹あり、佐々木信綱あり、久保天隨あり、芳賀矢一あり、高橋五郎あり、加藤咄堂あり、大町桂月あり澁江保あり。愛山も亦都合によれば此の仲間に入る人物なれど、史論專門の故を以て僅に免かる。愛山の爲めに慶すべきや否やを知らず。

◉愛山の著書に、『荻生徂徠』『新井白石』『豐太閤』『足利尊氏』『源頼朝』等の評傳及び『社會主義管見』『支那思想史』『現代金權史』等の史論あり。前二者は民友社出版の『十二文家』中に收められ、愛山の文名を唄はるゝに

至れる處女作也。
●されば愛山を論ずるには、必ず『十二文豪』を忘るべからず。而して又雜誌『國民之友』を閑却すべからず。何となれば、此の一叢書、一雜誌は彼れが文壇に發足する第一歩なれば也。

二

◎『國民之友』廢刊後の民友社は民友社印刷部となり、活版業と出版業との兩天秤主義を執るに至り、國民新聞は三面種に客を呼び、昔日の如く思想界に重きをなさずと雖も、德富蘇峰は依然として社長たる也

●今日の國民新聞には、德富の双翼として吉野太左エ門あり、山川某あり。美術骨董に森大狂あり、相場に野城久吉あり、政治に伊達源一郎ありて、其の活動昔日に數倍するもの有るべしと雖も、吾人は何となく若々しかりし青年の當時を回顧して、愛惜の情を禁ずる能はず。

◉當時蘇峰の周圍には、弟芦花あり、平田久あり、竹越三叉あり、塚越停春あり、人見一太郎あり、北村透谷あり、內田魯庵、宮崎湖處子、國木田獨歩等あり、古谷久綱あり、何れも一粒選りの俊才也。蘇峰は是等の諸俊才を擁して思想界の一角に據り、所謂民友社流の文躰は靡然として青年の摸倣し、愛好する所となれり。愛山も亦、此の裡より產出せる一個の人物たる也

●史論を以て愛山と拮抗するに足る者は、三叉及び停春の二人なるべし。然れども三叉は代議士となりて筆硯に親しまず、停春は東京府編史の業に隱れて顯はれず。遂に愛山をして聲名を擅にせしむるに至れり。

●愛山と嗜好を異にせる芦花、透谷、魯庵、獨歩等は文藝家として頭角を拔き、湖處子は落伍して一たび宗敎界の人となりたれど、尙文藝に活きんと焦慮しつゝあるに似たり。

●當時の文體は、湖處子と云はず愛山と云はず、皆一個の模型によりて製造したる落雁の如く、何れを何れとも別ち難きものありき。其の圏點の多きことも亦滿天の星の如く、讀者の目先づ眩せんとせり。

●愛山の文章に個性を發揮し、一種の特色を有するに

至れるは遙かに後の事也。少くとも彼等は蘇峯に私淑し、蘇峯の感化を受け、未だ特色を出すに暇なかりし也。彼れが處女作なる『荻生徂徠』等を見ば、今日の文章と雲泥の差あるを知らん。

三

◉民友社派の文士の多くは新時代の教育を受けたるハイカラなるに、單り愛山のみは何等語るべき學歷無く誇るべき母校を有せず。彼れは獨學自習によりて、今日の學力と才筆とを得たる也。

◉獨學自習と稱するも、薄田泣菫の如き、佐藤紅綠の如きは中學に學べる事あり。創作家にして愛山と共に獨學自習を以て威張れる者は、田山花袋一人に過ぎず實際は他に二三氏を數ふるを得べきも、惜いかな新思潮に觸れず。

◉聞く愛山の少時漢籍を自修するや、深更に至るも燈火を滅せず、古机の前に胡座して書と親み、隣人の歎賞する所となりきと。此の一事を以てするも、彼れは新井白石の好評傳者也。

◉愛山は駿州沼津の產、本年正に四十有三歲也。彼れと同地の產にして文名あるもの、遲塚麗水あり。又彼れと同齡也。

◉同地同年の產なりと云へば、彌吉と金太郎とは竹馬の友なるやも知るべからず。後世の史家は必ずや斯かる想像に暇をつぶす事ならんが、彼等幸に健在なれば聞いて見れば直ぐ解ること也。

◉長じて彌吉は國民新聞記者となり、金太郎都新聞記者となり、愛山と云へば史論と人物評を書く男、麗水と云へば紀行文と小說を書く男と相場がきまれり。鄉黨の仰いて愛山を見、俯して麗水を汲むも尤もな次第也。

◉愛山、『國民』を退きて後、『信濃每日』に主筆たりしが、幾くも無くして東京に舞ひ戻れり。『獨立評論』と『太陽』とは、現下彼れの氣焰を吐くの壇場也。

◉『獨立評論』は片々たるの雜誌に過ぎずと雖も、一時は非常に評判よく、多數の讀者を有したりき。今は玄黃社の經營に移りたるものゝ如く、又昔日の評判なし

これ愛山の人氣の落ちたるに由る也。

◉一人の筆を以て一雜誌を賣るもの、『聖書之研究』の内村鑑三あり、『日本及日本人』の三宅雪嶺あり、内村は愛山よりも吸引力强く、雪嶺は吸引力强からざるも尙人氣は有り。されど『日本及日本人』の俳句で賣行好しと云ふを聞くに至りては、聊か心外に存ずる也。

◉内村は靈筆、雪嶺は冷筆、愛山は麗筆也、内村は漢字を知る事多からず、而も其の筆神彩あり。雪嶺は豐富なる漢字の智識を有す。文は多少拮掘聱牙なるも、冷嘲骨を刺す所、萬斛の涼味を湛ふ。愛山の文はサラ〱として凝滯なく、巧妙なる浪花節の一齣を聽くの感あり。

◉人物評論家としての愛山は吾人曩に論じたる事あるを以て、更めて玆に之を云はず。唯彼れは到底机の人也の一言を繰返し置かんと欲す。

◉彼れが株式界の人物を論じたるが如きは、いよ〱彼れの『机の人』たるを證するもの。斯界の事は『往くとして可ならざる無き』蘇峰すら閉口する所、四十七士に關する珍書を抜きて嬉しがつてる愛山の能くすべきに非ず。宜しく『國民』の野城にても聞いて見るべき也。

◉文士にして株式に精通するは、村上浪六なりと云ふ彼れをして愛山の觀察眼を具へしめ、縱橫無盡に斯界を解剖せしめば、雜誌界の呼物となる可し。

◉『太陽』の人物月旦を擔任する愛山は、先づ書齋を出でざるべからず。『足利尊氏』と『源賴朝』を評傳したる筆法を以て望むべきに非ざる也。

四

◉愛山の住宅は、府下中澁谷に在り。草葺の百姓家也春暖若くは小春の一日、彼れ椽上に日南ぼつこし乍ら讀書するを見る事あり。細君に對して短氣なる彼れも書に對しては悠々たり。

◉彼れは此の百姓家を出てて、蘇峯と共に粕谷の百姓家なる芦花を訪ふ事あり。芦花に好く、蘇峯に好きは愛山の愛山たる所也。

◉彼れの國民新聞社に出社するは、報酬を受取る日位

なもの也。多くは自宅にありて執筆し、讀書す。

◉愛山のガラになき活動を始めたるは、去三十九年三月十一日也。彼れ及び田川大吉郎、中村太八郎、山根吾一等によりて發起せられたる電車値上反對市民大會は、雨降りしきる日比谷公園に於て開かれぬ。彼れは當日彈劾文を朗讀し、會衆の拍手に醉うて彼れの顏は生來に無き光輝を放てり。此の時の愛山は、一個文壇の愛山に非ざりし也。

◉中村は信州の青年間に勢力を扶植す。普通選擧は彼れの理想とする所也。風采堂々として貴公子を欺き、寒風凛烈なる高原の產物とは思はれず。風丰を以てすれば、愛山の如き其の足元にも寄り付けず。

◉愛山は又、國家社會黨を組織し、自ら其の首領となれる事あり。是等の事あるを以て、愛山を以て芝居をやる男と做す。然れども吾人を以て觀れば、彼れは旨く芝居をやれる男に非ざる也。

◉若し彼れの接近する者より多少芝居氣のあるを求むれば、木下尙江及び竹越三叉の二人也。今之を番附くれて木下は大關、竹越は關脇、而して山路は小結也。

◎愛山は野人にして禮に嫺はず、惡口し罵倒するの癖あり。是れ彼れが溫厚なる老友等の、彼れを餘り善く云はぬ所以也。併し乍ら、愛山より此の一癖を去らば彼れは人物評論家たるの資格を失せん。

◎吾人は彼れの未來に就て多く云ふを欲せず。唯現今の史界に於て、史學專攻の博士學士以外に、本論の愛山及び木村鷹太郎等の如き刺激劑あるを喜ぶ者也。

（八月二十一日稿）

△山路君

斯波貞吉

山路君と深く交はつたとはないが、平素から山路君は松井柏軒君及び石川半山君と共に新聞記者の一時代を代表する人であると思つて居る、此三君は固より性格や主義を異にして居るが、新聞記者として頗る似通つて居る點がある、成島柳北に續いて福地櫻痴の全盛時代に於ける新聞記者は知らないが、新聞記者が該博

な知識を要する樣になつても、尙漢學の素養を重なる新聞記者の資格とする現今の過渡時代に於て、此三君は最好の代表的新聞記者である、此三君は共に外國語を解する、然しながら其總ての着眼は漢學の素養が重きを爲して居る、松井君及び石川君は共に外國を見た山路君は外國に行つたことは無いやうであるが、此三君は夫々主義を異にして居るに拘はらず、種々なる問題の解釋の仕方が同じ樣に出ることが多い、是れ皆漢學の素養から來ることであると思ふ、此三君は粗放磊落な性質の中に、自から細心な所がある、確に一時代の反映てある、此以外に山路君に就いて考へて居ることはない只山路君は非常な勉强家て、話すにも書くにも材料を蒐集するにも、非常に勤勉に遣つて居らるゝさうだ、此等の點は私の大に敬服して居る所てある

△山路愛山論

田川大吉郎

僕は當世の士に殆んど畏敬する所の人を見ない。所謂政治家、新聞記者、文學者、有志家、德行家若くは宗敎家の類に此人はと思つて衷心より畏敬の念を拂ふべき人を殆んど見ない。其間に山路愛山は各種の方面より觀察して、僕の最も畏敬して居る友人の一人てある。

それについてはお話すべき條項が頗る多い。けれども彼の思想、性格、主張は彼自らの言論文章の上に極めて顯著てある。從て其れを玆に繰り返す必要を見ない。彼は蓋し當世に於ける最も多く書く人の一人てある。

僕が彼の英才について聞いた始めは明治二十二年頃てあつたらう。其頃府下の基督敎主義の四學校(明治學院、青山學院、立敎大學、麻布東洋英和學校)の間に同盟文學會なるものがあつた。文學會といへば、只文章若くは詩歌に關する會合の如く聞えるけれども、歐洲の思想に親炙して居る此れ等宗敎學校の文學會なるものは、さういふ性質のものにはあらずして、もつと廣い、文學政治宗敎の各方面に亘つて意見を吐露し

特に辯論を錬磨する機關てあつた。それて今日に於てこそ各學校の間に聯絡もあり又雄辯會の組織もあるけれども、當時に於て雄辯錬磨の機關又各學校の連絡は廣き都下に唯此一の會があつたのみだ。僕は宗教學校の書生てはなかつたが、此方面の人に交ることが樂みて、此會に興味を抱いて屢々會に臨んだ。其二十二年の秋(？)の文學會には缺席した。其文學會は麻布の東洋英和學校て開かれた、其時山路愛山は英和學校に於ける生徒を代表した辯者の一人てある。其演題は「關新助」、名からして已に奇拔てある。何人も此名に於て彼が何を語るてあらうかと驚異の眼を以て之を見た。其會衆の中には關新助は何人なるかを知らぬ人が多かつた。彼の說明によれば關は有名なる數學家てある。其死せる數學家を拉し來つて彼は盛んに一種の經論を說いた。無論彼の演說の長所若しくは癖として極めて博引傍證て趣味に富んて居つた。段々長くなつて結束するに困つたといふ事てある。何にせよ彼は演說を以て會衆を魅し去つた事は、彼が思はず長く語つたといふ事て察せらるゝ。其會衆の中に當時の大學總長加藤弘之男があつたさうな。そして其加藤男が演說を聞いて感嘆の餘り、帝國大學の秀才の中には未だ一人の彼に匹敵する程の辯才を見ないと賞讃した。僕は此會には行かなかつたが、此時以來彼の名を聞いて未だ會はざる中から敬意を拂うて居た。彼と相知つた事も略ぼ其頃からてある。

彼は嘗て基督教徒てあつた。今も尙あるや否やを知らない。彼が基督教の傳道者としての傳道の力量若くは其活動の方向については僕は一向聞いた所がない。只熱心なる彼が今日の如く冷かに我關せず焉の態度を取るに至つた一原因は、今日の基督教徒の無氣力てある。明かには記臆せぬが地方の小學教員か何かが、基督教の信仰の爲めに其職を奪はるゝ危き目に逢うた事がある。其場合に彼が憤慨して信仰の自由の爲めに天下に訴ふる處があつた。それに對して基督教徒の多數は極めて冷やかなる態度を示した。そんな具合に彼は基督教徒と非基督徒との爭に對して、熱烈な、火の如き態

度を取つた事が幾度かあるが、多數の基督敎徒は彼を獨り陣頭に立たせる丈けて、一向其後に附かなかつたそれて基督敎徒の多數に愛惜を盡かした事が彼の基督敎會に遠ざかる原因の一つてあつたらう。彼の基督敎に遠ざかる初めの信仰の狀態からいへば今日の程まて相離れてゐなかつた。然し一旦遠かつて其間を近けるものがなくなり、彼も亦他の方面に益々其領土を開いたから自然〳〵緣が薄くなつた。近日彼の口から屢々基督敎會を罵倒するの聲を聞く。初め相背いた時から漸を以て玆に至つたのは蓋し餘義なき結果てあらう。

彼が新聞記者として信州に赴く時に其友人に洽ねく送別の辭を求めた。僕は其時「和爲貴」の三字を書して僕も從來和氣に缺くる所があつて、幾らか誤解され蹉跌を招いて居るが、君にも此癖があると思ふ。僕自らの戒が直ちに君の戒てあらうかと思ふから他の事はいはぬ、只此一語を進めるといつて送つた事がある。性格を批評すれば僕と彼とは正反對て、彼の性は火の如く、僕は水の如く、彼は熱、僕は冷て、確かに一致はして居ない。僕の和に於て缺くるは冷の致す所て、彼のは熱の致す所てあるけれども、其和に於て缺くる所あつて動もすれば朋友の不快の感を惹起するは同じい但し彼のは熱の致す所てある丈け其失敗を恢復することも早い。朋友全人が早く笑つて手を握ることが出來る。僕のはそれが動もすれば長さに亘る、此點に於て彼の性は僕の性よりも一段美しい所があるのてあらう

彼の行事の中て異感を與へたものゝ一つは三十九年電車賃銀値上げの反對運動を起した時に西川光二郎一派の人が故意に暴動を起したものゝ如く誤解せられて起訴された時の事てある。彼は證人として法廷に呼ばれて係判官の審問を受けた。法廷の習慣として證人は判官の前に直立せしめらるゝ。恰かも被告が審問を受くる態と相似て居る。彼は呼出されてツカ〳〵と其席に入るや直ちに判官に向て椅子を與れと要求した。僕は身體が肥滿して居るから椅子なしには堪へがたいといつて要求した。判官が苦笑して之を與へた。それが抑々異樣の感じを與へた幕開きてある。判官が問を進

むろに連れて彼は極めて卒直に知つてゐる、知つてゐないと答へた。其答が如何にも無雑作、無愛嬌てあつた。傍聴者から見れば彼は問はれて居るのか問ふて居るのか分らない。そして其言葉は君、僕てある。誰も法廷に望むと此場合慇懃に形を正して言葉つきも叮嚀になる。それは習慣てある。彼は少しも形を變へない辯護士、判官、傍聴人皆餘程珍らしく彼の態度を眺めた。僕が其時の噂をしたら彼はカラ／＼と笑つて、僕には他所行きの言葉と普段用との區別がない。他人には區別があるやうだが、其區別のあるのが可笑しいので僕は唯一本調子てやつたのに過ぎない。アノ時オシマヘに帽子を忘れたのが一つの失敗て、其他はよくやつたのだといつてゐた。花井卓藏君は此時初めて山路君を見たと見えて只驚きに驚いてゐた。法廷初まつて以來初めての證人てあつたらうといつてゐた。それは彼自身のいふ通り、他所行の言葉を使はない證據で、如何なる場合に於ても彼の言語は一本調子てある。談話に於ても演説に於ても、朋友同志の間に於ても、或は貴人の前に出てても全く同じてある。彼は飽くまても其一本調子て押し通す覺悟て居るらしい。

僕が彼に望む所は彼が文明批評家たらんことてある彼の學と彼の筆は今日に當り之を爲し得る唯一人てあると信ずる。高山樗牛の世にあるや、自ら文明批評家を以て任じ、世間も亦之を彼に許してゐた。然し僕を以て評すれば文明批評家の意義は寧ろ愛山の長所て、樗牛よりも適任者てあるを僕は信じて居る。

彼の文章が和漢洋を混じて居るが如く、彼の思想は和漢洋のいづれにも通じ、且つ精烱の史眼を以て當世の實務に目を放たない。だから古を撫して今を論じ西を計つて又東を計る。今日に於て日本の古今の史實に出入して東西の思想を參酌して一家の言を立て得ることと彼の如きものは比倫が少ない。此故に僕は彼が文明批評家として大いに爲す所あらんことを期待して居る。

僕を以て彼の思想を計れば。及ばない所はいろ／＼多いに拘らず、彼の思想の近來國家主義に傾いて來た

事を、彼の爲めには一の進境であるかも知れんけれ共彼の從來の經歷を知つて居る僕は少しく遺憾に思ふ。近來の彼の主張の中からは世界的といふ文字も思想も全く除かれて了つた。彼は國家に全力を盡すことを世界に全力を盡すことゝ同義である、國民の義務は只國家に盡すのみであると一概に考へて居る。僕は此言葉に反對はしない。然し、國家に最良の勤を盡すには、世界の思想、世界の形勢を思料することが大切であると考へて居る。或場合に於ては世界の形勢思想に我國家の方向を順應せしむるべく促すことが大切なりと考へてゐる、猶個人としてよき生存發達を遂げんが爲めには社會の形勢狀態を顧慮して之に順應することの必要なると一班である。此意味に於て僕の思想の中からは世界的といふ方面を奪ひ離すことが出來ない。處が彼は此方面を全く殺して了つて居るやうである。之が彼と僕との間に思想の背馳して居る一點であらう其餘に於ては特に之を掲ぐべき程の異同を見ない。

尙愛山を考ふるに當つては、愛山と蘇峯との親交についても考ふる必要がある。蘇峯の立場の變遷については骨肉の間すら尙保ち難かつた事がある、及門の弟子とも目せらるべき當今の名士にして彼と相背いたものも幾人もある。其間絕えて怨言なく、二十年一日の如く蘇峯と始終し得たものは只愛山のみである、愛山の氣象、主張から見ては、蘇峯の態度に充たなかつた事も度々あつたらう、然るにも拘らず、彼が熱心に蘇峯の友人となり、時としては蘇峯の爲めに最强の辯護者となつて戰つた事もある。此一事、彼が如何に友情を重んずるか、友人の爲めに利害名譽を棄てゝ進んで戰ふ意氣があるかを示す、蘇峯が嘗て山路愛山に與ふる一書を公けにして自分の境遇の辯護に充てたのも因緣なきにあらずである。蘇峯の四面楚歌の聲に沒し了らんとした時、彼の唯一の知己慰藉者は即ち愛山であつた。愛山が蘇峯の爲めに辯ずることの當否は之を措いて、愛山の情は即ち酌まねばならぬ。愛山は熱の人である。即ち亦情の人である。然しながら彼の史眼は燃犀炬の如くである。(完)

日英大博覽會に於て

名譽大賞

受領の光榮を得たる

ビール は東洋に於て獨り

當社あるのみ之れ全く大方諸彥の深厚なる御同情の然らしむる處當社は更に一段の奮勵を加へ以て各位の御眷顧に酬んとす

宮內省御用達

大日本麥酒株式會社



(中付の一)

（中付の二）

金子元臣先生
江見清風先生　合著

和漢朗詠集新釋

▲內容見本 申込次第贈呈

クロス製全一册
定價壹圓八拾錢
小包料金拾貳錢

朗詠集の秀句は金玉の碎片、錦繡の斷片なり。後世幾多の物語文謠曲等は、これを錯綜して、燦爛たる光彩を放てるものならずや。惜むらくは、その註釋書に至りては、私註は杜撰、集註諺解は疎漏にして、一も完全なるものを見ず。然るに、幸にも兩先生、積年苦心の結果、その新釋を公にせらる。一々出典を明し、考異を揭げ、語義を析き、句意を釋き、かつ**字畫索引**、**作者列傳**、**雜考**等を添たり。秘閣の珍、箇人帳中の藏、また本書の參訂したるところ、その用意の周到なる、體裁の完備せる、近來罕に見る好著とす。これ實に文學研究者は勿論、一般の讀者諸君が座右の寶典として、本院の推奬するを憚らざる所以なり。

發行所　東京神田錦町一丁目　(振替東京四九九一 長電本局二四三八)　明治書院

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新古書籍地方販賣

勉強迅速取次

地方販賣書籍

地方讀書家諸君の御便利を計り新古書籍は何等の種類を問はず多少に係らず勉強取次仕候

新本割引

新本は總て定價通りにて郵送料は弊店の負擔と致し候

古本販賣

古本は價格の不同有之候間一應御照會の上御注文被下度御照會の節は往復端書又は返信郵券封入にて願上候

特別割引

新本にて學校圖書館團體等にて多數御注文の節は特別割引致し候間御照會被下度候

御注文便法

御注文の節は代價書名著名等を御記入被下度御送金の節は振替貯金にて東京壹七壹七壹番東條書店宛に御拂込被下ば途中盜難紛失の恐れ無く至極安全に御座候

東京市神田區南神保町十五

新古書籍地方取次 **東條書籍店**

振替口座東京壹七壹七壹番

東京帝國大學文科支那文學漢文科講師 日下寛先生著

懷中 菜根譚講義

總クロース懷中形製本天金付紙數四百五拾頁
正價金六拾錢也
壹萬部限り特價金五拾錢郵税六錢

本書は道德の修養○處世の秘訣を說ける書にて天下何人も讀まざる可からざるの書なり

三大特色

一原文の外にふりがな附讀方及字解を施し講義は實に平易細密なり

二著者は有名なる漢學の大家日下先生なれば他の類書とは大に異れり

三小形にして携帶に便特價金五拾錢は空前の安價なり

(中付の四)

賜天覽

日本武士道

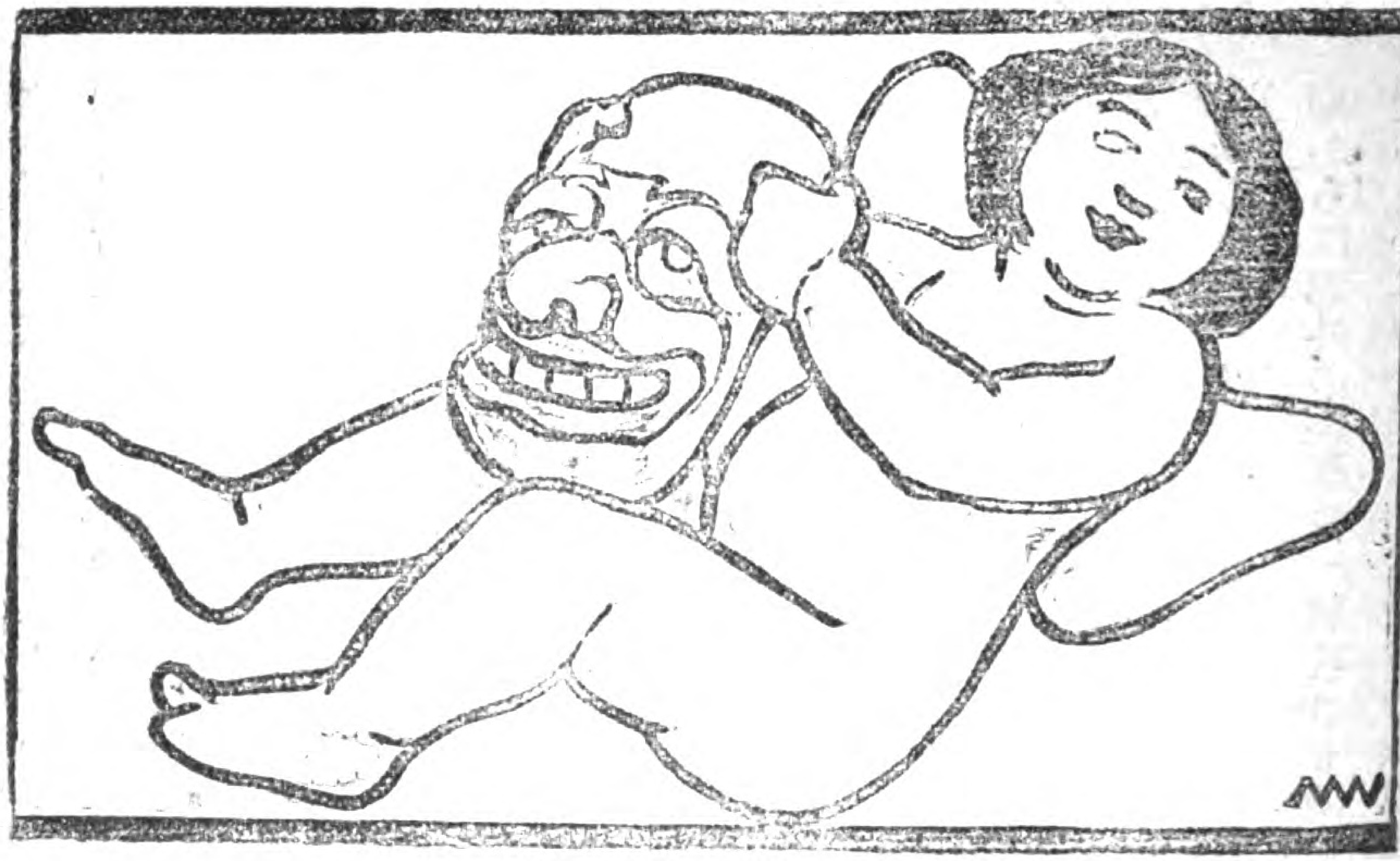
大山陸軍大將題辭 東鄉海軍大將題辭

文學博士重野安繹 日下寛兩先生著

菊判クロース四百卅頁
定價金壹圓五拾錢小包料拾五錢也

發行所 東京神田表神保町二 大修堂 振替口座(一九二六八番) 賣捌 東京堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



子一人

小栗風葉

室田夫婦は永い間待ち暮らした郊外の新宅へ漸と移る事になつた。下等飲食店や、店借りの小賣商人ばかりで取卷いた騒しい町家住ひが、夫婦には此の上も無い苦痛であつた。其所には氣難しい舅も一所であつた。細君の身にすれば、町家住ひの騒しい其事よりも、舅や姑と一所である事が仍苦痛だつたかも知れない。舅は其の居周りのコセ〳〵した地所や家作の世話をしてゐる。

室田は病身であつた。未だ漸と四十に手が届いたくらゐの年輩であるが、自分では最う激しい世の中の生存競走に打勝

つて何うと云ふやうな野心も無い。夫婦の間に男の子が一人あつて自分の望みも樂しみも殆ど其の一人の子の行末に懸けて了つてゐる。體が勝れぬ所から、萬事細君任せにして自分は一切口を挾まぬ事にしてゐるが、子の敎育だけは非常に嚴ましかつた。町家住ひを厭つたのも、一つは周圍の賤しい生活に子を染ませまいと思つたからであつた。

子は數へ年の八歳になる。室田が體も壯健て、色々華かな希望を抱いて壯んに所々方々を活動し廻つた時代に生れたのである。東京から大阪、中國、九州、北陸の雪の中でも育つた、滿洲で苦力の脊中にも負ぶされた。然うして二年三年ぐらゐに那地這地と土地を變つて育つて來た子は、外の子どものやうに住み慣れた一處に執着する事が無かつた。何所へ移つても直き其土地に馴染んだ。而して東京にも大阪にも九州にも滿洲にも、皆自分の家は其儘に在るものと思つてゐた。所が今年學齡になつて四月から町内の小學校へ通學する事になつた。毎朝隣近所の子ども達と誘ひ合して、山本君だの伊藤君だのと親達も知らない苗字を呼び交した。而して今迄とは遊び友達も殖えた。町内の同じ學校連と集まつては餘所町の學校や子ともを評し合ふやうな事もあつた。究り自分自身の周圍を愛着する念が始めて生じて來たのである。

室田夫婦が新宅へ移つたのは、子が丁度夏季休暇の間であつた。其の休暇を切り目にして、秋の二學期からは郊外の小學校へ轉校させる意りであつた。子は年の割に利き分けの好い方であつたが、學校を變るといふ事は何うしても肯き入れなかつた。そればかりで無く、今迄の町家を放れて郊外の新宅へ移

る事も拒んだ。

「其んな我儘を言つて、阿父さんも阿母さんも最うズッと向うの家ばかしして、此方へは最う皈つて來ないんだが、それても可いの？お前一人此方に殘るの？、」と細君は引越しの荷拵へをしながら、舅や姑に内密て子に言つた。

「然うすりや、僕毎日向うの家へ遊びに行くから可い。」

「それよりも、阿父さんや阿母さんと一所に向うの家へ行つて、此方へは向うの家から遊びに來りや可いぢや無いか。向うの家が勇ちやんの本當のお家だよ。」

「ぢや此方の家は？」

「祖父さんや祖母さんのお家さ。」

「うゝん、向うも此方も同じ家だい。」

「ぢや勇ちやんは誰の子？阿父さんや阿母さんの子ぢや無いか、子といふものは親の傍に居る者てすよ。誰でも見て御覽、皆阿父さんや阿母さんと一所に居るから。」

子供はベソをかいて、

「ぢや、僕晝間向うのお家へ行つて、夜は此方へ來るよ。向うの家ぢや朝學校が遲れるもの。」

「だから、お休みが濟んだから學校を變るのさ。今度の學校は向うのお家から直ぐなんだから。」

「厭だ、那んな百姓の學校なんか。朝だつて誰れ誘つてくれや爲ないもの。」と終に泣き出した。

新宅の方は漸と建具が入つたばかりで、障子も未だ張らずにあつた。それでも夏の事とて凌ぎ易い何時までも空家で置いては不用心だと云ふので、右も右くも引移つたとは云ふものゝ、ほんの寢道具と三度の煮沸に差支無いくらゐの用意しか無い。郊外の一軒家で靜かは靜かだが、始めて引移つた其夜は有繋に寂しかつた。一つは住み慣れぬ所爲でもある。道具も何もないガランとした空家の一間に、間に合せの手ランプを點して、夫婦は石油焜爐で炊いた半熟の飯を役目のやうに濟した。

「困りましたねえ、勇には。」と細君は如何にも物足り無さゝうな顏をして、「那の子を祖父さんや祖母さん任せにして置いて、私達ばかり此方へ引移つたつて、何だか移つたやうな氣がしませんわ。」

「だが、今無理に連れて來ても、此方には遊び對手一人有るんぢやなし、寂しがつて到底も居着きやしないよ、まあ休暇でも濟んだら此方の學校へ入れて。此方で友達の出來るまでは何うしても向うを戀しがるさ。子どもは何よりも友達ほど好いものは無いんだからね。」

「友達も友達ですが、那の子は悉かり最う祖父樣子なんですよ。貴方が彌喧しく言つて、祖父さんにばかり懷かせう懷かせうと被仰るもんですから、到頭那んなになつて了つて、此節では祖父さんより外に好きな人も怖い人も無いんですもの。全で御覧さない、貴方や私の云ふ事なんか耳に入れやしませんから。」

「まあ可いさ。お前は然う言ふけれどね、勇が那して祖父さんに懷いてゐる爲めに、那の氣難しい人が何のくらゐ皆に機嫌が好いか。」

「けれども……何てすか私、那の子を祖父さんに奪られて了ひさうな氣がしまして……」

「何有に、祖父さんよりや友達なんだよ。」と室田は一口に然う言つた。

食事の後片付けをして、臺所で細君が洗廻しをして了ふ間、室田は明りも無しにボンヤリ暗い中に座つた。開け放した椽側の外も眞暗である。風も無い周圍の田圃の濃ひ闇は、四方からヂッと此一軒屋を窺つてゐるやうに鳴りを潜めて、今迄の町家住ひの眞夜中よりもシンとした。新しい木香と、塗立ての壁の布海苔の匂とが濕つぽく肌へ通つた。天井板のミチッと干反る音がする。里の方から子どもの聲を呼ぶ聲が聞えた。

「おい。」と急に思付いたやうに臺所の細君を呼んで、「勇は、昨夜寢際に咳をしてゐたぢや無いか。」

細君は濡手に手ランプを持つて臺所から出て來た。

「咳も咳てすが、私是から勇を連れに行つて來ますよ。今も考へたんてすが、那の上貴方、祖父さんと一所に寢む癖まで付けたら、一層最う私の所なんかへ來なくなつて了ひますもの。何うしても來なければ爲方がありませんから、私毎もの通り勇を自分の傍へ寢させますから、今夜は那方で泊るかも知れません、可う御座いますか。」

「そりや可いけれど、是から行くたつてお前、眞暗な田圃道で獨りぢや困るだらう。明りのある所まで送つてつてやらうか。」

空家も同樣であるだけに、後は氣安い、外から戸だけ閉めて二人は出掛けた。

途中で室田は、

「まあ然し、祖父さんに懐いてるのは好い事なんだから、お前も餘り口喧しく勇に言はんが可いよ。祖父さんも大儀だ〱と言ひながら、彌張り孫に貪られるのは嬉しいものだから、勇の言ふ事なら何んな事でも爲てやる。所が俺やお前ぢや、然うは言ふまゝにして貰へないものだから、自然祖父さんの方へばかり懐くんだが、今に物が分つて來りや、誰よりも親が戀しいぐらゐは獨りでに知るさ。今の中だけだよ。那れが若し祖父さんに懐かなかつて御覧、それこそ始末が惡いから。勇は那れで家庭の有力な調和者だよ。」と言ひ聞せた。

細君は其夜は新宅の方へ皈らなかつた。子は何うしても一所に來る事を承知しなかつたのである。室田も大方然うだらうとは豫想してゐた。大人でも餘り氣味の好く無い田圃中の空家に、何時までもポツ〱目を覺しながら思つた。今迄の賑かな町家住ひから、急に此んな寂しい所へ子どもを連れて來ても、慣れるまでが可哀さうに思はれた。

翌朝細君は、子の學校用具を入れたズックの雜嚢を抱へてボンヤリ皈つて來た。

「今日こそ一所に連れて來ようと思ひまして、色々と勸めて見たんですが、祖父さんが來なくつちや厭

だと言つて何うしても肯かないんですよ。其中に近所の子ども達が遊びに來ますし、最う私なんか見向きもしないんですもの、本當に憎らしくなつて了ひまして。」と心外さうに雜囊を投り出して、「貴方の朝御飯の支度も氣に懸りますし、私も何時迄勇なんかに對手になつてゐられませんものですから、祖父さんに、今日は學校のお浚ひをさせますから、是非寄來して下さいつて然う言ひ置いて、用具だけ持つて來ましたの……祖父さんは又勇の前で然う被仰るんですよ。休み中は學校でも遊ばせる爲めの休暇だから、此暑いのにお浚ひなぞさせるのは可哀さうだ。日中になつたら、向うは田圃中で風通しが好いから、勇と二人で午睡にでも行かうだつて。するとね、勇が何を言ふかと思ひますと、祖父さんは約束を忘れるから厭だ、午から螽斯を捉まへに行く筈だつて言ふと、然う〳〵、勇は一度約束をした事は忘れないから豪い。祖父さんも暑いので閉口だけれど、約束だから行かなきやなるまいだなんて。本當に今日々の炎天に曝らされて歩いて、若し病ひでもしたら何うするでせう、祖父さんも留めて下さるが本當ぢやありませんか。」

「然う何うも言ふまゝにさせちや爲めにも成らん。年寄は子どもに甘いからな、何うも困つたものだ。」

と室田も眉を顰めた。

此の日の午後、日中の暑い盛りを、舅は孫や孫の友達四五人に取卷かれて、ゾロ〳〵と田圃道を來た。細君は裏口から遠く見付けて高聲に告げると、室田は讀んでゐた書物を投り出して窓際に伸び上つた。强い日光に灸られて、青い葉がギラ〳〵と油染みたやうに光る低い桑圃の陰に、蝙蝠傘を傾げた老人の

上半身と、金巾の覆を冠せた白い帽子の頭だけが幾つと見えた。

「那の三人目の……そら、帽子て何か逐つてるのが勇だらう。」と室田は窓の内から大きな聲で細君に言つた。

「然うです〱、道傍へ跼んだてせう今。」と然う言ひながら、細君は急いで田圃道へ出た。

強い日射しを片手て遮りながら、草蒸れのカッとする田圃道に立つて、細君は手招きをした。勇は先づ氣が付いて、孫に其れと知らせたやうてあつた。すると、子は些つと此方へ見向いたが、直ぐ又外の子ども達と何やら逐ひ廻してゐる。細君は炎天に立つて暑さは暑し、忌々しさうに家へ入つた。

眞直に此方へ來るだらうと、室田も窓に凭つて待つてゐたが、子ども達は桑圃を横切つて田の畦へ降りて了まつた。而して老人の蝙蝠傘だけ僅に見えた。細君はそれても子を喜ばせやうと思つて、裏方隣の畠の百姓から買つた切り立ての西瓜を水甕へ冷した。

可い加減待ち飽倦んだ頃、子ども達は庭口から入つて來た。

「や、何うも暑い事暑い事。」と勇は肌を脱ぎながら椽側に腰掛けた。

「さあまあ、體をお拭きなさいまし。」と細君は金盥に水を湛へて來た。

「勇ちやん、お前も着物をお脱ぎ。まあ汗水漬ぢや無いか。爰へお來て、爰へ、さあ勇ちやん。」

「今行くつてば。」と口ては言つても、子は遊びに氣を取られて振向きもしない。

子ども達は庭先きの捨石の上に虫籠を並べて、名々に捕へた虫を撰分けてゐる。皆ビッショリと汗を

掻いて、顔も手足も燥つたやうに眞赤てある。

室田も見るに見かねて、細君と一所に子を呼んで汗を拭はせやうとした。

「まあ可いぢや無いか。着物なんか子どもは厭つちや居らんから、汗になつたら洗濯してやるさ、爲方が無いよ。」と舅は其んな事を言つて孫を庇ふのであつた。

着物を謂ふのでは無い、子の體を厭ふ親の情も其れきりになつた。細君は水に冷してあつた西瓜を切つて、子ども達に一切れづゝ分けてやつた。而して舅にも薦めた。西瓜を貰ふ時だけは、子も嬉しさうに母親の傍へ駈け寄つた。西瓜を食ひ盡し、虫弄りにも飽くと、子ども達は今度は廣くも無い庭の内を騒ぎ廻つた。庭石に飛び乘つたり、植物の支木に垂下つたり、殊に勇は、故々花壇の敷地にと入れさせた作土を掘り散してゐる。

「勇、土だらけになるからお舍し。」と室田が見かねて制すると、

「何有、土弄りは體に薬だよ。」と傍から老人は言つた。

其中に子ども達も遊び飽いて、各自に虫籠を持つて歸つて行つた。勇も一所に歸りたがつたが、老人は日盛りの野道を恐れて、最少し日蔭になるまで遊んでゐるやうに宥めた。夫婦が何うかして引留めやうと媚びるばかりに機嫌を取つたよりも、老人の一言を子は能く利き分けた。夫婦は顔を見合せて苦笑ひをした。

老人は風通しの好い南向きの座敷にゴロリと横になつて、

「さあ、勇、爰へ來て祖父さんと一所に午睡をお爲、今朝早かつたから。」と呼んだ。

子は何も双親を袖にする譯ては無い。けれど、父や母は直き面倒がつて、本氣に自分の對手になつてくれない、其所へ行くと祖父は、自分の言ふ事爲す事に一々眞面目て對手をしてくれる。其上双親のやうに口彌喧しい小言は言はず、言ふ事は何ても肯いてくれる。子どもの身になれば何うしても祖父に懐かずにはゐられない。一所にコロリと横になつて、蟋蟀にも大將が有るだの、虫同士戰爭するだのと、罪の無い話をしてゐる。祖父は煩がりもせず、片手に蠅を逐つてやりながら一々其れに受答をするのであつた。骨立つた細長い脛と、圓こい小さな脚とが親竹と筍を見るやうに並んだ。

話聲が聞えなくなつたと思ふと、スヤ／＼と老人は鼾を搔き出した。勇は傍に腹匍ひになつて、小い兩脚て疊をバタ／＼やりながら、何やら獨言を言ひ／＼枕元の虫籠を弄つてゐる。

「勇ちやん、祖父さんのお午睡の邪魔になりますよ。此方へお來て。」と細君は小さい聲て言つて臺所から手招きした。

子は返事をしたゞけて、其所を放れやうとは爲なかつた。

室田も大人氣無く業を煮して、祖父の目覺めぬやうに默つて子の手を攫んて臺所へ連れて來た。子は片手に虫籠を提げてゐる。

「勇、お前は祖父さんにばかり蒐り付いて、阿父さんや阿母さんは忘れて了つたの。」

子は呆れたやうな顏をして、マジ／＼と父の險脈を眺めた。

「うゝん、忘れやしない。」
「忘れやしない事は無い、忘れてるんだ。祖父さんの言ふ事は何ても肯くが、阿父さん阿母さんの言ふ事は些も肯かないぢや無いか。」
「それでも僕今日、此方の家へ來たぢや無いか。」と子は直ぐ其事だと思つて恁う言つた。
「ぢや勇ちやんは、今日から最う此方に居るね。」と傍から細君が念を押した。
子は些つと考へて、
「寢る時にや向うへ行くよ。」
「それぢや何にもなりや爲ない。寢るのは此方で阿母さんと寢て、晝間祖父さんの方へ遊びに行きや可いぢや無いか。」
「此方で寢ちや、朝學校が遲れるもの。」とベソを掻き出した。
「だから此方の學校へ變るんだよ。些つと見て御覽、直き學校は其所だから、窓から屋根が見えるから。」
「厭だ、那んな百姓の學校なんか……」とポロ／＼涙を零して、「皆に虐められるもの。山本が然う言つたけど、三年や四年の者が此方の學校と喧嘩したつて……僕然うなりや、學校なんか行かないから可い。那んな……那んな……百……百姓の……學校なんか」と泣き噦つて口も利けない。
細君も怜しくなつて、
「何だね、話をしたくらゐて最う泣いたりして。さあ、涙を拭きなさい。」と優しく言つて自分の袖で涙

を拭つてやつた。

室田は疾から默然と子の樣子を見戍つてゐたが、泣き歇むのを待つて、

「勇。」と嚴めしく形を正して呼んだ。

子は涙に濡れた目で悲しさうに父の顔を見擧げた。

「お前は一體阿父さん阿母さんの子か、それとも祖父さんの子か、何らだ？」

「何ちも子だ。」と妙な答へをする。

「嘘被仰い！。」と細君は笑ひ所ではなく、低い聲に力を入れて、「勇さんは阿父さん阿母さんの子です。勇さんの親は阿父さんと阿母さん、祖父さんは那りや勇さんの親ではありませんよ。」

「嘘だ、祖父さんも親だ、阿父さんも阿母さんも祖父さんも三人とも僕の親だ。」と堅く言ひ張つた。

夫婦も其の誤りを了解させやうにも、些つと説明の爲方が無かつた。

「馬鹿だなあ、勇は」と室田は慍るにも慍れないと云つた風て默つて了つたが、溜息を吐いて、「情無い奴だなあ、これ程に思ふ親の心持が分らんのか知ら。」

「丁度何てすよ、乳母に付けた子は情間が薄いと言ひますが、其れと同じ事て、餘り祖父さんにばかり付けて置いたものてすから、勇も彌張り・・・・」と細君は涙含んて了つた。

「勇、御覽、阿母さんは泣いてるぞ。阿父さんても阿母さんても、お前が傍に居ないと何んなに心配するか知れないぞ。お前が馬鹿の爲やうの無い者になつても管はん意りなら、そりや祖父さんても祖母さ

いでもお前の好きな人に任せて打遣つて置くけれど、お前を大きくなつて利口な豪い人に爲たいと思よから、それて阿父さんても阿母さんても傍に置かうと言ふんだ。祖父さんは年を取つてるから、阿父さんや阿母さんて無くちや、お前を利口な人間に育てる事は出來ないんだ。祖父さんはお前を言ふまゝにして甘やかにしてくれるだけて、お前を利口な人間にはしてくれないよ。利口な人間にしてやるのは阿父さんや阿母さんだよ、のう、分つたか勇。」

子は泣きながら頷いた。

「ぢや今日から此方に居るね?、今夜此方て寢るね?」と細君が聞くと、今度は首を掉つた。

「ぢや彌張り阿父さんや阿母さんの傍に居ないんだね?、祖父さんと向うにばかり居るんだね。」

「何ちにも居ない……」

「何ちにも居なくなつて、ぢや何うするのさ?」

「天へ昇つて了ふ……」と言ふと、子は聲を出して泣き出した。

其泣聲て舅は目を覺した。

「勇、勇や、何うした。何を泣いてる。」と立つて來る足音がする。

「何にも言ふんぢやないぞ、祖父さんに。」と室田は辭急しく言ひ聞かせた。

「何うした?、勇、何を泣くんだ。男が泣くものぢや無い。」と舅は親子の一所に寄つてゐるのを、事ありげにジロ〳〵見廻した。

「いゝえね、餘りお惡戯が過ぎるものですから、今些いと阿父さんに譴られまして。」と細君は然う言つた。

「子どもは餘り譴ると好くない。」と舅は苦り切つた。

細君は夕飯の支度を早目に懸つた。舅にも食べて貰ひ、子も其れて引留めやうと思つて、乏しい鷄肉の種で西洋料理に懸つた。勇が好きだと云ふので蒸しパンを拵へた。

「どれ、大分蔭つて來た、歸らうか。勇は何うするの？」と言ひ〳〵舅は庭へ降り立つた。

「まあ貴方、祖父さん、折角支度をしましたから、晩御飯を……」と細君は慌てゝ臺所を出て行かうとすると、丁度其所へ勇が虫籠を取りに來た。

「勇ちやん、西洋料理を拵へたから、最つと遊んでお居て、ねえ勇ちやん、勇ちやんは遊んでゐるねえ……」

「祖父さんも居なけりや……」

「祖父さんは御用があるから。可いぢやないか、祖父さんは先歸つても。」と小聲に言つて「お前の好きな蒸しパンも出來てるよ。」

「僕、家へ持つてつて食べたい……」と憫みを乞ふやうな怜しい目をして、母の緊張した顏をソツと見擧げた。

「家へ持つてつて？」と細君は神經的に顏中を顫はせて、「勝手にお爲！」

「歸れ！馬鹿。」と何時の間にか室田も子の背後に立つてゐた。「最う阿父さんや阿母さんの所へ來るな、死ぬまで來るな！」と憎々しげに言つて、小さな肩を一つ小突いた。

「勇、何うするの？、祖父さんは先歸るよ。」

と舅は庭から呼んだ

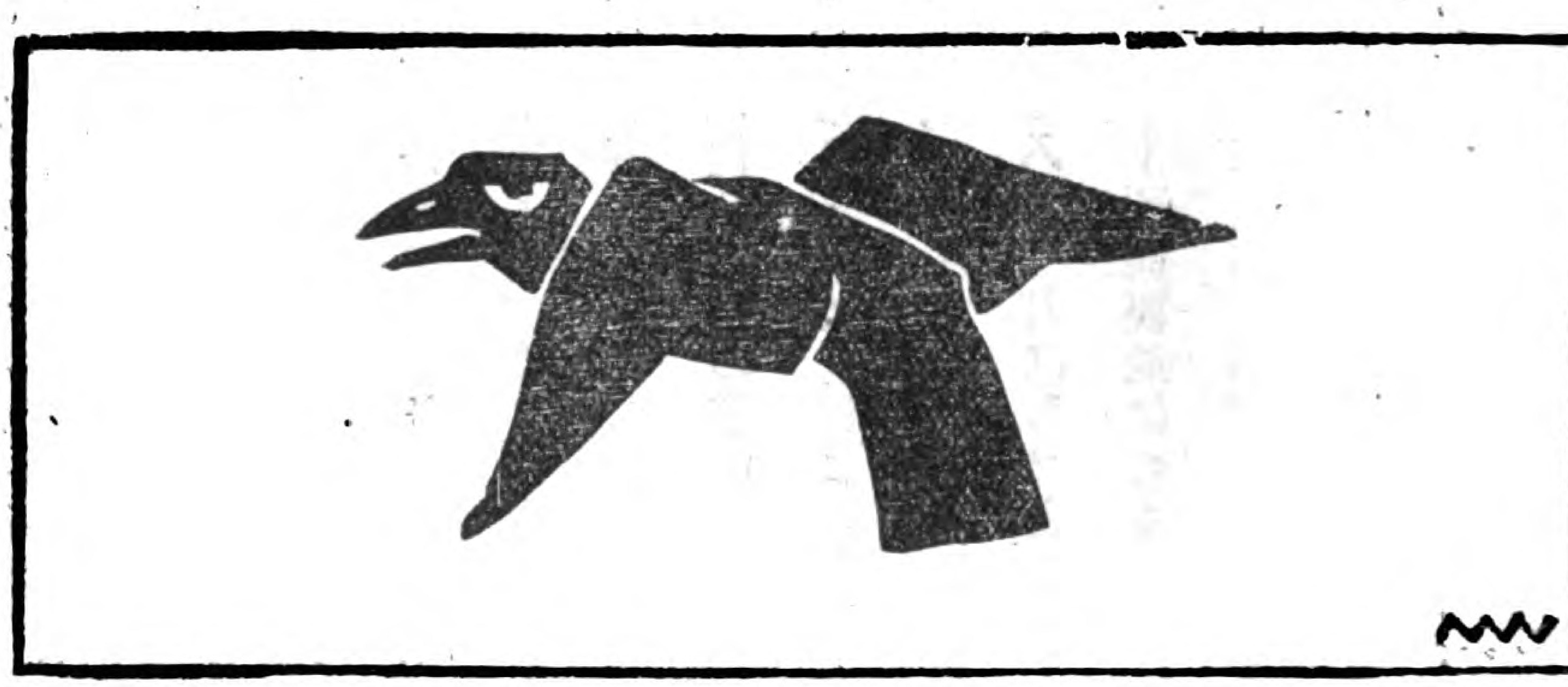
夫婦は心から其聲を呪つた。

（完）

次號の秋期大附錄に就て

次號の秋期大附錄として掲載すべき小說及び脚本は卷頭の豫告に列擧したる如くなるが、茲に此餘白を籍りて、少しく其の內容について語り置かんと欲す

昨年の秋期附錄に「罠」を、今年の春期附錄に「幼兒」を草したる田山花袋氏は更らに其最も得意の作を寄せて、例の如く文壇の視聽を聳動すべく。其位置、其手腕略ぼ相當つて現文壇の最好敵手を以て目せらるゝ眞山青果、正宗白鳥の兩氏は共に久しく其胸底に秘藏したる材料を捉へて苦心慘憺の作をなし、其量に於ても略ぼ相同じき百卌枚內外の長編を掲げて雌雄を誌上に決すべく。松本苦味氏の脚本「芥溜」は一ぜんめしや、木賃宿等に出入する浮浪漢、下等勞働者、貧民等を材として下層社會の暗黑なる生活を巧みに描き、我劇壇の注意を此一篇に集むるを得べく。又波山不規夫氏は「裏道」「舊痕」に戀愛を描きたる筆を一轉して、兄の發狂、自殺を中心として家系に流るゝ黑き血の剖解をなし、最も凄絕を極む。以上五篇何れも敢て推して以て我文壇の熟讀及び精細なる批評を乞はんと欲す（一記者しるす）



後悔

小山内薫

（一）

色々厄介になつた。

あれから半分夢中で内へ歸つた。歸ると、直ぐ床をとらして、夕方まで寐た。今起きて、湯へ這入つたが、まだ頭が重い。とても飯を食ふ氣になれない——胸の所に何か大きなものがつかへてゐるやうで、苦しくつて堪らないんだ。

そこでこの手紙を書く。この長い——多分長くなるだらう——手紙を書いたら、少しは息が自由に出來るやうになるかも知れない。

總てを正直に言ふ。今朝、君の内を出る時、僕はまだ君の言に服

してゐなかつたのだ。夜通し眠さうな顔一つしないで僕の爲に説いて呉れた君の熱心に對して、義理にも僕「分らない。」とは言へなかつた。そこで君の前では「分つた、分つた。」と、さも感心したやうに言つてはゐたものの、腹の中では少しも服してゐなかつたのだ。

併し、あれから歸り道によく〳〵考へて見た。歸つて、寐て、起きてから又考へて見た。やつぱり君の言つた事は本當だ。眞理だ。今になつて漸くそれが分つた。

實を言ふと、ゆうべ僕が君を尋ねたのは、僕のたつた一人の友達に、自分の苦しい胸の中を打明けて、同情を寄せても貰ひ、一緒に泣いても貰ひたかつたからだ――僕は自分の「哀れさ」を訴へに行つたのだ。君の内の、あの狹い階子段を上る時、僕はさう思つた。木原はきつとおれの荷物を半分背負つて呉れるだらう――ことによると全部背負つて呉れるかも知れない。この階子段を降りて歸る時、どんなにおれの肩は輕くなつてるだらう。

ところが、君はちッとも憫んで呉れなかつた。憫んで呉れぬのみか、僕はあべこべに罵られた、怒られた――頑固親爺にでも叱られるやうに叱られた。

行きなり君に罵倒された時は、僕、實際君を恨んだ。木原は無情な男だ、冷淡な男だ、殘酷な男だと思つた。僕があの時泣いたのは、自分の罪を悔いたからではない、君の言に感動したからではない。口惜しかつたからだ、腹が立つたからだ……腹の中が煮えかへる程口惜しかつたからだ。

何も僕が惡い事をした譯ではない。惡い事をしたのは寧ろ先方ぢやないか。僕が捨てたのぢやない。

女の方で總てを犧牲にするだけの勇氣がなかつたんだ。罵るなら女を罵るが好い。僕の罵られる譯は少しもない——と、斯ふ思つたんだ。

僕は決して世間に恥ぢるやうな行爲をしたのではない。あの人が氣に入つたから、氣に入つたと言つたんだ。すると向ふからも、あなたが氣に入つたと言つて來たんだ。そこで、伯母に賴んで、先方の家へ正式に結婚の申込をして貰つたんだ。ところが、先方の親にそれを斷られたんだ。事件は斯くの如く簡單にして、しかも淸潔だ。この間に何等の秘密も無ければ、何等の醜惡もない。

僕は生命を賭してもと思つてゐた事だ。女にもその位の覺悟はあると僕は信じてゐた。ところが女は一も二もなく親の意志に從つて了つたんだ。事件は餘り簡單に破れて了つた。

僕は世の中の事が餘り簡單に解決されるのを見て、悲しくなつた。悲しくつて、悲しくつて、堪らなくなつた。

それから君の所へ訴へに行つたんだ。そして、君に罵られたんだ。

僕は未練らしく同じ事を幾度も言ふ。過つて瀨戶物を毀した人が、毀れた瀨戶物のかけらを、幾度も繼ぎ合はして見るやうに……僕は慰藉を得るだらうと思つて、君の所へ行つたんだ。ところが、余計に苦痛を得て歸つて來た。僕は頭が輕くなるだらうと思つて、君の所へ行つたんだ。ところが、却つて頭を重くして歸つて來た。

君は戀を憧憬だと言ふ。憧憬が無くなれば戀も無くなるのだと言ふ。Kが他の人の妻になるのも、僕

の妻になるのも、僕が戀を失ふ點に於いては同じ結果だと言ふ。人の妻になれば戀が破れて、自分の妻になれば戀が成るやうに思ふのは大變な間違ひだ。人の妻になると戀が破れるやうに、自分の妻になつても戀は破れるのだ。結婚――この瞬間に戀は終局を告げるのだ。自分の物にならないのが戀だ、自分の物になつたら戀ぢやない。だから、女が獨身て一生を通さうとしない限り、戀する男はきつと一度は失戀の苦味を嘗めなければならないのだ。女を思つて、その女と一緒にならうとする男は、自分て自分の戀を破らうとしてゐるのだ――君はこんな事を言つた。

併し、戀は思想ぢやない、觀念ぢやないと僕が言ふと、君は又言つた――ては、君の信ずる神は思想かい、觀念かいと。そこて僕は答へた――無論、僕の信ずる神は、思想でもなければ觀念でもない。一個の存在だと。すると君は、そんなら君は神の手を握つた事があるか、神の唇を吸つた事があるか、神と一緒に寢た事があるかと聞いた。そんな經驗はないと僕が答へると、それ見給へ、戀は神と同じ物だ。觸れない所に直打があるのだ、摑めない所に深さがあるのだ。神は人の物になる憂がないから、信仰といふ憧憬は永久に破れる心配がないけれども、女は人の物になるのが當り前だから、戀といふ憧憬は破れるのが普通だ。虹はきつと消えるものだ。その消える筈の虹が消えたと言つて、泣く奴があるか、べそをかく奴があるか。世間てはさういふ人間を詩人といふさうだが、僕には常識の足りない馬鹿者としか見えない、と君は散々に僕を罵倒した。

僕は口惜しかつた。實際口惜しかつた。僕は實際生活の上て苦痛を受けて君の所へ行つたのだ。精神

にも肉體にも實際病を得て君の所へ行つたのだ。それを君は一場の議論で片づけて了はうとするのだ。唯ふらりと僕が君の所へ遊びに行つて、そこで君と僕との間に偶然涌いた議論か何ぞのやうに、君はこの實際的事件を取扱つてゐるのだ。さう思ふと、僕は君が恨めしくてならなかつた。

併し、段々考へて見ると、向の理窟は本當らしい――いや、らしいと言つては濟まぬ。確に本當だ。僕の飽く事を知らない Sehnsucht（ゼエンズフト）は、たとへKを我物にして滿足しない。Kの奧の奧の奧にある或物を掴むまでは決して滿足しないと思ふ。Kに果してそれ程の深さがあるかどうか、それも怪しい。よしそれ程の深さがあつたとしても、その深い深い底に僕が慕つてゐるやうな或物があるかどうか、それも怪しい。だが、議論は議論だ。議論が僕の實際上の慰藉にはならない。

僕の今の苦痛が、Kに對する單なる未練でないといふ事は君もよく知つてゐる筈だ。一も二もなく親の命令に盲從して、親の意志なら、自分の嫌ひな男の所へでも嫁に行かうとするやうな女に何で未練があるものか。僕の今の苦痛は、愛の目的が急に無くなつたので、その愛の重荷に壓されてゐる苦しみだ。注ぐ所のない愛情を背負つて歩いてゐる苦しみなんだ。目的が消えて、憧憬だけ殘つたのだ。この愛情をどうしよう、この憧憬をどうしよう。これが實際上の問題なんだ。

君はこれに對して實際上の方法を敎へて呉れた。併し、君の敎へて呉れた方法は、一層僕の胸を狹く苦しくした。僕は非常な侮辱を受けたやうな氣がした。

僕が本當に口惜しくて泣いたのはこの慰藉の方法を君から與へられた時だ。

君は僕の事を何でも知つてゐる。古い事から新しい事まで何でも知つてゐる。秘密な事でも公な事でも知らない事はない――殊に君は僕の舊惡を知つてゐる。

僕は廿一歳の今日までに　本能の衝動に驅られて幾人かの女を汚した。その間に戀もなければ何もなかつた。たゞ本能が形にあらはれた丈だつた。それを君は知つてゐる。

僕が基督教へ這入つたのも、その舊惡に責められたからだ。或牧師の姦淫に關する説教を聞いて、地獄の火で心臓をジリジリ燒かれるやうな氣がしたのだ。そこで、僕は「悔い改め」をした。神の前に總ての舊惡を懺悔した。悔懺する時は、からだ中の汗を絞られるやうに苦しかつたが、それからの僕の生活は極めて幸福だつた、極めて輕快だつた――それでもう總ての罪は拭つたやうに思つてゐた。それも君は知つてゐる。

間もなく、僕は同じ教會へ來るKを戀するやうになつた。生れて初めて戀をしたのだ。女の味は知つてゐても、戀の味は全く知らなかつたのだ――既に女の味を知つてゐる僕の戀は、まだ女の味を知らない人の戀よりも遙に神聖だつた。それも君は知つてゐる。

その戀が破れたので、僕は君の所へ訴へに行つたんだ。ところが、君の僕に與へて呉れた慰藉の方法は、僕の舊惡に關するものだつた。

君は僕が關係した女の内から、最も不幸な境遇にゐる者を拔いて、この際それを僕の妻にしろと言ふ。一人（ひとり）で自分の憂を消さうとするのは消極的だ。進んで人の憂を背負つて遣れ、然うすれば自分の憂が自

然に無くなるからと言ふ。

何といふ難題だらう。僕は實際難題だと思つた。戀を失つた代りに、戀のない女を娶る――そんな不條理な事がどうして出來るものかと思つた。そんな事が何で慰藉になるものかと思つた……

僕は言つた。けれども、それはもう一度神の前で悔い改めた事だからどうか許して呉れ給へ、外の事なら何でもするからと。

すると君は言つた。神の前で口先ばかりの懺悔をした所で、それが何の「悔い改め」になるものか。君が犯した女の一人を救つてこそ、君の懺悔が懺悔になるのだ。それを實行して、初めて君は「雪よりも白く」なる事が出來るのだ。君の持つて行き所のない憧憬と愛情とは、宜しくその「神より與へられた妻」に向つて注ぐべしだと。

僕は再び過去の罪の呵責に逢ふやうな氣がした。一度責められて、それに對するだけの償をして、それて濟んだ積りでゐた罪の爲に、二度責められるやうな氣がした。僕は不當だと思つた。神は餘りに嚴し過ぎると思つた――

さう思つて僕は君の內を出たのだ。

併し、歸りながら、又歸つてから、段々考へて見ると、如何にも君の言ふ事は道理だ。君の與へて呉れた方法は、一寸實行がむづかしいやうだが、思ひ切つて實行さへすれば、僕は存外幸福な人間になれるかも知れない。

成程Loveにはlostあるのみかも知れない。たとへ好いた女を自分の妻にし得たところで、そこに戀の滿足は涌いては來ない。して見れば、戀は戀なものだ。幾多の束縛があり、幾多の窮屈があらうとも、妻といふもの程神聖で樂しいものはあるまい。僕は今まで戀と妻とを一緒にして考へてゐた。君に說かれて、初めてそれが全く別の物であるのに氣がついた。僕は潔く戀を捨てよう、そして妻を取らう。ああ、妻、妻。これ程確實堅固な幸福が外にあらうか。

さて、妻には如何なる女が好いてあらうとなると、君の說だ。僕が嘗て汚した人の內で最も不幸な境遇にゐる者を娶るといふ事だ。僕にとつて、これ程好い選み方はない。これ程立派な爲事はない。僕も決心をするまでには隨分躊躇した。父や母がどういふだらう。親類がどう思ふだらう。世間で何と言ふだらう。と、色々に考へた。併し、その社會的の「辛さ」を堪へてこそ、僕の懺悔にも意味が出て來るのだ。僕自身の革命と社會者とは何の關係もない筈だ、何の交渉もない筈だ。

女の學問をどうしよう、人格をどうしよう、一時はこんな事も考へた。併し、それは自分が全力を擧げて教育すれば、どうにでもなる問題だ。却つて生じッか教育のある者より無い者の方が取扱ふには好いかも知れない。

僕はやつと決心がついた

そこで、僕は君に、僕の娶らうとする女の事を告白しなければならない。君は概括的に僕の罪惡を知つてゐるけれども、特殊的にはまだ知つてゐない事が澤山ある。

僕の關係した三人の女の内で、僕が最も不幸な境遇に居ると思ふ女は、名を神山きたと言ふ。僕より四つ年上の女だ。

君は覺えてゐるか。僕の内がまだ麻布にあつた時分、僕の内に半年程ゐた人だ。

盛岡の人だつたが、早く母に別れた。父はあるが、不治の病で腰が立たない。それでも自分は教育を受けて學問で父を養はうといふ健氣な志を立てて、父を伯父の家へ預けて一文無しで東京へ出た。

そして、あの五番町のS女學院へ學僕に這入つた。初めは大層親切にして呉れたそうだが、半月も立たない内にひどい取扱ひやうをされるやうになつた。院長のT女史の顏は君も番町にゐた時分見て知つてゐるだらう。薄痘瘡のある、丈の低い、小さな女さ。十六の時から亞米利加で教育を受けたとかいふので、大した見識だ。あの先生に虐待されたんだ。

學問なんか少しだつて教へては呉れやしない。朝から晩までこき使つて、それで食ふ物も碌に食はせないのださうだ。飯を食ふ時は一々あの洋服を著た薄痘瘡が臨檢して、何杯以上喰べてはいけないとかいふ事まで干渉するんださうだ。まあ、給金なしの下女扱ひだつたんだね。

それを可哀さうに思つて僕の母へ世話をしたのは、麹町の卵屋の小僧だ。何でも仙公とか何とかいふ十八位の小僧だつた。S女學院にも僕の家にも出入だつたんだね。

僕の母はああいつた人間だから、話を聞くと涙をこぼさぬ計りに可哀さうがつて、あしたにも内へ引取つて遣らうと言ひ出した。子供の世話を見てさへ呉れれば學費位はどうにかするとまで言つたんだ。

仙公は直ぐ先方へ行つて、その話をすると、向うも涙をこぼさぬ計りに喜んで、早速S女學院の方は暇をとつた。

僕の内へ遣つて來たのは、何でも夏か秋かの晩だつた。初めて母から引き合はされた時、その女の人はラムプの火影に小さくなつてゐた。母が斯ういふ可哀さうな女を助けるのは、度々の事だから、僕は別に珍らしいとも何とも思はなかつた。極めて冷淡なものだつた。『ああ、さうですか。何分、宜しく。』と言つた丈て、その人の顏も碌に見ずに、自分の部屋へ歸つて了つた。

初めて顏を見たのは、その明くる朝だつたと思ふ。僕が起きて、湯殿で顏を洗つて、部屋へ歸ると、その人が朝飯を持つて來て呉れて、お給仕をして呉れた。

誠におとなしい、口數を利かぬ、親切らしい人だ。さういふ不幸な境遇にゐる人にも似合はず、顏は丸々と肥つて、色が白い。少なさうな髮の毛を引ッつめて束髮にしてゐる所は何となく見すぼらしかつたが、眼には何とも言はれぬ女のやさしみがあつた。着物も粗末てはあるが、たしなみが好いかして、何となく身綺麗だつた。

神山さん——僕等はこの人を斯う呼べと母から命ぜられた——の僕に於ける第一印象は斯ういふ風て、誠に感じが好かつたんだ。

神山さんは主として女の同胞の方の世話をしてゐたので、僕はしみ〴〵話をした事も無かつた。顏を合す機會さへ少なかつた。それに、その時分の僕は、中々貴族主義だつたから、内に居候をしてゐる女

などと口を利くのは汚らはしい位にも思つてゐたのだらう。

(だから、神山さんについての僕の記憶――殊に精神上の記憶――は甚だ貧しい。)

それてゐて、僕は段々神山さんに近づいた。どういふ風に近づいたか、それは僕、全く覺えてゐない。食物に飢えてる者が食物に手を stretch out するやうに、僕は神山さんへ手を stretch out したのだ。兎に角、人間的でなかつた事は確だ。全く獸的だつたには違ひない。

前後の顧慮も無かつた。善惡の判斷も無かつた。責任の觀念も無かつた。本能が gushing out したんだ。智も情も意もない肉ばかりの僕になつたんだ。

或晩、夜中にフと眼が覺めた。

便所へ行かうと思つて、暗闇を手探りに茶の間を通り拔けやうとした。

すると、僕の足の先が、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

僕は立て續けに嚔を二つ三つした。

まあ、强ひて記憶を呼び起した所で、覺えてゐるのはこの位な事だ。

神山さんは實際苦しい境遇にゐた。こんだ僕の內を出されれば、もう行く所は何處にもなかつたんだ。だから、自分は厭だと思つても、少し位な事は我慢しなければならなかつた。それに、僕の母が殊の外やさしくて、著物にも學費にも出來るだけの事はしてゐたから、その親切にほだされた所もあつたのだらう。僕は多少その虛に乘じたといふ所があつた。その恩を笠に著て、我意を通したといふ所があつた。

それを思ふと、僕はいつでも胸を掻き毟られるやうな氣がする。

、、、、、、、、、、。、、、。、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、。

僕はそれを好い事にして、思ふ樣自分勝手を働いた……神山さんの人權に對しては僕全く盲目だつたのだ。

斯くして僕等の——僕等のとは言へないかも知れない。先方の意志は全く分らなかつたのだから——關係は幾月か續いた。僕はあらゆる智惠をふるつた。巧みに隱れた。だから、內の者でもこの事に氣のついた者は一人だつてありやしなかつた。

やがて神山さんの國の阿父さんが大層惡くなつた。これを預つてゐる伯父さんが病人を邪魔にして大層虐待をするといふ知らせが餘所からあつた。間もなく、危篤といふ電報が來た。

神山さんは取る物も取り敢へず、國へ歸つた。

神山さんは、もうそれッ切り東京へ出て來なかつた。

歸つて見たら、父の容態は左程でもなかつた。やッぱり伯父が面倒になつたので、そんな事を言つて寄越したのだらうといふやうな手紙が來た。

もう一度是非上京して御厄介になりたいのだが、前に申し上げたやうな事情で、父も伯父の家を出たし、又二人で家を持つやうになつたので、當分は上れさうもない。御厄介になつた事は死んでも忘れな

い。お子樣方の御成人を祈る――やがて又こんな手紙が來た。

それからも、度々母へは便りがあつたやうだが、たゞ段々親父の病氣はよくなるばかりだから安心して呉れといふやうな事ばかりだつたらしい。

やがて、その便りも全く絶えて了つた。

便りが絶えてから……もう三年になる。

僕の罪惡は無言に始まつて無言に終つて了つたんだ。闇黑裡に生れて闇黑裡に生を終つて了つたんだ。神と神山さんと僕との外、その罪惡を知る者は誰もないんだ。僕はもう濟んだ事だと思つてゐた。ところが、その古い罪惡を、神は今君を通して責め給ふのだ。

僕は苦しい。堪らず苦しい。忘れてゐた古い傷をナイフでせせられるやうな氣がする。

併し、僕は自己を救ふ爲に、この苦痛に勝たなければならない。この苦痛に勝つには、君の言ふ通り具體的の懺悔をしなければならない。

僕は「負ひ目」を負はなければならない。十字架につけられなければならない。手の甲と足の甲とを釘で打ちつけられなければならない。

僕は血だらけになつて、初めて救はれるのだ。僕は死んで初めて生きる事が出來るのだ。

僕は殉教者の心を以て、神山さんを救はう。神山さんの前に總ての罪を謝して、その罪の償をしよう。神山さんと一生を俱にして、神山さんをも神山さんの父をも幸福にしてやらう。

そして、神山さんを通じて、僕の汚した他の婦人達に罪を謝さう。

僕にして若しこの試煉に堪へ通す事が出來たら、失戀の苦悶などは、風にごみの飛ぶやうに、何處かへ飛んで行つて了ふだらう。

ああ、君は好い事を敎へて呉れた――いいや、君ではない、神が君を通じて敎へ給うたのだ。僕はこれを君に謝すと同時に、君を通じて現はれ給うた天なる御神に謝す。

君は自ら常に「不信者」だと言ふ。基督は人物であつて神ではないと言ふ。

併しながら、神はその「不信者」と稱する君をも捨て給はず、僕の唯一の友なるが故に、君を通じて僕に現はれ給うた。僕は今更に神の惠みの限りなきを感謝せずには居られない。

僕は暫く筆を置いて、默禱する……

あすとは言はぬ。今夜君へ出すこの手紙を書き終へると、僕は直ぐ神山さんへ謝罪の手紙を書く。神山さんはきつと聞いて呉れると思ふ。

父や母へは跡で話をすればよい。僕の兩親は決して僕のする事に異議は稱へない。それは君も知つてゐる。

この手紙を書いたら、頭がはツきりして來た。からだ中に何とも言へぬ力が籠つて來た。

最後に、も一度僕は君に感謝する。

四月二十五日夜　　三之助

繁次郎君

（二）

木原君。とんだ事が起つて來た。僕は今更君を恨みはしない。恨むなら自分を恨む。ただ世の中の事が分らなくなつて來た。

二月前に出した例の手紙の返事が漸く昨日來た。直ぐにもその趣を君の所へ知らせなければならなかつたのだが、あまり頭が亂れたので、今日になつて了つたのだ。どうか許して呉れ給へ。

僕の頭は今滅茶苦茶だ。この手紙にも嘸前後する所が多いだらう。それも許して呉れ給へ。

兎に角、先づ事件其者を書かう。

返事は神山さん自身から來たのではない。神山さんの阿父さんらしい人から來たんだ。表にも中にも、たゞ「若翁」としてあるだけて、名が書いてないのだ。

神山さんが元の通り不幸な境遇にゐてさへ呉れればこんな事にならなかつたのだ。神山さんは今非常に幸福な生活をしてゐるのだ。

或法學士の所へ片づいてゐるのだ。その法學士は今浦鹽須德の○○○にゐるのだ。役の名は分らないが、○○○とてもいふ所らしい。神山さんはその夫人として、それも浦鹽に行つてゐるのださうだ。

僕の手紙は最初神山さんの故鄕へ著いて、神山さんの阿父さんの手に這入つた。併し、表にはちやんと僕の名が書いてある。神山さんの阿父さんも當時の恩は覺えてゐるし、その恩ある家の息子から來た手紙だから、さういふ騷動を起しさうな手紙だとは夢にも氣がつかないて、その儘浦鹽へ廻送したのだ。

ところが、不幸にしてそれが神山さんの良人の手に這入つた。神山さんの良人は神山さんの前半生については殆んど何も知らない人なのださうだ。

見馴れない聞き馴れない男の名の手紙が來たので、法學士は先づそれを不思議に思つた。やがて、それが疑惑となり、嫉妬となつた。

法學士は、自分の面前て、神山さんにその手紙を讀ました。

神山さんは微笑を含んて、何の汚らはしい事が書いてあるものかといふ風て、平氣て手紙の封を裂いたそうだ。神山さんは僕を信じてゐたんだね。

五六行讀むと、神山さんは顏色を變へた。もう手が震へて先を讀む事が出來ない。法學士も顏色を變へた。『讀め、讀め。先を讀め。』と頻に促したさうだ。

神山さんは全身わな〳〵震へながら、聲も絶え絶えに、それてゝ終まて、どうにか斯うにか讀んださうだ。

勿論、厭な手紙ぢやないのだから、法學士もさう不作法に怒りはしなかつた。神山さんは僕の涙に滲染んだ手紙を、又自分の涙て浸す計りに泣いたさうだ。僕の心を汲んで呉れたのだらう、そして、その遲かつたのを悔んで呉れたのだらう。

併し、事件はそれだけては濟まなかつた。法學士は今まで神山さんを純潔無垢なんだとばかり思つてゐたのだ――僕はさうに違ひないと思つてゐるが――それがさうてなかつたと言ふので、大層歎いたさうだ。

法學士は有名な潔癖家ださうだ。

それても二週間位は堪へに堪へたのだが、とうとう堪へきれないで、離縁話を持出した。

さうなると、向ふは法律家だ。言ふ事が一々事理に適つて居る。流石神山さんの阿父さんも返す言が無かつたさうだ。

併し、兎に角、本人から爲かけた事てない事は、僕の手紙を見ても分るし、それもあの當時の境遇上、是非の分別もつかずにした事てもあらうからといふので、百方神山さんの阿父さんが調停の勞をとつたさうだ。

神山さんも、豫めそれだけの事を斷つて置かなかつたのは、私が惡かつた。併し、今更何の面目があつて故郷へ歸れようと、泣いて良人に訴へたさうだ。

法學士は素より一角の紳士だ。この手紙も誠だ、妻の心も誠だ、妻の父の心も誠だ。誠に動かされない

者は誠の無い者だと言つて、綺麗に自分の持出した離緣話を引込めたさうだ。

「君翁」といふ人――恐らくは神山さんの阿父さん――は昔流の字て、事細かにこれらの事を僕の所へ報じて呉れたのだ。

「今ては雨降つて地固まるて、却つて前より幸福に暮してゐるやうてすから、その義は御安心下さい。」と書いてあつた。

「あなたも今が勉强ざかりてす。もうきたの事などは忘れて、一生懸命に御勉學が肝心てす。この後どんな事がきたの片づきました先て起りませうと、その責任は私が負ひますから、もう決して御心配には及びません。早く社會へ出て立派なお方におなりなさいまし。蔭ながら御出世を祈つてをります。」――こんな事も書いてあつた。

僕はこの手紙を讀み終ると、三度罪に責められるやうな氣がした。道を歩いてゐて、急にあたりが眞ッ暗になつたやうな氣がした。

もう、何が何だか分らなくなつた。

一體、人間はどうしたら好いのだ。

離緣をされたのなら、まだ好い。僕はその不幸な婦人を一生慰める事も出來る。

神山さんはもう一生法學士の所にゐるだらう。その法學士のこれからの家庭。神山さんの一生。そこに絕えず何等か gloomy なものが漂はずにはをるまい。

二人は果して今まで通りに信じあつて暮す事が出來るであらうか。果して今まで通り openly に語り合ひ微笑み合ふ事が出來るだらうか。

法學士の家庭には、もう拭いても拭いても拭きとれない汚點が出來て了つたのだ。

法學士の家庭の上には、永久に去來する一團の暗雲が懸つて了つたのだ。

その汚點は誰がつけたんだ。その暗黒は誰が懸けたんだ。

僕だ。僕だ。罪を悔いた僕だ。懺悔をした僕だ。十字架を負つた僕だ。

ああ、人間はどうしたら好いんだ。

自らをも人をも幸福にしようと思つて爲た事が人をも自らをも不幸にして了つた。

僕には世の中の事が分らなくなつた。

僕が悔いさへしなかつたら、懺悔さへしなかつたら、默つてさへゐたなら——法學士の家庭は永久に幸福だつたのだ。

僕が飽くまで無垢を裝つてゐたなら、親友の君に何事も隱してゐたなら、悔ゆべき罪は一つもないといふやうな顔をしてゐたなら——神山さんの家庭は永遠に明るかつたのだ。

神山さんの老人に非常な苦勞をかけたのも、思へば僕の懺悔故だ。

ああ、悔い改め。僕は疑はざるを得なくなつた。ああ、僕には神の敎が分らなくなつた。

僕は「三度罪に責められるやうな氣がする」と前に書いたやうだ。併し、今の苦しみは、あの古い罪

を悔いる苦しさてはない。二月前(ふたつきまへ)の手紙を悔いる苦しさだ。懺悔を悔いるのだ。後悔した事を後悔するのだ。

ああ、僕には分らない。何もかも分らない。

これから僕はどうすれば好いんだ。

失戀の苦痛を救つて呉れる筈の唯一の手段は、斯くの如き滅茶苦茶な結果を生んで了つた。ああ、僕は君が羨ましい。「不信者」たる君が羨ましい。

ああ、僕はどうすれば好いんだ。

併し、決して君を恨むのではないよ。又、君に訴へるのでもないよ。

僕はもう僕一人(ひとり)て、どうにても成るやうに成る。

頭が凝結して了つたのか、もう涙も出ない。

今の感情は、寧ろ笑ひたい。ハハハハ。

六月二十七日夕　　日野三之助

木原繁次郎君



手紙の斷片

水野葉舟

「歸つて來たよ……あゝ、やつとねんがあけた！」まる四年ぶりて、小樽の支店から歸つて來た某君は、自分の顏を見ると、まづ、投げ付けるやうに斯う言つた。「おめてたう！」自分も思はず、椅子から立つて、心底嬉しくつて、笑ひが顏に出た。そして傍にあつた椅子を出して、向ひ合つては見たが、何と言つたつて、會社の事務室ては、この久し振りの友人と、落ち付いた話は出來はしない。暫く、默つて座つて居たが、

「まあ、何處かに行かうぢやないか。そしてゆつくりしよう。」と言ふと、某君も、以前から癖のやうになつてる、忙しさうな「うんうん」をやつた。

て、二人は會社を出て、銀座の方に行つた。その道で二人ともあまり久しく逢はないので、何から話していゝか、話の緒に困つたが、自分が

「如何だつた?」と何となく言ふと、某君は

「飽きたね。」と言つた。それから、二言三言話して居る中、友はつくづく斯う言つた。

「イヤ、永い間、單調な生活をして來たよ。僕もつくづくこの商賈には倦きてしまつたね。……田舍ては、何しろ氣の轉へやうも無かつたから、一層つらかつた。僕は幾度も氣がちり〳〵して、自分でも、手の付けられない事があつたよ。その時には、せめてこの欝憤を洩せと言ふので、友人に宛てゝ、隨分激烈な長い手紙を書いたつけ。だが、不思議なもんだね。夜明方まで眠らないで書いた手紙なんぞも、封をして、さあ出さうと言ふ段になると、きつと如何も、あんまり無茶苦茶に自分の感情を書きすぎてしまつた、と言ふやうな氣になつてね。大抵、出さずにしまつちまふんだ。そんな事をして出さないどいた手紙が可成、たまつてるよ……君に宛てたのも、四五通あつたつけ。如何もなんだね、僕も妻でも持つて居て、家族と一緒に行つてたのなら、あんなでもなかつたらうがね……。

「さうだつたかい……」自分はたゞ、斯う心の底から答へただけで、某君の言葉を深く味つて見なが

ら歩いた。そして

「全くだ！」と思つた。人間と言ふ奴は心のありつたけ書いた手紙は、一生懸命になつて、書いては見るものゝ、それを人に見せると言ふ段になると、何時も二の足を踏むものだ。世界中でたつた一人だけ、叩いて貰ひ度いと思ふ相手に對つた時でさへ、さうなのだ。……「何處まで卑怯でみえ坊なのだかな」

この晩は、實に愉快であつた。學校時分からの友達の二人が、久々で又逢つて、心置きなく飲んで醉つた。いづれ、此次にはその某君が小樽で獨りぢれ込んだ時分に、書いたと言ふ鬱憤の手紙を、見せて貰ふ約束もした。

て、二人はもうすつかり寢靜まつた町の中を歩いて、電車の通つて居る處まで出ると、南と、北とに別れた。自分は上野行きの電車に乘つて家に歸つて來る道に、今日話した種々な事を思ひ返して見ると、某君の言つたその手紙の事が、何處までも心に殘つて居る。全く今日の話の通りだ。實は、自分は、自分にも一つさう言ふ覺えがあるので、何となく、それを思ひ出して居たのだ。

だが、自分のは明るみに出して、誰にでも見せるやうなのではない。自分は平常、その事だけは、思ひ出すまい思ひ出すまいとして居たので、ひよつとした拍子で心に浮んで來ても、逃げ廻るやうにして、紛らして居た。でも、今夜は某君の話から、遂々それをはッと思ひ出してしまつた。

「嫌だ！」と自分で自分を叱るやうにして見たが、今夜はそんな事位ではすまない。自分は如何しても

一度、その嫌なものをはつきりとこの目で見返さねば氣がすまなくなつて來た。

一

今、おれは自分の室に歸り着いた。

身體が疲びれ切つて、頭が茫つとなつて居る。室に入ると、おれは兩手の指で頭の毛を掴んで、膝を深く机の下に入れて、目を閉つて、昨晩からの事を一つ一つ、はツきりと思ひ出して居る。

昨晩は、如何したのか珍らしく、感銘の深い晩だつた。お前の顏の表情から、言つた事から、聲まで、深くおれの胸に沁み込んで來るやうて、おれは自分で冷々する程、種々な事が感じられた。

お勢、お前はかわいさうな女だなあ。お前は單純で、無智だからかわいさうだよ。おれは實は、今日まで、お前がそんな單純な、順良な女だとは思つて居なかつたんだ。

おれは今、お前におれの心持をすつかり白狀してしまはう。おれは實にお前にすまない事をして居るんだ。お前はまだおれと言ふ人間をすつかり知らないで居る。おれもやつぱり、お前の心持と同じやうに、單純にお前に惚れて居ると思つて居る。だが、それは違つてるんだ。おれはお前を敵だと思つて居たんだ。敵と言つては少し違ふ。おれはお前を毒だと思つて居たんだ。

おれとお前とは、極く無雑作にいゝ仲になつてしまつた。

「この道は右に曲るのか？」

「えゝ、さうですよ」

斯う言ふよりか、もつと簡單で、もつと雑作が無かつた。しかし、あれまでのおれの心は決してさう簡單ではなかつたんだ。おれはぢつと目を据ゑて、覗つて居た。そして丁度いゝ機會が見付かつたから、お前の喉首に飛び付いたんだ。お前はそんな事とは知らなかつたらう。

それでも、おれには、さうするのは己を得ない事だつたんだ。おれはそれ迄には何處までもお前を恐ろしい猛獸だと思つてた。前から村岡にお前の話をよく聞いて居たんだが、その話で承知して居たお勢と言ふ女は毒であつた。たゞ浮氣者で、我儘放題に日を送つて居る女と言ふ位ではなく、何をするかしれない恐ろしい女だと思つて居た。人を人臭いとも思つて居ない、すれッからしの……この上に如何な事でも爲かねない女だと聞いて居たんだ。その中に、ひよッとした機會で、あの新年會の會場で逢つたんだ。すると、お前は何處までも取りすまして見せて居るぢやないか。おれはあの時に如何した譯だか、群々と、お前をとッつかまへてやらうと思つてしまつた。とッつかまへてその蒙つて居る皮を、引つぱいで、背負投げを喰はしてやらうと思つた。

それから、おれはお前に會ふ機會を見付けて居たんだ。村岡にもそんな事を幾度も話したが、

「惡戲がすぎらあ。」村岡はおれの言ふ事を聞くと斯う言つたつけ。その中、折よく二三度、村岡の家で

出逢した。があの時にはおれは恐かつた。お前にはうッかり手が出せないと思つてたんて、なるべく身體を縮めるやうにして、お前の正體を見ようと覗つて居た。そのおれの前て、お前は何時も怜悧らしく、少しはしやいだ、何處までも取りすました樣子をして見せた。おれはそのお前の心を飽くまでも、二重にも三重にもものが隱れて居ると見た。おれの好奇心はそれて煽り立てられるやうになつた。おれは一度ていゝからお前の假面を剝して見たい。お前が何處て本性を露すか、それが見たくてたまらなくつた。あの時には、これより外におれには何の目的も無かつた。

て、おれは猛獸使ひが豹の檻の中に入る時のやうに、顏には何氣ない平靜な心持を見せて居ながら、おれの心は注意の塊になつてお前にぶつかつたんだ。すると、お前はおれがさうするのを待つて居たやうに無雜作におれの自由になつた。

しかし、お前が男と對ひ合つた時に平氣な調子て居る樣子から、物馴れた態を見せた處まて、おれはあの後、お前と別れて來てから、その一日一夜の有樣を、何處までも思ひ出して、お前のした事なら如何な事ても見逭すまいと言ふ心て考へて見た……が、おれはあの時、一時、見當が付かなくなつてしまつたんだ。お前はおれが歸つて來るのを、何てもなく放してよこした。おれは當然、お前の口からあの歸らうとする時に、何か成程とおれの腑に落ちるやうな言葉が出るものと、豫期して居たのだ。豹が豹使ひの身體に、その首筋の處をこすり付けて、媚びる時には必ず、肉が一塊、要るわけだ。それだのに、おれの掌にはその氣味の惡い息のかゝつた跡さへ無かつた。

考へて見ると、男と女とが逢つて無責任な、自墮落な事をして一日一夜遊んだと言ふだけて、毒虫に螫された跡さへ殘つて居なかつた。おれはそれを何處までも不思議に思つた。

全く、おれは空に凄い芝居を描いて居たんだ。その何處までも色を付けて見ようとする目ては、お前のする事が小さい事にまて影が付いて見えた。て、一寸その芝居氣がなくなつて見ると、普通の心て居るお前にすッかり見當が付かなくなつてしまふんだが、おれはすぐ又、その芝居氣に立ち返つてしまつて、

「何處かに……お勢の心の中には陰忍な豹の爪が隱れて居る」と思つた。すると、おれはお前に馬鹿にされたと思つた。それて、おれの心には、お前を憎む情が加つて來た。

「必ず、あの女の正體を見てやる。その時が最後だ。その時こそ、立派におれの背を見せてやらう。そして笑つてさよなら！……と言つて出て來てやらう。あの女が三日ても四日ても悔しがつて泣くやうな目に逢はせて……」おれは腹の中てはさう思つてしまつたんだ。

その憎む心と、それと何處かお前に見當が付かない處があるのとて、よくお前の家に出かけて行つた。その中に何時の間にかおれはお前にそゝり立てられるやうに、頭の中を掻き廻はされかゝつた。と言ふのはあの若い美しい平山の事だ。

おれがお前の處に行くと必ず、平山がちやんと來て居る。そして、おれが、その室に入つて行くと、

お前達はぱッと調子をかへてしまふやうだ。今迄、その室の中で自由自在にして居た事をぱッたりと止してしまつて、おれの前には面を被つて何事も無かつたやうに見せるやうだつた。おれは其度にかッとなつてしまつた。そんな目に度々逢つて居る中に、何時となくおれはお前の周圍を離れられなくなッた。お前の周圍が氣になつて氣になつてならなくなつた。

それで、おれは二日とお前に逢はずに居ると、心の中が、何だか不安心で掻き廻はされるやうで、自然家を飛び出して行くやうになつた。あのおれが熱心にお前の處に行つたのは、お前を監視しに行つて居たのだ。あれがもしお前におれが燃えるやうになつて惚れて居たと思つて居たのなら、それは間違つてる。

何と言つたつて、おれは平山の事が嫉けてたまらない様子を見せ度くはない。おれは飽くまでもそんな心持を隱さずには居られない。だから、おれは一心になつて自分の心持をおし包んで、何事も無いやうな顔をして居た。

あの時には、先づ、おれはあの男の手からお前を奪はうと思つたんだ。その代り初めからの心持は却つて、この心持の裏になつてしまつて居た。あの男の手から奪つたら、次には一まとめにして、お前に讐を打つてやらうと思つた。

だが……今、よく考へて見ると、そんな事を思つて見たのも、やはり芝居だつたかもしれぬ。本當はやはり女に對した男の心持だつたのだな。おれが憎んで見たと言ふのも、おれの心には空想的にお前

が毒に見えたり、猛獸の爪を隱して居るやうに見えたりしたが、本當は一種のいやな情慾の刺擊から來て居たものかもしれぬ。

永々と書いて見たが、おれはこんな心持てお前の前に表はれたのだ。おれこそ、豹のやうな陰忍な心持てお前を覗つて居たんだ。

あゝだが、昨晩は感銘の深い晩だつた。お前は一體、如何言ふ心持てあの手紙を見せたんだ？……おれはあの手紙を讀んだ時に、實に驚いてしまつた。井川と言ふ人は如何な青年だ？……お秋さんなどには、實に分に過ぎた情だ。幾度思ひ返して見ても、立派な男らしい情愛だ。あの無器用な文句で、だが、何て溫い、深い、そのくせ男らしい涙のこもつた手紙だらう？……おれはあれを讀むと、思はずほろつとしてしまつた。今迄、目を尖らして居たおれの惡相があの手紙を讀むと、自然と自分の目に映つて來た。おれはハッとして身體が慄えた。すると、今迄の心持が、煙のやうに消えてしまつた。おれは實に腹の底から、沁々とお前が憐れになつて來た。

おれは全身がしんとなつたやうな氣がして、お前に對つて居たのだ。お前の言ふ事が、一つ一つ、沁々とおれの胸にこたへて來る。おれはまあ、これ迄飛んでもない馬鹿な、恐ろしい空想をして居たもんだ。何の理由もないのに、狼のやうな齒をむき出して、ぢつとお前を狙つて居たんだ。そして、何時か讐を打つてやらう……と思つて居た。

その心が、あの井川と言ふ人の手紙を讀むと、自然と蕩けるやうになつて、消えて行つてしまつた。その後では、たゞお前がかわいさうに思へてたまらなくなつて來た。

だが、おれは、

「あゝ飛んだものを見てしまつた。」と思はれてならない。あれを見て、自分の心が急に變ると、今迄、如何な者にても對つて行かうとして居た心が、急に弱く悲しくなつてしまつた。敵に對つて張り切つて居た心持が、しんみりとして來ると、おれの身體は深い穴の縁に立つて居る。お前はその穴の中に墮ちて居る。て、おれは思はずお前が無智である爲めに、憐れな人間になつて居る事を言ふと、お前は

「だから、私、自分が悲しい……」と言つて、泣きさうな顔をした。

おれは、今そのお前の一言を思ひ出して居るのだ。その言葉が何だか、おれの耳に、深く刻み付けられたやうになつて、殘つて居る……と、

「しかし、飛んだ事になつてしまつた。」

おれの心は一方からは、斯う言ふ。お勢、お前はかわいさうな女だなあ。おれには井川のやうな、如何な事でも許して、男らしく一心に女を思ふと言ふ事は、おれにはそんな立派な心持はとても出て來ない。おれにはもう、井川の手紙にあるやうな、若々しい目の光つた情熱は無い。おれはもう三十を二つも越して居るんだ。あんな純粹な漲るやうな心持を聞されると、たゞ自分が情なくなるだけだ。

お前は、昨晩おれにあの手紙を見せて置いて、つくづく

「私もこんな手紙がほしい。」と言つた。だが、あれをおれに望んだのなら、駄目だよ。しかし、おれはこゝではつきり言ふが、お前は可愛い。何と言つても、やはりおれはもうお前に惚れて居る。おれのあの惡くひねくれた心で覗つて居た報酬に、そのお前の從順な心持で對はれようとは、全く何と言つていゝか分らない。

おれはたゞ、これから後でも、お前の身體がかわいさうに思はれるのだらう。そんな事は如何でもいゝ、たゞおれはお前に惚れた……あゝ夜が更けてしまつた。今、三時を打つた。〇月〇日。

二

昨晩も、大層幸だつたな。夕方からあの更けるまで、二人つきりで居られたのは、何しろ幸だつた。だが、昨晩はあんまり、しんみりしすぎた。何だか二人つきりで、室の中に坐つて居ると、氣がだん〳〵滅入つて來て、心の底に藏つてある事まで、つい話してしまひ度くなつた。おれは遂々、初めから思つてた事を皆言つてしまつたね。この前に、お前に手紙を書いた事まで言つたつけな。すると、お前はその手紙を見度がつたが、それはつまらない事だよ。おれも家に歸つて來てから、如何な事を書いたかと思つて、讀み返して見たが、つまらない。こんなものを見たつて、お前は何にも嬉しいと思ふやうな事はないよ。

昨晩、おれがお前に言つたらう。

「こんな事にならうとは思はなかつた……」あれが、おれの本當の心持なんだ。たゞお前はおれが話しして居ると、その中にだん〳〵血が冷くなつて行くやうに、ものも何にも言はなくなつてしまつた。それは、昨晩言つたやうに、

「おれはお前をひどい目に逢はしてやる積りで、接近したんだ。お前を嫌な奴だと思つてたからね……」と言つたから、お前は驚いたらう。おれもあの時にはさう思つた。お前がきつと驚いて、おれの心持を疑つたに違ひない。しかし、おれはあの時には、自分のあの心持さへ、獨りで包んで置ききれなかつたのだ。

だが、お前にはあのおれが話した心持位は分りさうなものでは無いか。おれには、さう思はれて居たんだ。て、お前があまり凋れてしまつたので、實はひどく意外な感じがした。

「お勢も、やつぱりこんな弱い女かな。」と思つた。おれは、全く昨晩の事を思ふと、自然と涙が出て來さうな氣がする。

昨晩は…………………………………………………………

………全くおれは悲しかつた。

何と言ふ理由は無いのだが、あゝやつて二人つきりで居ると、もう世の中からすツかり遠くなつてしまつて、ぢつとあの露路の奥の薄暗い家に、お前と二人で坐つた儘、死ぬのを待つて居るやうな氣がし

た。

何て言つたらいゝだらうな。おれは自分の身體が、だん／＼腐つた土の中に引き込まれて行くやうな氣がするんだ。たゞお前があそこに坐つて居る。その蒼白い冷い顏をして、何もかもから見放されてしまつたやうに、ぢつと坐つて居るのを思ふと、おれは自分の理智からすつかり離れてしまふよ。おれは自分でも止める事の出來ないやうな氣になつて、お前の前に飛んで行く。そしてその幾年の間か溜つて沈澱して居る空氣の中に入つてしまふのだ。

だが、おれはお前が可愛い！……この外に何にも言ふ言葉はない。おれには今では何故、お前がこんな風に可愛いゝと思はれるか、自分にも分らない……たゞおれには、そこでその濁つた、冷い室の中で、自然と腐つて行くやうなお前を見ると、全身に電氣がかゝつたやうに、お前の顏が目に浮んで來るのだ。おれに向つては、この心持は實に自分で自制の力を絶つてしまふ。丁度、頭の中に恐ろしい刺激する力を持つた黴菌が、非常な力で一時に蕃殖して來るやうだ。

たゞおれは、しかしお前の室に入ると全て心持が沈んでしまふ。何しろ、お前の室の壁の色――あの濁つた鼠色の壁の色から、薄黑い天井の色それから、その狹い室の中に、種々なものを一杯置いてある、狐が穴の中に作つて居る巣のやうだ。それから、お前の生活に對する趣味が――斯う言つても何だか分るまい。長火鉢の傍に三味線のかゝつて居る處から、簞笥の上に雜然と置いてある化粧の道具、何を見ても、おれには氣が落ち付かない。周圍のものが、一つづゝ別々の力でおれの心を苛ら立たせる。

おれは何時ても、お前の室に入つて居ると、なんだか意地惡く、氣が苛つて來て、靜かに、落付いた心持になれないのは、一つはこれからだ。そして昨晩のやうに、氣が沈むと、止め度が無く、寂しくすくんてしまひさうになるのも、そこからだ。

て、そこから踊つて來ると、今、このおれの居馴れた室に坐つて見ると、おれは暗い穴の中から、爬ひ上つて來たやうだ。やつと明るみに出たと言ふ氣がするんだ。

お前は何故、そんな處に住んてるんだ？……お前は世間から忘れられてしまつて、この穴の中で冬を過して居る蛇のやうに暮してるんだな。おれはてゝでお前の室を思ふと身慄が出る。

おれは、そのお前の室に長く居ると、何だか身體がだん〳〵暗くなつて來る。寂しく世間から捨てられて行く人間のやうな氣がして來る。おれにはこれ程つらい事はない。

男と言ふものは、何か爲事をして世間と相撲をとつて居ないと寂しくつてたまらなくなるんだ。だから、お前の處に行つてると、おれは終には、逃げ出したくなつて來る。その薄暗い、日の光からまで見捨てられて居るやうな家から逃げ出して、廣々とした處に立つて、深い大きい呼吸がし度くなる。そして晴々した顏をして、逢ふ人毎に「やあ！」と聲をかけて見たい。少しても長く、お前の室の中に居ると、おれは顏が自然と、蒼黒く、皺がよつてしまつて、目付きまてキヨト〳〵として來るやうな氣がする。て、日光がこひしくなるんだ。

おれは、こんな事を書いたつて、お前に不平を言はうつてんでは無いんだぜ。おれにはお前の家に轉げ込んで行くこの心持が、何だか分らないんだ。實際おれは…………………

三

お勢。お前は何故そんなになつてしまつたんだ?

お前は何だか、心持も、身體も凋れきつてしまつてるぢやないか。何故もつと、勢を出して、昔のあの性分を何もかも皆、出して見せないんだ。

何といふ、凋れ方なんだ。お前は心が壊れかゝつてるな。お前が、そんなに壊れ出すと、おれは却つて失望してしまふばかりだ。あのみえ坊て、我の強い女が、何だつて、そんなにめそ〳〵凋れてるんだ。それでも面白いのか。

惚れたとか、何だとかつて、おれは嫌だぜ。そんな事を言ひ合つて、甘い夢を見るのも面白いかもしれないが、お前とはいやだ。何だつて、そんなにしほらしく、嫋々して居るんだ。何か言へばすぐ涙ぐむしさ。おれには、お前のその心持が心細く思はれるんだ。

何て言つたつて、おれは矢張、お前にそのもとからの性分の通りにして居て貰ひ度いんだ。今夜も、お前を見て居ると、つくづく、おれは斯う思つたよ。

「お勢は、何故こんなにしほらしくなつてしまつたんだらう?……」

おれは、今夜、何にも言ふ氣がしなかつた。全く一言もお前に言つてやりたい言葉がないんだ。ただ、「何とか、かとか言つても、女と言ふものは、心の弱いものだ。」と思ふだけだ。そして、おれは張り合ぬけがしたやうになつた。

如何考へて見ても、おれよりかお前の方が順良だ。そこに行くと、おれが、お前を可愛いと思ふ心持にはまだ妙なものが雜つて居る。

おれは露骨に思つた事を書くが、お前が可愛いのが丁度家畜が可愛いのと同じ樣な氣がする。それも實に不自然て、汚い心持て可愛い。鸚鵡が可愛いとか、綺麗な小鳥が可愛いとか。眞白な兎だとか……美しいから、聲がいいからと言つて、心を傾けて可愛がると言ふやうな心持では無いのだ。病氣した狐が、ふつとした拍子て可愛くつてたまらなくなつたと言ふ心持なんだ。太い棒を持つて、なぐつてやらうと思つたのが、あんまり憐れな目をして、見られたので、俄に心が轉じて、可愛くなつたやうだ。

おれの性質は何て言ふんだらう。今夜は稍興して居ながら、沈みきつた處があるから、嫌ても、苦しくもあるが、自分の心を自分て見詰めて居られるんだが、おれは自分と言ふものが、心底嫌ひなんだ。おれのやうに、人間がすぐ犬や猿のやうに思はれる奴はあるまい。一體これは、おれの目が惡いんだ。

世間では、人間の爲めに、自分の一生を犧して働いて居る人が澤山ある。人間の爲めに泣いて自分

身體を殺してしまふ人さへある。それだのに、おれは人間を見ると、すぐおかしくなる。て、つまり犬や猿が、吠えたり、狂つたりして居るのを見るやうな氣がするんだ。いや人の事だけでは無い、自分の事までさう思はれる。おれは自分の顔が、時に依ると、鼠の顔のやうに見えたり、猿の目付に似て居るやうに見えたりする。その野卑な、オドヽヽした顔が、ひよいと世間の人の前に向いた時には、おれはもう堪らなくなる。その時には、おれは神樣でも、何でもいゝ、おれを殺してくれらるものがあつたら、手を合して拜む。おれはもう、世の中に生きて居たくも何とも無い。

だが、その滑稽な人間達が、得々として、そこらを歩き廻つて、笑つたり、何か一かど、えらさうな樣子をして見せたりして居るのを見ると、自分を忘れてしまつて、思はず吹き出してしまふね。猿がちぐはぐの衣服を着て、何でもかでもを一呑みにしたやうな顔をして歩いて居るのを見たら、可笑からうぢやないか。

だが、おれはこんな心持を持つて居る自分が實に嫌ひなんだ。おれの目にはうるさく、人間の口付が芋蟲の口付に見えたり、犬が立つて歩いて居るやうに見えたりするんだ。これはおれにとつついてる惡魔だらうな。おれは如何かしてこの惡魔を追つぱらい度いんだ。おれも正直な心の平かな人間になつて、人間を人間の通りに見て居たい。さうして一緒に泣きも笑ひもし度いんだ。

おれが、おとなしく見えたり、親切さうに見えたり、何處までも自分を取り亂さずに居るのは、この嫌な自分の心持を隱し度いからだ。おれは決して人から正體を見られ度くはないんだ。

あ！……おれは何の爲めに、お前にこんな事を書いたらう？……

四

今朝、あれから急いで會社に往つたので、さう遲くはなかつた。平常のやうに、船の事務長から出して來る、航海中の計算表を一枚づゝ、見て行つた。だが、如何も今日はおかしい。何だかおれは、變な處に身體を持つて來られて居るやうな氣がしてならなかつた。やつぱり、今日も、おれは何にもせず、何にお考へずに、ぼんやりとお前の室で天井でも見て居た方がいゝ。だから、おれはすぐ又、お前の處に歸らうと思つてた。するとね、叔母さんから電話がかゝつて來たよ。

おれは腹の中で苦笑しながら、電話口に出るとね、

「武さん、今日はお歸りか？……」と來た。御挨拶だなと思つたが、えゝと返事をすると、「お前さん二晩も歸つて來ないもんだから、會社の方から、急に何處かに出張でもおしだつたかと思つたのでね、一寸樣子を聞く積りで、電話をかけて見たんだが……」と言ふんだ。おれはムニャムニャて切つてしまつたが、こいつは今日は家に歸らなくつちや駄目だと思つたから、足を此方に向けてしまつて、家に歸つて來ると、叔母さんは何にも知らないやうな顏をして、やれシャツが汚れたの、髭が伸びたのとおつしやるのだ。そしておれの洋服をたゝんでくれながら、「お前さんも、もう廿六だね。早くお嫁を貰ひ度いもんだ。さうして、私も安心をしたいものだね。」と、獨語だか、何だか、一寸見當の付き

かねる事をおつしやる。叔母さんはこれて、おれに釘の太いのを一本さしたつもりて居るんだ。

おれはそれを謹んて承つて置いて

「さうてすね、お嫁さんもいゝが、叔母さん、唐茄子と芋とが臺所にごろごろし出すのも心細いからな」

と言ふと、ツッと立つて、自分の室に逃げ込んて來てしまつた。いやな事だ。叔母さんなんかの、見當の違つた「眞綿て首」にかゝつて、ギユウと乘るやうぢや、助からないよ。

それから、おれは机の前に坐つて、勝手放題の事を考へて見た。

久し振りて、うるさい世界に歸つて來た！　おれはやつぱり、お前のその室がいゝよ。此頃は如何したのか、如何もこの自分の室から逃げ出し度くなるんだ。

それても、こんなにお前のその室の中に居馴れる迄には、隨分苦しかつたぜ。もう大丈夫だ。

今ては、おれは爲事よりも、種々の希望を描いて居た自分の根城よりも、お前のその室の方が戀しい。

おれの周圍は實にうるさいよ。家に飼つてある猫までに、行儀が教へられてるんだ。まして人間になると、起きるから寢るまで、横になつた、縦になつたて、善いとか、惡いとか評議の絶間なしだ。まあ考へて見てくれ、おれは背にはこの叔母さんを背負つてるんだ。そして幾間も人の座つて居ない室の家の中て、ちやんと定りきつたやうな、若旦那樣面をして、何ても几帳面て、上品な事の好きな叔母さんに、一から十まで、お指圖を受けて、それて自分の室でぼんやりして居るんだ。これて何が面白い。

あゝ、おれには親が無かつたんだからな。親父も、阿母もおれを生むと、役がすんだやうに、死んでしまつたんだ。それからはこの叔母さんの手にかゝつて、何でもかでも叔母さんの思はく通りに育つて來たんだ。永い永い廿六年と言ふもの、この叔母さんから、丁寧に箱の中に蔵ひ込まれて、キチンと鍵をおろされて居た。

人間もやつぱり獸といくらも、違はないものだ。生れてから、狭い中に入れられて居ると、そこだけが世界だと思はれるもんだ。おれも唐紙の模様が生きて動き出すかと思ふ程、同じ室の中に別に、何にも知らないで暮して來た。しかし、おれは一度もこの叔母さんに謀叛を起した事はなかつた。鍵のかゝつた箱の中で、叔母さんの向けて置いた通りに向いて居た。學校に居る中も、おれは仲間はづれて、片隅みの方に寄つて、ぢつと人のする事を見てばかり居た。だから、ほんの一人か二人しか友達もなして、大きくなつて來た……その癖、おれは自分の心では、何時でも目を見張つて、周圍のものは勿論、自分の目には見えない顏までも見て居た。

おれには妙な癖がある。何時でも自分の顏と言ふものを忘れた事はない。おれは親の顏と言ふものをまるで知らなんだからな。それで自分の顏がこんなに氣になるのかしらないが、獨で居ると、自分の顏がありありと目の中に映つて來るんだ。肥つた、皮の薄い、何時も血がのぼつて居る、にや〳〵した顏だ。だが、この顏位、急に形が變つてしまふ顏は無いな。平生はおれの顏は何だか廣々として、如何かすると居眠りでもして居るやうだが、ひよいと外のものが目の先きに出て來ると、この顏はすぐ變つてしま

る。

相手が恐ろしいと思ふと、猿がキョト〳〵するやうな顏になる。かと思ふと犬がいがみ付くやうに、貪婪な險しい顏にもなる。しかもおれの顏は如何しても虎や豹のやうに、大きい凄い顏にはならなんだ。この情ない顏を自分で見なければならない、おれは、自分ながらかわいさうだ……その次は人の事だ。世の中は皆獸の踊のやうに見える。だがこの箱に入れられて、鍵をちやんとおろされて居たおれに、如何してこんな心持が生れて來たんだらう?……何時でもこの事を思ふ度に、おれは阿父の事を思ひ出すんだ。阿父は如何な人だつたらうな。おれのこの心持と言ふ奴も、阿父の胸の中に藏つてあつたのでは無いかな。

おれが、叔母さんに面と向つて、謀反を起したのは今度始めてだ。尤も前にも一度あつたが、それは陰でこつそりとした事なので、誰も知らないですんでしまつた。と言ふのは、おれが、大學に入つた年、だから二十二の時だな、家の中で、小間使と出來てしまつた。

その時の事を考へると、おれは生きて居るものが恐ろしくなる。おれは何の爲めに、その女を自由にしたか、今に分らない。従順な、ひかへめの女だつたが、醜い女だ。…………………………………。その時のその心持と言ふものは、おれはこの身體中が盲目になつてしまつて、たつた一つ氣味の惡い目がカッと開いて居るやうだつた。

その謀反人は、おれの身體中に眠つて居る血だ！

その次は今度だ。しかも、この五月になつて以來だ。今度こそ、おれは正面から叔母さんに謀反をしたんだ。今迄は、靜かに落ち付いて自分の歩く道を、傍見もせずに歩いて居た。何處から見ても、叔母さんの目には、注文通りの息子だつた。おれは酒は嫌だし、遊びは勿論せず、これと言ふ道樂一つ無いんだ。そして、家に居れば始終、正直さうな顏をして、書を讀んで居る。

そのおれが、夜泊を始めた。歸つて來る時でも、夜更けも夜更け二時にも三時にもなる……遂々、二晩歸らなかつたり、三晩歸らなかつたりだ。しかも、鍵番の叔母さんの前に出ても、平氣な顏をして、たゞそつとその目付を覗つてゐるだけだ。

叔母さんはこの謀反人を前に置いて、此頃は思案にくれて居るのらしい。

そんな事は如何だつていゝんだ。おれはもう、このうるさい世界から逃げ出してしまひ度いよ。お前の處の事を思ふと、何とも言はれない程、うらやましいんだ。背に背負つて居るものは、目に見えるだけのものではないか、おれは其處に行くとほつとするぜ。身體一つが自由自在に輕々と置いてある。自分の思ひ度い事は思ひ、爲たい事は爲、それて居て、何方を向いて、これは自分の爲た事だ、自分の思つた事だとちやんと、皮も何も蒙らずに居られる。恐ろしいものが何處にある。

如何々に小さくつても、卑しくつても、暗くつても、結構だ。誰もお前の身體に鍵をかつとく人は無

いおや無いか？………

おれは、昨日も、朝目が覺めると、平生の薄黑い天井がちやんと、目に見える。古びた簟笥と、あの濁つた土色の壁とが頭の上にあつた。その簟笥の前に立つて、お前は化粧をして居る。おれは、それを下からぢつと見て居たが、何とも言はれないのんびりした氣になつて來てね…………

それから、そこの中て一日暮した。何にもせずに、………………………

……成程、單調な退屈しきつた心持だ。だが、それでも嬉しい。退屈でも、單調でもいゝ。このうるさく目に見えない種々なものが、身體を取り圍んで居る世界から逃げ出す事が、出來て居さへすればいい。そこの濁つた薄暗い室が、だん／＼黃昏の色に染んで來て、沈鬱な、もの悲しい心持になつて來る中に居ると、おれは自然と、死んだ阿父や、阿母の居る處が何となく目に浮んで來るやうだ。死んだと言ふ、兩親が、何處か人の目には見えない世界に居る、その世界が、だん／＼、そこの黃昏の薄暗い室の中に居ると、ぼつと、目の前に現はれて來る。おれはその時に何とも言はれない、悲しい寂しい心持になつて來る。

今迄、少しも知らなかつた心持だ。しかも、おれは、お前と言ふ女を何故こうかわいゝかわからないと同じ樣に、この心持が何故かおれには樂しく思はれる……だが、何時見ても、まだ一度も逢つた事の無い、阿父と阿母と後を向いて居る。

あゝあ、今夜も更けた。今夜はおれはこの廣々とした室の中て眠るんだ　お前はそこの狹い四疊半の

中て、獨りて病狐のやうに寢るんだらう？…………

しかし、寢床が何だ！……何處に眠つたつて同じだなあ。

五

もうおれはお前とは別れる。おれはこれだけをはツきりと書いてお前に送るんだ。お前はこの手紙を見たら必ず、怒つて泣くだらう。そのお前の心は、今、この手紙を書いて居る、おれの心によく映つて居る。

まあ面倒だが、出來るだけ辛抱して、おれはこの手紙を書くんだから、お前も怒るのを辛抱して終まで讀んでくれるがいゝ。怒るなり、泣くなりするのは、それから後の事にしてくれ。

昨夜は、おれは身慄をしてお前の家を飛び出してしまつたんだ。叔母に歸る約束をして來たと言つたのは、全く僞だ。おれはあれから、通街に出ると、車に乘つて、或る處に行つた。そこで或家に入つて泊つてしまつた。そこで、一人樂々と寢た。

昨夜、お前の身體から、實に氣味の惡い臭がした。病氣になつてる狐の身體から臭つて來る臭ひだ。その臭をかぐと、おれは又新しく、氣が付いてお前の顏をしみ〴〵と見た。醜い野卑な顏だな。その顏はおれは見飽きてるんだが、昨晩はそれが目と口とばかりに見えた。靑く濁つて、さも病み疲れたやうに

力が無い目が、ぢつとおれの顔を見て居る。そしてその猿の口のやうな汚い口が笑ひかけて居る。お前は平生の癖で帶ひろはだかで、蛇のやうに、身體を曲げて居た。おれはびつくらして自然と目をそらしてしまつた。すると、如何したのか、病狐の巣の臭ひのやうな、心持の惡い臭がして來た。突然――突然だ……おれは「ここから逃げ出さなくつちや！」と思つた。さう思ふと、おれは不思議がるお前に僞をついて、逃げ出して來てしまつた。

だが、逃げて來て、つくづく考へると、これが本當なのであつた。

おれと、お前とはとても永く、この仲を續けて行かれる二人ではない。さう言ふ事は昨夜までは決して思はなかつた。が、昨晩、その嫌な臭をかいて、そこを逃げ出して來ると、おれの心持も突然、癖が落ちるやうに變つてしまつた。

つまり、おれは病氣が治つたんだ。おれが病狐のやうなお前が何故だか可愛くつてたまらなかつたと言ふのは、何時となしに、その薄暗い、濁つた室の中で、一種の病氣に取り付かれて居たのだ。それておれの神經が、だんだん病的になつて居たのだ。その病氣が昨晩、突然治つたのだ。

お前は汚い。お前の身體はだんだん蛇の鱗のやうに靑光がして來る。さうして、衰へた肉は、骨を包みながら腐つて行きさうだ。おれは、お前の笑ふ樣子を思ひ出すと、ぞつとする。

その上に、お前は無智だ。野卑だ。おれは初めにはお前がそこに住んでるのを見て、かわいさうだ、如何して、そんな洞穴のやうな處に住んで居られるだらう……と思つた。成程、その筈だつた。狐の巣でなければ、狐は住めない。

何も、おれは今、お前に別れると言ふのに、お前を無駄に罵つて見る必要はない。いや、おれに、ただお前が汚く、寄り付けないやうに思はれたから、もうお前の處から逃げるのだ。その他は何にもない。たつた一つ、禮を言ふ事がある。おれは、お前のお蔭で叔母さんに謀反を起した。これだけがお前から貰つたお土産だ。そのお前とは別れるが、おれは決して、又叔母さんの箱の中に歸つて行くんちないんだ。これから、おれはおれの足の向いた方に向いて思ふ儘に歩き出すんだ。それでもう、お前には用はない。

さよなら!

六

久しく逢はなかつたなあ!

一昨日、おれが久し振りて行つたら、お前はびつくりしたやうな顔をしたな。何に驚いたんだ?

おれは先月の末に、お前と別れる手紙を書いたんだ。そしてそれを封まてして、ポストの處まて入れ

に行つたが、何だかつまらないやうな氣がして、止してしまつた。それから何にもしないで二月ばかり經つた。

一昨日は又、ひよつと妙な氣がし出したんだ。これだけはおれが善くない事だつた。何だか心寂しかつたんだ。如何も何をして見ても氣が乘らないので、ひよつとお前の事を思ひ出したんだ。

すると、心持つて奴は御方便なものだな、おれはすつかり、此前にお前が嫌で〳〵たまらなく思つた心持を、何時の間にか忘れてしまつて居たんだ。そして、ずつと前に、お前を何だか可愛い家畜のやうに思つた事があつた。そんな氣が又起つて來た。それでひよつくりと行つて見たんだ。

すると、お前は驚いたやうな顏をして見たつけな。その目だ。相變らず、靑く濁つて居た。と、おれはぞつとしてしまつた、夢が醒めたやうな氣がしたんだ。

だが、知らん顏をして上つて見たが、お前は此頃全くつまらない女になつてしまつたな。これが、お前の本當の木地だつたのかな。さうだら、まるで世帶やつれをした、長屋のおかみさんのやうになつてたな。そして、身體もひどく衰へて居た。黃い皺が寄つて居るやうだつた…………

それを見て居ると、おれはもうとても一分間もぢつとして居られない。何しにこんな處に迷ひ込んで來た！……と心て、幾度となしに罵つて居た。

お前は何か氣がすまないやうに、始めから終まで口數を聞かなかつた。おれは一層たまらなくなつた。

すぐ歸らうと思つた。が、ふつとした拍子で、おれは自分の書いた手紙が、お前の處にあるのを思ひ出した。すると、それを殘して置けないと思つた。それでお前を欺して使にやつたのだ。

その留守に、たしかに前の時に覺えて居た簞笥の引き出しを開けた。おれの手紙は、まだ別の人の手紙と一緒にちやんと入つて居た。たしかに心に覺えて居る二通だ。それをぬき出すと、もとのやうに抽出しをしめて、お前を待つて居た。

安心おし、外の手紙なんか見やしないよ。見度いとも思はなかつたからよ。て、何氣なく別れて來たんだがおれの方でも、こんなくだらない感情を書いたものが、お前の手にあると思ひ出す事が無いだけても安心だ。幸だ。晴々した。さよなら！……おれはもうお前に一生逢ひに行かないよ。（終）

小山内氏及び水野氏の小說の二三箇所にある……は編者の恣まゝに附する所也。當局者の手加減の分らざる今日、止むを得ざることゝとして諒察あらんことを作者及び讀者に乞ふ

（編者しるす）

和歌

尾上柴舟選

下村淳

○

夏の朝おきいてし身は茫然と縁に座りぬ耳いたく鳴る

手を足を心よう投げのびのびと縁にねころぶつかれしからだ

幼き日の我がうつしゑのまろらかに肥えたる頬のひたになつかし

酒もりの果てたる人の去りにける室にさびしく灯を點じぬる

今日もまた昨日の如くするすると事務所の中にひかれ行きけり

汗にぬれ白日の街歩むとき飲みえぬビヤのこひしかりけり

六時間吸はれしごとく簿記台に向きてはたらく我のあはれさ

新しきものを求めつ新しきものを求めつ七月に入る

かたかたと揺れ行く汽車に安らなるあまたのかほの並び並べり

○　梶原重雄

こざかしく月の登れば盆栽の杉の立樹の青みそむるも

灯をけせば窓に迫れり八月の星にごりしてしらどよむ空

風の來て灯の消えたるを涼しめる八月の夜の銀河のながれ

うす青の一重の花を夏の夜の月の前にてひとりながむる

いたいたしく夏のまひるの日が刺せる擔夫(かるこ)の胸の青き胸あて

みだらなる水蜜桃の液汁にけがるゝ君のゆびのましろさ

蔭なきを佗しがりもす海岸の棧橋筋の夏の月かげ

○　天野謙二郎

しづかなるひるのあかるきかなしみにおぼれて

ひとり林間をゆく
眠らざる瞳にうつる黎明のうすあかるみぞつめたかりける
やはらかきつかれおぼえて大麥の野に身をうづめひるの日をみる
たそがれの街にたちいてなやましき埃の底の黄なる灯をみる
たそがれのひかりぞ皮膚にこゝろよき海のにほひをかぎて歩めば
こぬれをばあかるき風のわたりゆくひるの木の間に眼とぢぬる

○　段谷秋洋

いたづらに血の湧く時をすごし來ぬふりかへりみる胸のさびしさ
神よゆるせいましがめて子われは世にそむきぬ死てふ自由を持つ子
埃白き屋根に黄色の花咲ける眞夏大路の晝のしづけさ
山も見ず海もまた見ず日のひと日煙の下に暮らしけるかな
さ夜ふけて物をおもへば暗き世をひとり歩めるこゝちこそすれ

○　逸見雨山

さわがしき人の群より隔たりて夕暮はよし物思ふべく
戀人も友も得解かぬこの愁誰かしるやと大空を見る
眞白帆に風稍見ゆる青のはて笛一つ鳴る靜かなるかな
いつの日か喜び來る夏の日のゑがく木影もなほ悲しかり
日の光青うしたゝる銅像の前の木暗に夏を覺えぬ

○　若林星骨

春の日の光明るき大空に小鳥のごとくわが心物く
強き光初夏の野にあふれたりあゝ衰への眼の痛みかな
風そよぐ海べの丘の夏草にまじりて咲ける白百合の花
初夏の明るき野べに野茨の甘きにほひをむさぼりに行く

六月のまひるしづかにやはらかき光の中を柚子の花ちる

○　　小河原素山

なめらかに青葉の上をすべり行く風の音きゝ夜を一人居り

青き葉にしたゝる雨の音聞ゆ二人たゆげに卷煙草吸ふ

さと走る電車の響仄かにも思ひ浮べて都なつかし

込み合へる三等室に立ちつくしひとりの旅のすゑをおもへる

冷やかにもの笑ひするこの性を悲しきことに思ひ初めた

○　　村田長春花

夜に入りてさびしき歌をうたひつぐ鍵盤の上をながれ來し月

水の如き風の流れをきゝてあり月出るまへのうらかなしさに

夕ぐれは悲しかりけり地虫なく馬鈴薯ばたの花白う見ゆ

「靜けきや」「否とよ寂し」かく言ひて山の木々等はうすやみに立つ

ミシンをばおどろ踏むおと壁傳ふこの東京に間借して住む

○　　古木青葉

無花果の重き葉裏を這ひいづるかはたれどきの夏の憂愁

えて心悲しまむとす曇日の庭を名もなき草のさゆらぐ

つやつやと熟れ麥の上に光る陽の白きをかすめ鳥聲いたる

夜の川の水脈の音につれびきて橋の灯のあそぶ夏の夜

柔らかく胸を壓されてあるこゝち海を白帆のわがかたにくる

○　　大地白秋

此の日頃あざむくに馴れ我もまた欺かるるを喜びてあり

靜やかにあげ玉へりしうるみ眼にうつれる丘の灯の微動かな

夕かげは野に漲れり土曜日のこの安さもて生命をはらむ

熱したる空氣のなをか一筋の道は走れりみなづき白日

○　平山靜子

譬へなど交へて君の說く故か僞りごとも少しかなしき

ふる雨に面そむけて木蘭の淋しくにほふ寺のきざはし

アネモネの匂ひの如くしめやかに哀れを誘ふ君のまなざし

水際の窓に凭れてものおもふ茴香にほふ夏のたそがれ

○　澤野白百合

かへりみればとゞめし己が淡きかげのにうしろ遠くつゞく思ひす

のこしゆくわが足跡を見て逝る人こそいかに淋しからまし

いかなる日習ひ覺ひし業ならむ驚きもせて人の別るゝ

山あひの水にながるゝ鶯の歌をきゝつゝ殘くむ人

○　荷田重

一と時の授業を終へて夏服のチョークの埃(ほこり)はたくは淋し

みどり子が深夜灯を見るまなざしに或る怪しみの輝きを見る

旅の宿は淋しかりけり洋綴のあるべきものゝ無き机など

○　中村柊花

夏山の青のさゆらぐ中に座し鳥の聲きゝ死なむとぞ思ふ

前髮に街の埃りの跡もみゆ女なるゆゑむしろ安けし

熟れて落ちし無果花なれば天地にかゝはりもなく土に横たふ

○　江上魚梁

哀しみはよみがへりきぬ靴先の埃に白き緒むすぶとき

夏かげに晩芽ふく草紫の根元に重く雨の落ちくる

明るさに眼をとぢ靑き木の下にものを思へり夏來る午後

○　桑田實

この日ごろ海なぎつゞき鴎など亂れずとべり心さびしき

ころ／＼と蛙なくなる皐月野のこの靜けさにわれは足らへり

街をゆくなほも晝間のぬくもりのたゞようてありつかれをおぼゆ

○　　　菊地野菊

安らかに五月の暗に抱かれて大野の中に君をおもへる

聲あげて歌ふに力たへがたし渚にいこひひとり海見る

○　　　尾崎渡水

風わたる椎の若葉の下の窓姉うらわかう添乳しにける

ふはふはとたんぽゝとべる小野の空いとふくらかに春の日の照る

○　　　嘉多紫濤

フラスコにすこし殘れる紫の藥のにほひ朝の眼に泌む

桐の花咲く日となりてたま／＼に判んじがたかる悲しみに逢ふ

○　　　竹田實雄

今日もまた爲すべきことをなし終へぬ心のどかに日暦を剝ぐ

あるものは眠むげに沈み或る者はあわたゞしげに動く正午かな

○　　　村島渚

あやしうも忘られぬかな市に見しさすらひ人の白き顔など

ほとゝぎす谷啼き過ぐる幾度ぞ五月曇りの日の永きかな

○　　　鈴木風影

柳島横川町の街中の柳そよぎて夕となりぬ

苗賣の聲おもしろきふれ聲に江戸の光の漂ふを見ぬ

○　　　金田春吉

月清し君が家をいて人通りまれなる橋のおばしまによる

椅子によればつかれ倦みたる心よりやゝに流るゝ冷たき涙

○　　　金子不泣

なまぬるきミルクを飲みてそこはかと寢息聞ゆ

る夜の汽車にあり
麥畑ははや熟れ初めぬあつき香をふと心付き快く吸ふ

○　本間鐵伯

しら雲は高く飛びゆく大空の碧にそまぬ色の淋しさ

○　香取秋二

時しらず吸取紙に書きし名のそのにじみにも悲しさぞ湧く

○　井田葉歌

草に寢てま夏のあをき空見れば目の前に來るごとき心地す

○　七條松操

木の實蒔くと築地のかげにうづくまり土の香かげば故郷思ほゆ

○　足立笑也

うらやすさ君も來りて裏山の青葉の中にうたをうたふ日

○　前澤夕陽

午後三時來ればをぐらきわが居間の片隅を這ふ夏のか日げ

○　小豆澤紫月

麥刈りてさびたる畑よ八月の光ほのてる野の悲しさよ

○　小杉逝水

こほろぎの聲つとやみぬわれもまた泣き寢入りにぞ寢入らんとする

和歌原稿は東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛中央公論歌稿と表記ありたし

大庭柯公の來書

倫敦を二週日にして辭し巴里に七日を送り今朝水と山との當ゼネヴァに入り申候折柄の細雨にモン、ブランは隠れたるも水蒼く流面も急なる處白鵝雨に打たるるの景を窓下に眺むるなど瑞西は日本の山水に歐洲風の設備をなしたるものに候

八月二日　柯生



俳句

秋の聲

高田蝶衣選

樓脚に秋の聲あり夜波撲つ　へき生
寺叩く夜半ンの客や秋の聲　同
漏刻に秋の聲ある寢覺かな　同
石切りの眞似も狸や秋の聲　同
秋の聲出て月見れば五位過ぐる　同
秋の聲客星帝座犯しけり　黑佛
秋の聲魂相喚ぶと里人が　同
ものゝあつて屋上走る秋の聲　同
秋の聲鬼門を塞ぐ棕梠林　同
信仰を疑はれ住むや秋の聲　同
天軍の白馬あがくか秋の聲　倨人
人魂の星となる夜や秋の聲　同
大衆に睡魔落つ時秋の聲　同
秋の聲靈境に澄む一點火　同
男嶽女嶽こだま呼びかはす秋の聲　同

酒甕を抱けば秋の聲底に　月精
行燈に默座す母子や秋の聲　同
秋の聲壁に唐藥を秘す瓢　同
童呼べば眠れり四壁秋の聲　同
師の遺子を養ひて家居す秋の聲　同
幹に叩く斧柄ゆるみも秋の聲　長春花
簳木の束ね解けしが秋の聲　同
一機持つ末寺の媼や秋の聲　同
洲を踏めば跡泌む潮も秋の聲　同
春幻を夢む流浪や秋のこゑ　無佛
禪房や芭蕉玉解く秋の聲　同
松の瘤夜なきするめり秋の聲　同
瘡落ちの水禁厭や秋のこゑ　同
筧引いて石に落すやあきの聲　寒泉
瓢兮爾うつろの腹に秋の聲　同
秋聲や秘曲請はんに師を追うて　同
陋巷に處すも書淫や秋の聲　三念
雀羅張る門の廣さや秋の聲　同
昨遊の瓢は壁に秋の聲　同
秋の聲施風呂に鳴らす竹の法螺　不寐庵
秋のこゑ草木搖れても淋しかり　同

秋の聲寢耳に笹の葉擦れとも　同
秋の聲夜の五千字は塾罰に　冬城
秋の聲脊痒ゆに笏さし入れて　同
膝抱けば歌人振りよ秋の聲　同
樓に倚るや魚飛蟲鳴も秋の聲　碌碌
秋の聲曉發す木曾の一驛舍　同
秋聲や使僧の下山夜稍更けて　同
枝折戸のさせどはづれて秋の聲　紫明
七草のよれてほぐれて秋の聲　同
秋聲に敲けば響く南瓜かな　同
戸々葭蘆を織る江南の秋の聲　雨郎
桑麻鷄犬秋聲裡わが仙居かな　同
江を上る舟人秋の聲聞くや　同
秋の聲風致林かや貝鳴子　易川
夜畠に落ちしものあり秋の聲　同
亂峰の秋聲に筏落しけり　同
秋聲や貝殼を搗く海士が家　白鳩子
竹院の賓主默坐や秋の聲　同
掛け簑の石臼摺れや秋の聲　同
秋聲や樹暗に歔欷る夜の雨　古賀江戸庵
秋聲や窮士猗頓の富おもふ　同

秋の聲水に面せる獄の窓　同
老僧の一喝秋の聲を知る　天水老
樹下石上秋の聲など聞かまくす　同
戀心あはたゞし秋の聲夕　夢筆
秋聲の畫や淡彩に堂一つ　同
伸び止めの風木々吹くや秋の聲　不騷
秋聲や物磨く翁が椋の葉に　同
潮勢に耳傾けよ秋の聲　十墟
秋の聲聞かんと鐃覗きけり　同
藏す古書喰む蟲鳴くか秋の聲　四水
秋聲や古詩卷き返す紙上より　同
野を行けば唯さく／＼と秋の聲　天梅
秋の聲麥の塵選る箕よりもす　同
秋の聲水にもたつや舟漕げば　保赤
お山枯木無風に折るゝ秋の聲　同
思ふことはかなきに落つ秋の聲　猿子
得度の日わびしらにきく秋の聲　同
仕上げ砥に壁目浮きぬ秋の聲　北巢
土用に出し桑の尋芽や秋の聲　同
鼓鳴りして湧ける清水も聲秋に　涼眉
聲の秋新鑄の鐘の音も思ふ　同

清愁に堪えて燭せば秋の聲　水竹
魚の骨叩く隣や秋の聲　同
風に閉ぢぬ裏門の戸や秋の聲　但翠
小禽の鳴くを解す秋に入れる聲　同
垣外の岸ゆけば瀬に秋の聲　江村
秋の聲事々しくも風渡る　同
我が足の音と思へど秋の聲　風車

比叡山根本中堂

内陣のくらきに秋の聲ひそむ　同

追悼

秋の聲さやかに聞きて逝きし君　喝々
振る斧に秋聲峯を渡りけり　總子
秋の聲親船子船打つ波も　水馬
秋の聲晩學のさま兒にも恥づ　梧蒼樓
水見舞ふ小舟の内も秋の聲　卯月
力なく落ちし石矢や秋の聲　蘆折
秋の聲誰が泣いて誰が聞くなるぞ　唐辛子
東明に斧とぐ杣や秋の聲　甲南人
朝市の何にそゝるや秋の聲　塊堂
淵にのぞむ奇巖樹影や秋の聲　牛丸
尾花原中の一つ家秋の聲　美川

秋の聲會堂周圍白楊樹　蘆村
長病や秀歌もあらず秋の聲　曉霞
竹風の簷を掃ふや秋の聲　連窓生
山房に舂くは誰ぞ秋の聲　丈貝
枯木挽く鋸歯こぼれや秋の聲　耳山
秋の聲塾主の亡きに閉したる　燕閣
盗伐を密告の奴や秋の聲　鬼哉生

題課　秋の蚊帳　九月十日〆切
　　　蕎麥の花　十月十日〆切

規定　△應募句は淡路假屋在高司蝶衣宛
　　　△一人三十句以下△用紙は半紙の事

○　蝶衣

夏行

師と居れば氈に鍼あり夏百日

梁星巖贊

酒よりも蕎麥の戀じや月の秋

評論

韓國併合條約

韓國併合條約は既に調印したるも、其の發表は八月廿九日以後なるべし

廿七日は韓帝即位の四週年紀念日にして、彼れは之を最後に花々しく式典を擧行する情願なりといふ、之を容るゝの雅量なきは人情なき也、去れば此の式典終りし後は條約を發表する當然のみ

韓宮の御前會議

八月廿二日韓國宮中に御前會議を開く、首相李完用恭々しく起て韓王に奏するに、日本の領土に歸するの外に途なき所以を以てし、縷々として約二時間に及ぶ

王傾聽して後瞑想一番の後曰く『洵に然るか、然らば事總て卿等の措置に任す』と、閣臣及び元老王族等暗然として聲なし、王三び諸臣を顧みて入る、諸王闃として一語なく、直ちに退廷せりといふ、何ぞ夫れ凄愴なるや

然れども韓王は朝鮮王の尊號を享有し、且つ多くの私有財産を所有するの外、年々百五十萬圓の交附を受く、其の富みの大なるに拘らず、一も治國の累を有せず、併合の結果は寧ろ韓王に取て悅ぶべきや論なし、

宗教家奮發せよ

韓國併合の後、第一韓民をして文明の仁澤に浴せしめ、我が日本國民と同等同一の幸慶を享受せしめざる可らず、之を政治的よりいへば、其の生命財産を保障すべく、之を社會的よりいへば、宗教と教育とに由て大に彼等の知德を啓發せざる可らず

政治上の事は之に任ず、社會上の事は何人か進んで之に當るべきや、吾人は卓見ある我が國の宗教家が、

起つて大に韓人濟度に努力せんことを促がす、動もすれば政治的色彩をも帶ぶるが如く見らるゝ米國宣教師等をして、獨り韓民の敎導に任ぜしむるは、決して悦ぶべき狀勢にあらず

臨時議會說

韓國併合のため、臨時議會を開くの議あり、政友會は反對なるも、國民黨は主として之を主張せんとするに似たり

臨時議會必らずしも非ならず、然れども徒らに形式に馳らんよりは、主として實蹟を擧ぐるを要す、單に法理論のみに拘泥するは未だ吾人の與みする能はざる所とす

水害の損失

一府十數縣に渉る水害は、頗ぶる激しきものあり、單に其の復舊工事費と、減租免租及び專賣局收入の減少等に由る國庫の損失のみも、二千數百萬圓に上るといふ

是れ次年度の豫算編成上容易ならざる打擊なるべし日韓併合を歡び誇る間、政費の增加を免かれず、海軍擴張また急を要すと稱せらるゝ時に方つて、測らずも更にマイナス二千數百萬圓に及ぶ、桂侯必らず顰蹙を禁じ能はざるべし

東京市の寄附金募集

水害善後のため、東京市役所自から主となりて義捐金を募集しつゝあり

浸水の慘狀盛んなる頃、其の救濟一日も忽せにしがたきもの多し、此の時に方つて先例法規にのみ拘泥しがたきが故に、義捐金を使消する亦妙ならざるに非ず

然れども其の復舊善後の計畫に至つては、工事又は衞生其の他の事、總て十二分の施設を要するが故に、市會の議を經て不足なき經費を支出するを要す、然らずんば其の施設堅實ならざる掛念あれば也、然るに却つて進んで寄附金を求む、吾人實に其の復舊善後の堅實ならざるなきやを掛念せざるを得ざる也

民政長官更迭

臺灣總督府民政長大島久滿治氏七月十七日辭表を捧げ、其の廿七日宮尾舜治氏後任事務取扱を命ぜられしが、八月廿日管船局長兼拓殖局部長内田嘉吉氏新たに民政長官に任命せられたり

内田氏は方正にして令聞あり、其の人物の醇なる、部下の心服を得る深しといふ、果して然らば臺灣玆に良民政長官を得たり

臺灣統治方針の變更

臺灣に於ける保護政策は、爾今之を緩めて製糖始め諸種の民業に厚き保護を加へざるに決せりといふ、民政長官更迭を機として、彌よ實施せらるべき乎

保護政策の放棄は可也、然かも之と同時に一切の事內地と統一の名の下に相同くせんとするが如きあらば其の利弊未だ俄かに判す可らず

理蕃の進捗

生蕃討伐は其の初歩に於て過まれるが爲め、今や主として之を軍隊に一任し、最も嚴重に其の歩武を進めつゝあり、我が軍隊は既にシナレク山等の要地を占有して、ガオガン蕃其の他の死命を制するを得しと聞く

最も頑強なるガオガン蕃等屈服せば、其の效果意外に大なるものあるべし、吾人は此の報告を耳にして頗ぶる愉快に感ず、彼等生蕃我が治化に服すれば、臺灣の過半は悉く我が皇化に歸して、其の山海の利を擧ぐると幾んど貲る可らざれば也

治水事業興らん

八月中旬の水害により、朝野の政事家擧げて治水事業の緊要なるを語れるに至れり、希くば咽元過ぎて熱さを忘るゝ勿れ

水を治むるものは先づ山を治む、吾人の曾て論ぜし如く、大に山林の濫伐を戒むると共に、養樹殖林を盛大にせざる可らず

然かも文明進歩し、人口増殖するに隨つて洪水の變益々多きは自明の理也、一方には山林を拓じて桑園米田と爲し、又低地にも住居せざるを得ざるに至れば也

此の故に河川を修築し、堤塘を牢固ならしむるとは、

當時に比して益々切要也、文明進み人口殖ゆるに隨ひて治水の業切々必要也

長與博士授爵

醫學博士長與稱吉氏其の先人專齋翁の功に由り、八月廿五日特に華族に列せられ、男爵を賜ふ、翁は內務省衞生局長として、國家衞生に殊功あり、授爵また其の當を得たりと稱して可也

墺國貴族謝罪す

墺地利男爵ロバート、ドルホッフ氏夫妻は日本來遊の途次、滊車中に於て、日本の猿と同居しがたしと傲語して一等切符にて特別室に移り、車掌ボーイ等の之を支ゆるや、加ふるに暴行を以てしたるに止まらず、書を鐵道院に贈りて其の責任を問へり、玆に於てか鐵道院の其の事情を明かにすると共に、鐵道規則違犯として告發し、ボーイ又私訴を提起せしかば、檢事局先づドルホッフ男を訊問したり、ドルホッフ男大に驚きて救解を其の大使に求め、書を鐵道院總裁に贈りて其の罪を謝せしかば、鐵道院は、其の告訴を取下ぐるに至れり

或は本罪素と申告罪にあらざるが故に、檢事の措置測る可らずといふ者あり、判事の手に歸すれば知らず、檢事丈けの手にある間は、當然取下げらるべきと言を俟たず、外國の貴族罪を謝する以上、之を許すの雅量を示して可なるのみ

ドルホッフ男の措置は實に言語道斷也、然れども通例一二等室にある日本の客は、其の横着と不作法とに於て、猿と解せらるゝも能く辯解の勇ありや否や、吾人は此の序を以て聊か借問す（以上XY生）

土耳其の向背

土耳其宰相ハッキ、パトシャ、夏期休暇を名として墺國に入り、墺國外相エーレンタール伯、獨國外相キデルレン、ウエヒテル氏と會見す、是に於て乎、歐洲新紙間、盛んに土伊獨墺アンタント（協商）說を流布するものあり

知らず是眞情を穿てる說なる可き乎、恐らくは然らず、斯くの如きは唯墺獨側の希望を反映するものに過

ざらむ

蓋し獨墺兩國が土耳其との接近を冀ふ可き理由頗る多々あり、第一は言ふ迄もなく政治上の事情也、維廉二世、英佛離間を企てゝ成らず、英露協商を妨げて成らず、加ふるに墺伊反目の結果三國同盟の根底薄弱ならんとする折柄、土耳其一國の接近と雖も、決して輕微の利益に止まらざる可し、第二は經濟上の利益也、貿易の事は少焉らく之を措くも、土耳其の現勢は其國際投資競爭の地域たる點に於て、宛然たる近東の淸國也、マセドニア鐵道事業は更らにも言はず、小亞細亞の鑛山、鐵道諸起業は、英佛獨米諸國が今正さに極力、相爭ひつゝある所也、獨逸のバグダド鐵道及附近諸鑛山に於ける、佛國のホムス、ドリポリ鐵道に於ける、米國のスエディバン鐵道及鑛業に於ける、皆其好例のみ、此間に在りて獨墺對土耳其のアンタント成らんか獨墺兩國民欣賀し、英露佛諸國民落膽す可きは、固より昭々、火を睹るか如くなる可し

然りと雖も、是獨墺兩國の立場より言ふのみ、若し其れ一轉土耳其の利害を見んか、百害あつて一利無し蓋し今日の土耳其はクリート問題解決上、先つ同烏保護の任に當れる英佛露の感情を損す可きにあらざる也

又マセドニアの土耳其勃牙利紛議の如きも、墺獨兩國の後援は英露佛と對抗して迄能く土耳其を成功せしむるの力あらざる也、是以觀之、今日土耳其の利益は飽迄中立的態度を維持し、列國の同情と好意を一身に集むるの點に在り、況んや亦列强は共に經濟的競爭の勢ひに迫られ、偏へに土耳其に阿諛せんとしつゝある時なるに於てをや、是蓋し土耳其の巧みに列國を操縱すべき好機にはあらざる乎

説く者曰く宰相ハッキ、パーシャは久しく維納也、伯林に在り、寧ろ親獨派也と、協商説の起因恐らくは玆に在らんか、然かも彼や善く斷すると共に亦善く謀る、曷くんぞ悬擧に出てん哉、但し今回の會見或はクリート問題に對する獨墺の好意を求めんとするものなるは亦決して、察知し難らざる也

英國對西藏

西藏叛亂の報に次て英國出兵の説あり、知らず英國は果して野心を包藏して東亞の秘密鄕を窺ふものと見る可き乎

何ぞ其れ然らむ、今や英國は印度内政の困難に悩さ

れ、又邊疆の保護邦シキム、ブータン、ネパル三洲の地位さへ未だ確定せしむるの力無し、何の餘裕かあつて西藏方面の發展を企圖せんや、況んや一九〇七年英露協約嚴乎として存在し、兩國間明かに清國の西藏支配權を承認し、敢て之を侵害せざるを公約せるに於てをや

然らば則ち出兵準備の内情は如何、是恐らくは英清兩國問題の懸案たるパール以下ヒマラヤ山地方の保護邦問題—英國は條約を楯として自己の保護邦なりと主張し、清國は永年朝貢等の實例を楯として自國に隸屬すと主張しつゝある——に關する間接的示威運動ならむ、而して清廷が英國出兵説を聞て狼狽せるか如きは正に其英國計略に乘りつゝある一證に非さる乎

(備考、本年五月四日英國外相サー、グレーは駐清英國代理公使に訓令し、西藏のことは清國さへ英國との條約を重んず可くは、言ふに足らず、但しネパール以下諸保護邦の隸屬問題に至ては、一日も早く決定するを要す、然らずんばネパール以下三國は英國を信せざるに至る可し、談判進捗を望むと説きたり)

紐育市政改革

八月九日、紐育市長ゲイノア氏、歐洲に發するに際し、兇漢の爲に狙撃せらる、吁嗟空前の市制改革を斷行し、腐政を一掃しつゝある老理想家、改革家、遂に其理想と改革とに禍ひせらるゝに至りし乎

顧みるに天下市政腐敗の標本なるものあらば、そは確かに過去の紐育なりき、賄賂公行し、官金私消盛んに、官紀紊亂の醜態、啻に我東京市の比のみにあらざりき、然るに今年一月、前紐育高等法院判事ゲイノア氏、市長に就任するや、猛然として醜類の同盟を一掃し、弊風を洗蕩せり、先つ市官吏の任命は是迄縁故を主とし、私黨に左右せられ、箇人の適材如何を問はざりしに、氏か今春警察慈善、消防、水道及電燈諸委員、會計官、市法律顧問以下の任命に於て全然私黨を排斥し、各部、淸廉なる專門家を以て之を充てたるは洵に數十年來始めて觀るの美擧なりき、況んや亦就任後僅か三月を經ざるに公金の浪費を整理し、一箇年三百四十五萬圓の經費大節減を實行し得たるか如き、警察行政を革新して人民に加へらるゝ不法の壓制を排去したるか如き、市船渠、公園、水道諸部の冗員を罷免

し却て着々一層有效の成績を擧けつゝあるか如き、寧ろ一般米人を驚倒し、更らに之を驚喜せしめつゝあるに於てをや、宜なるかな、其名聲爲めに隆々として高きをなし、民主黨員中、自今盛んにゲイノア大統領候補說を聞くに至りしことや

然れとも斯る大改革決行が、老市長に執りて不倶戴天的仇敵を造るは止み難き所也、陰謀起り、危難臻るも亦止み難き所也、今回の暴擧、恐らくは幾多の事情の潜在するものあらむか

唯喜ふ、ゲイノア氏齡正に六十、其半生は改革家として知られたるの人今や餘命を素志遂行の爲めに棒げて劍山血川敢て避くるの心あらざるを、然かも飜つて我東京市に於ける私黨跳梁の狀を見果して如何、吁嗟ゲイノア、遂に之を我國に見るの途無き乎

ブライアン敗北

米國民主黨領袖ウヰリアム、ジエ、ブライアン氏、故鄕ネブラスカ洲民主黨大會を支配せんとして成らす一敗地に塗れ、其主張意見、殆んと悉く排除せらる、爭點は多く地方政治に關係せりと雖も、以て氏が黨内に於ける勢力失墜せるを見る可き也

顧みるに氏や一八九六年一たび大統領候補となり、落選の非運に會せるも、黨員之を舍てす、遂に前後三回候補となりたるか如きは、實に米國史上比類無き所也、殊に其失敗の如きも氏自身の罪と曰はんよりは、寧ろ消極的政策多き民主黨其者が、膨張的、積極的たる米國の趨勢に合せさるの罪と曰ふ可きものなりき、誰か今回の報に接して一掬の涙なきものをや、庶莫氏の齡や猶僅かに五十、何ぞ捲土重來の時なきを知らむ

佛國官吏統御難

佛國首相ブリアン氏、新官吏團結法律を議會に提出す、傳ふるもの曰く、是官吏の同盟罷業を嚴禁し、同時に彼等をして直接、大臣若しくは上官に陳情するの自由を得せしめ、之を慰籍せんとするもの也と

蓋し佛國政府が、官吏の團體設立を是認せるや善し其の團體に與ふるに直接國務大臣に訴ふるの權限を以てするに至ては、確かに一大讓歩にして官吏の歡迎を受く可きを疑はす、然かも佛國政府は果して之に依つて全然官吏の同盟罷業を中止せしむるを豫期し可き乎

試みに思へ、昨年郵便局吏大同盟罷業は如何、時の

首相クレマンソオ氏は抑も何等をかなし得たる、將た數年前里昂小學校教員の同盟組織及罷業事件は如何、時の文部大臣(今の首相)ブリアン氏は法律を蔑視し、訓令を蔑視する彼等を奈何ともする能はざりしにはあらざりし乎。蓋し佛國官吏の同盟罷業は最早や一種の慣習となれり、國務大臣が必らず官吏團體の請求を容る可しとの保障あらざる限り、一法一令、何ぞ能く之を勵上することを得んや、

全米會議

全米會議、七八兩月に亘りて亞爾然丁ブエノス、アイレス府に開かる、南中北米の諸共和國、大概參加せざるは無し、

米紙クロニクル說いて曰く、是米國の辯解會議也、少くとも公然ニカラグアの叛賊を援助し、中南米諸國の疑惧を買ひたる跡仕末を付けんと欲する也、と、蓋し眞態を得たるの言也、

然かも行爲に依りて起されたる誤解(若し果して誤解ならば)の辯解は亦行爲に依りてなされ可からず、一方に於て依然暴行を恣まにしながら、他方に於て千百の詭辯を弄するも其れ遂に何の効果かあらんや、

奇なる洪牙利人の覺醒

洪牙利首相ヘデルワリー氏、墺帝に奏して曰く、洪牙利獨立黨閉息し、議院は漸く覺醒せり、是實に國民が今春の選擧に於て覺醒せる結果に外ならずと、

然り今回の洪牙利議會は平穩無事也、政府萬歲也、墺國御味方の得意想ふ可し、然かも首相の所謂國民の覺醒は、是軍隊と銃劍との力に依りて選擧人を壓迫し、あらゆる干涉を試みて得來りたる『覺醒』なるを奈何、

(懐沙隱客)

新刊批評

▲大久保利通傳（上卷）
勝田孫彌著　同文館發行

曩きに「西郷隆盛傳」を著はしたる著者が、十有五六年にして初めて本書を出版す。史料は主として利通の日記により、引用書目は各公卿家の記錄を初め民間の著述百數十種に及ぶ。評論の當否については或は異議ある人もあらんかなれど、史料の該博にして正確なるについては何人も賞讃せざる能はざるべし、斯の如き眞面目なる研究については斯道の大家等の精緻なる批評あらんことを望む。吾人も亦精讀の上卑見を陳ずることあるべし（定價金貳圓）

▲日本の現在及將來
田尻博士著　同文館發行

經濟財政の立場より我國の現在及び將來を論じたるものにして、此方面に於て田尻博士が我國第一の人たるは何人も疑はざる所、從て此書も亦苟も我國運の隆替に關心する人の一讀せざるべからざるもの也。只内容は嘗て日本經濟雜誌社より發行せられたる「方今の急務」と略ぼ似たるものなれども、かゝる著述は幾度讀むも讀者に益を與ふ（定價五十錢）

▲山陽詩鈔註釋
蜂谷柳莊著　梁江堂發行

山陽詩鈔一部「日本外史」以上に山陽の眞面目を發露せるもの、此書は即ち詩鈔に向て叮嚀なる註釋を加へたるものにして、一般に漢學の力の衰へたる今日、此書によりて山陽の眞面目を知り得るものも少からざるべし（定價七十五錢）

▲笛
小山内薫著　春陽堂發行

小山内氏の短篇廿篇を收む。吾人は此れ迄小山内氏の作物に多くの興味を有つ能はざりしが、此書に載せたる序文によつて、氏の作物に對する從來の感じの誤なりしかを思ひ、數篇を閲讀せるに、中には矢張り感服せざるものもあれども、又中にはなか〳〵一種獨得の面白味あつて、江湖に推奬するに足るものもあり。此書が安寧秩序を亂すものとして發賣禁止せられたりとはハテ面妖な（定價八十錢）

▲南極探檢
栗原敏次郎譯補　内外出版協會發行

南極探檢の壯擧目睫の間に迫れる折柄、かゝる書を一讀して魂を極南の天地に遊ばしむるも亦愉快なるべし（定價四十錢）

▲俳諧寺一茶
一茶同好會發行

曩きに「七番日記」を發行したる一茶同好會の編著する所にして一茶研究家として知られたる東松露香氏の「俳諧寺一茶」の外諸家の一茶研究、及び年譜、家系、俳系等を添へたり（定價一圓十錢）

▲當世細君氣質

原著の何なるかを示しあらざれば原著と比較して批評する能はざるを遺憾とすれども輕妙なる滑稽あり、皮肉なる諷刺あり、讀みて面白し（定價四十錢）

▲手紙自由自在
桑田春風編　啓成社發行

一度「手紙雜誌」に掲載せられたる諸名家の手紙に關する意見を蒐錄したるものにして、卷頭の徳富蘇峯氏の意見等は最も面白し（定價八十錢）

▲新譯挿圖近松傑作集（卷之三）　水谷不倒校註　早稻田大學出版部發行

本卷に收むる所「一心二河白道」「薩摩歌」「ひぢりめん卯月の紅葉」「卯月の潤色」「傾城反魂香」「孕常盤」「源氏冷泉節」「國性爺合戰」「女殺油地獄」「心中宵庚申」等也。かゝる出版物は從來動もすれば中絶して第一卷等を求めたる人に非常の迷惑をかくること少からざりしが、今回は流石に諸大家が責任を分擔してやれる丈けありて短日月の間に續々刊行せらるゝは文壇の爲めに賀すべし（定價二圓五十錢）

▲哲人山田方谷　三島復著　文華堂店發行

陽明學の大家にして「藤田東湖の學問ある人」と稱せられたる山田方谷を評傳せるものにして、讀者を益する所多し。添ふるに「陽明學講話」外數篇を以てせり（定價一圓二十五錢）

▲青年期の研究　元良勇次郎外數氏譯　同文館發行

元良博士、中島博士、速水學士、青木學士の共譯に成れるもの也。原著スタンリー、ホール教授の「アドレセンス」は歐米に嘖々の好評ある大著述にして、青年自身及び青年の如何なるものなるかを知るを要する父兄等にとつて必らず一讀すべき著也。只此譯書が全部の嚴密なる飜譯にあらずして抄譯なるは甚だ慊らぬ心地す。かゝる好著はよし日本向ならざる所あるも全部の飜譯あらんことを希望す（定價二圓）

▲和譯戰國策　田岡嶺雲譯註　玄黃社發行

和譯漢文叢書の第三編として發行せられたるものにして戰國策を假字交り文に書き改めたるもの也。固有名詞及び代名詞等に括弧を附して註釋を施せるは便利なれども、餘りに漢文直譯體にして、之を讀み得る人は又句讀反點附の漢文を讀むと餘りに異りたる所なかるべし。今少し何とか工夫ありさうに思はる。（定價一圓二十錢）

▲漢文大意　山路愛山著　今古堂發行

「思想家としての孔子」「莊子論」「韓愈を論ず」「宋學概論」「朱熹」「陸象山」「王陽明の哲學」「論語に現はれたる經濟學」「孟子にあらはれたる經濟學」「中庸は子思の作に非ず」等の文章を收めたり。漢學大意といふ書名の當否は別として、何れも分り易く、面白く、漢學の名著及び名家等を論評せるは著者獨特の壇場也（定價六十五錢）

▲赤穗義士之書簡　宇治樂文編　良明堂發行

赤穗義士之書簡一百七を集め之に註釋として一々手紙を書ける場合の狀況等を記せり懦夫をして起たしむるに足るもの少からず、尙卷末に四十七士の簡單なる小傳を附せり（定價一圓廿錢）

▲夢二畫集（旅の卷）　竹久夢二著　洛陽堂發行

夢二の畫風も少しづゝ變つて來つゝあるやうだが此卷では矢張り「都おどりにて」などが面白い。文章には面白いのもあるが、ハイカツて厭味なのもある。（定價七十錢）

▲堀部安兵衞　碧瑠璃園著　隆文館發行

四十七士中其名最も人口に膾炙せらるゝものゝ一人たる堀部安兵衞を主人公とせる歷史小說にして、文章はすら〳〵と讀者に[illegible]きあれども、文藝上左したる價値を置く能はざるは慊らぬ心地す。我國の歷史小說が

して今少し發達せしむる道なきものにや、史劇物の流行する今日、かゝる野心を抱くものなきを怪む（定價九十錢）

▲いろは文庫（上編）　爲永春水著　三教書院發行

赤穗復讐の事を軟かく小說流に書きなせるものにして、當時隨分世間に持て囃されたるものなり。素より假名手本には及ばざるもこれにも亦捨て難き妙味なきにあらず（定價廿五錢）

▲禮嚴法師歌集

明治歌壇の大立物たる與謝野寛氏の父君なる禮嚴法師の歌集也。餘りに坊主臭く、餘り教訓臭くて讀みて面白からざるものあれども、叙景などの歌には佳なるものも少からず（定價五十錢）

▲西洋史講話　箕作元八著　開成館發行

篤學博識を以て有名なる箕作博士が數年の歲月を費やして著はしたる大著にして斯界に貢献する所極めて多かるべきを疑はず。精讀の上次號に精評すべし（定價金五圓）

▲ポケット女四書　龜谷正司編　藏六書院發行

「女大學」「女小學」「女中庸」「女今川」の四書を集めたる袖珍本にして、「女大學」には福澤翁、下田女史、安積艮齋、村上博士外數氏の講評を附し、其他の三種には下田女史、三輪田女史等の講評あり。女子教育を如何にすべきは實に現下の大問題なり。此書徳川時代より明治に至るまでの女子教育の理想を窺ふべきにして世人の參考となること尠からず（定價三十錢）

▲出雲の阿國　伊原青々園作　同文館發行

女寅が門之助と改名するについて中幕として歌舞伎座に演ぜられたるものにして、舞臺の面華やかに變化あるやうに書かれたる丈けが著書の手柄なるべし（定價廿錢）

福本日南氏に**山路愛山論**を求めたら、先生例の如く机に向て端座し、卷紙を展べ肩を張つて筆を眞直に持ち、重々しく何か書いて渡された。受取つて見ると極く簡單なもの！「よく書くねえ！」

徳富蘇峯氏に同じ評論を求めたら「愛山はよく書くんぢやないか。あの位書けば He speaks himself て、他から彼について speak する必要がないんぢやないか」と答へられた。

二氏の文章の特徵は此短き答の中にもありありと見えるやうに思はれる（一記者）

○壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅拾錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	國外
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵稅共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は**本郷西片町十番地反省社**と指定し拂渡局を**東京東片町局**と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は**東京三十四番**なりこれにより御送金の方は**登記料壹錢**を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず認まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十三年八月廿七日印刷納本
明治四十三年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大久保利通傳

著者廿年の苦心

維新の活歴史

西郷隆盛傳の著者として我が史傳界に一新生面を開きたる勝田孫彌先生廿年の苦心に成れる大著＝其の資料は主として公の日記―手簡―往復文書―公の後たる大久保侯―牧野男を始め故伊藤公―大山公―松方侯―井上侯―大隈伯―故品川子―故税所子―黒田子―高崎男―奈良原男―本田男其他公の生前最も密切の關係ありし諸公の直話に採り且つ著者自ら當時の活動舞臺を蹈破して最も事實の蒐集に努めたり故に名は大久保利通傳なりと雖も實は最も信憑すべき一部の維新回天史に外ならず其の關渉する所政治經濟を始め有らゆる方面に及べり全部三卷二千二百頁別に附錄として維新當時の政務に關する重要書類草稿―諸公との往復文書等を鮮明に製版して之を添たり政治家―實業家―敎育家―歷史家は勿論現代一般人士の必讀を要す

上卷出來 金貳圓

郵稅內地十六錢 滿韓臺灣三十五錢　中卷九月 下卷附錄十月出來

總目錄進呈（送料二錢）

同文館　東京神田　振替東京一三五

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
明治四十三年九月一日發行（每月一回一日發行）